

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~蒼き翼の天使~

八神刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers～蒼き翼の天使～

### 【NZコード】

N9426M

### 【作者名】

八神刹那

### 【あらすじ】

世界を救った青年、柳瀬 大護は魔法の世界ミッドチルダへ。彼はまた大切な人のもとへ帰れるのか?そして、宿命の対決に終止符を打てるのか?  
そして、彼は選択する。

## プロローグ

塔が崩れていく。ここで7人の戦士と8人の闇の戦士との最後の戦いがあった。その塔の最上階で1人の青年が瓦礫に寄り掛かっていた。青年は白髪で手には1本の刀と1本の大刀が握られている。

「ここまでか・・・」

青年がつぶやいた。彼は今大量の血を流している。無のノアとの戦いで傷ついた傷だ。空を見上げると星空があった。

「あの時と同じ空か・・・」

青年は2本の剣を鞘にしまい、田を閉じた。今までの戦いの日々を思い出す。

彼は9年間という長い戦いの日々に身を置いていた。母を失い。父を自らの手で殺し。幾百人の人をあやめ。兄と呼べる者を失い。大事な仲間を失いながらも彼は戦つた。遠くで自分の名を呼ぶ大切な人の声がする。

「フェルト・・・」

その大切な人の名をつぶやき青年は闇に落ちていった。

その時、青年は別世界の扉をくぐり抜けてしまった。それが青年の新たな戦いの幕開けとなつた。

## 第一話 ファーストコンタクト

ミッドチルダ北部の森。そこで次元震があつた。時空管理局は機動六課のフォワード部隊の隊長。高町なのはとフェイト・T・ハラオウンに調査を依頼した。フェイトちゃん。何かあつた？  
亞麻色で白いバリアジャケットが特徴の高町なのはが別の場所で調査しているフェイト・T・ハラオウンに念話で聞く。

こつちは何もないよ。あつても建物の瓦礫ぐらいしか……。そつちは？

こつちもそつちと同じ……。待つて！生体反応あり！！  
2人はその場所へ飛んだ。

白髪の青年。柳瀬 大護は目を覚ました。

「オレは……生きているのか……」

手元の2本の刀を見る。自分でも不思議に思っている。あの塔から落ちてなぜ無事なのか、そして、自分のいた場所にはこんな場所はなかつたこと。

「オレは……」

と考えて空を見上げるとそこには2つの人影が見えた。

「帝国兵つ！？」

鎧のない刀“雷龍丸”に持ち構える。そこに亞麻色の髪の少女と金髪の少女が降りて來た。

「待つて下さい！時空管理局の者です！あなたに危害をつもりはありません！！」金髪で黒いバリアジャケット姿の少女が言つ。

「管理局？メガロの組織か！？」  
警戒を解かない大護。

（女はさすがに斬るわけにはいかねえな……）

大護は傷から大量の血が出ている。「それより早く手当しないと…」  
亞麻色の髪の少女が大護の知らない力で傷口の止血をする。

（こいつらは帝国の者じゃないらしいな・・・）

警戒を解き柄から手を離す。

「大丈夫ですか？こんなにケガしていくて・・・」

少女が尋ねる。

「平気だ・・・」

礼を言おうとした時、3人の周りを丸い形の機械が囮んだ。

「ガジェット！？なのは！その人をお願い！！」

金髪の少女はそう言つて斧のような武器で機械を切り倒していく。大護も立ち上がり雷龍丸に手を添え臨戦体勢に入る。

「ダメだよ！そんなケガじゃ！！」

亜麻色の髪の少女が止めようとするが。

「オレのことより前を見ろ！！」2人の前方から機械が迫り来る。少女が応戦するが数が違う。すると大護の体を雷のような何かが覆つた。そして

「オレは・・・！オレはまだ倒れるわけにはいかねえ！！」

叫ぶ声とともに少女の視界から姿が消えた。と言うよりは彼女には見えなかつた。

大護は高速の世界で機械を斬る。そして、止まり雷龍丸を鞘に

チンッ！

仕舞うと同時に機械が爆散した。

「嘘・・・」

目の前で起こつた出来事に焦る2人の少女。

「あなたは一体・・・」

亜麻色の髪の少女が大護に声をかけた時。大護は意識を失い。地面に倒れた。

これがこの世界での柳瀬 大護の戦いの始まりである。

その頃ミッドチルダのどこかで一人の男が波動を感じた。  
「この感じ・・・あいつが来たか・・・。どっちの血を撰んだんだ  
？天使か墮天使か・・・」  
その男はある方向をじっと見つめていた。

## 第一話 機動六課

大護は暗闇の中にいた。

「ここには……」

周りを見るが何もない。

「お前は選択しなければならない……。未来の自分を……」  
後ろから声がした。フードを被っている男だ。

「どういう意味だ！？」

「大護……本当の選択をしろ……」

そう言って男は立ち去ろうとする。

「待つて！待つてくれ！にい……」

「さん……」

カバツと布団をめぐり起きた。

「……夢？ それにここは……病室？ オレは確か……」

過去の記憶を掘り起こす大護

（ダーナを倒して……塔が落ちて、気が着いたら森にいて変な機械に襲われて……それから……）

考えながら窓の外を見る。そこには

「ここどこ？」彼の知っている世界とは違う世界があつた。昼間だが2つの用が見える。さらに自分のいた世界とは違う文明がそこにあつた。

「…………まずいな……でもなんで？」

また考えていると

「失礼します。あつ！ もう起きても大丈夫なんですか？」  
ドアが開き。茶髪の髪の少女が入つて來た。その後ろから

「彼、もう起きたの？」

森で会つた金髪の少女と

「もう大丈夫なの？」

亞麻色の髪の少女が入つて來た。2人はそれぞれ大護の2本の刀“雷龍丸”と大刀“戰刀”を持つていた。

「…………」

あまりにも状況が掴めていない大護は困惑していた。「自己紹介しますね。私はここ古代遺物管理部機動六課部隊長の八神はやてです。」

茶髪の髪の少女が自己紹介する。

「時空管理局の執務官のフェイト・T・ハラオウン。」

金髪のロングヘアの少女がはやてに続く。

「戦技教導官の高町なのはです。昨日はありがとうございました。」

「戦技教導官の高町なのはです。昨日はありがとうございました。」

「昨日？」

「そうですよ。あなたは昨日ここに運ばれましたから。その前にケガは大丈夫なんですか？ピンピンしますけど……」

はやてが心配する。

「ケガ？大丈夫だよ。一日寝たからもひつ治つた。」

笑顔で答える大護。

「それにすまなかつたな。治療までしてもらつちゃつて……」

「いえ。それよりあなたのことについて教えてくれませんか？」

はやてが尋ねる。

「わかつた。それよりオレに敬語はやめてくれ。こっちがこっちがこんな態度だからな。」

「そうか？おおきになつ。で、名前は？」

はやては早速素で話し始める。

「オレは柳瀬 大護。十二隊六番隊隊長の者だ。それよりここつて地球じゃないよな？」

「柳瀬さんは地球出身なんですか？」

なのはが聞く。

「ああ。それより名前で呼んでくれ。名前で呼ばれるのは少し苦手だからな。」

「なるほど。オレは次元漂流者つてやつで。オレの世界は平行世界と・・・」

3人から説明を受けた大護は驚いていた。

「そうなるね。大護くんはこれからどうするんや?」はやてが聞く。「元の世界が見つかるまでここにいるしかないか・・・なんか食いぶちがあれば良いけど・・・」

「だったらここで働く?」はやてが提案した。

「大護くん強いって聞いたしここなら宿もあるから。」

「いや、助けてもらつたのにそこまでお世話になるわけにはいかねえだろ?」

「じゃあどーやって食いぶち探すんや?」

「それは・・・」

「それに他で働くよつ」にいたほうが元の世界見つけやすいよ。」  
なのはが言つ。

「そうだよ。それに大護の事情も知りたいし。」

3人の攻撃に大護が折れた「まあ、良いだろ。よろしくな。」

大護は3人に案内され食堂で昼食を食べていた。

「じゃあ午後は六課内部の見学やな!」

はやてが言つ。

「オレはどんな仕事するんだ?」

「とりあえず私とフォイトちゃんと同じ前線で戦う」とになるけど・

・・大丈夫?」

なのはが聞く。

「戦闘か・・・べつに構わないけど。」「そうなるとバリアジャケットが必要だよね・・・」フェイトが言う。

「バリアジャケット?」

「簡単に言えば防護服。あたしとなのはが森で会った時着てた服のこと。」

「あー、いうのを着るのか・・・。別にオレはいらねえけど・・・」大護が言おうとした時

「主、はやて。ここにおられましたか。」

「ピンクの髪をポーテールにした女性と

「フォワードメンバーの訓練終わつたぜ。」

赤い髪をおさげにした少女とその後ろに4人の少年少女がいた。

「シグナムにヴィータ。それに4人ともお疲れさんや。」

「――――はいつ！」――はやての言葉に4人が返事をする。

「主、この者は?」

ピンクの髪の女性が大護に視線を移す。

「こいつ昨日重傷で運ばれて來た・・・」

おさげの少女が言う。

「この人は民間協力者の・・・」

はやてが言う前に

「自己紹介ぐらい自分するさ。オレは柳瀬 大護。はやての言う通り民間協力者だ。」

「あたしは“鉄槌の騎士”ヴィータよろしくな!」ヴィータと握手する。

「よろしく。」

「ヴォルケンリッター。“烈火の将”のシグナムだ。その一本の刀はお前のか?」

シグナムが大護の横の2本の刀を指差す。

「そうだ。オレの相棒だ。」

「大護くん。こっちの4人が前線部隊のフォワード達。ティアナか

ら自己紹介して、

なのはの言葉に

「テ、ティアナ・ランスター。一等陸士です！」

オレンジの髪の少女が緊張しながら

「スバル・ナカジマ。二等陸士です！！」

青い短髪の少女が元気よく

「エリオ・モンティアル。三等陸士です。」

赤い髪の少年がスバルに負けないくらい元気に

「キ、キヤロ・ル・ルシエ。三等陸士です。」の子はフリードで言います。

ピンクの髪の少女が緊張しながら

「きゅくゅ～」

その隣の小さい竜が鳴く。「柳瀬 大護だ。よろしくな。」

「そういえば。ケガは平気なのか？ 昨日あんなに血流してたのに・・・

・

ヴィータが聞く。

「一日寝たからもう治った。心配してたのか？」

大護がヴィータはからかうように言うと

「柳瀬さんは何の係なんですか？」

ティアナがはやてに尋ねる。

「大護くんはティアナ達と同じ前線で働いてもらおうと思ってる。彼、かなり強いらしいしな。だから、午後から実力テストをするんですよ。」

はやてが4人に説明する。「オレを呼ぶ時は名前で呼んでくれ。名字で呼ばれるのはキライなんだ。」

大護は“雷龍丸”を腰に差し、“戦刀”を背負いながら言つ。

「主、はやて。その実力テスト、私と柳瀬の模擬戦にさせてもらえませんか？」シグナムが突然爆弾発言をした。

「シグナム！？ 急に何言つんや！？」

焦るはやて。

「柳瀬が“ただ者”ではないからです。彼の眼がそう語っています

し纏つている空気が我々とは違うからです。」

「でも、大護くんは昨日重傷で運ばれて来たんよ！それにまだバリアジャケットもないんよ！その状況で・・・」

はやてが言おうとした時

「オレはべつに良いけど？」

平然と言つた大護。

「大護くん！？何言つてんの！？」

これに驚いたのはなのはである。

「べつに模擬戦をするのは構わないよ。つて言つたんだけど」

「ケガは大丈夫なの？」

フェイトが尋ねる。

「へーき。へーき。もう大丈夫だつてさつき言つたけど。」

「はあー。本人が良いつて言つてるし・・・。許可する。ただし！」

「ケガだけはせーへんようにな！」

2人に言つはやて。

「それは良いんだけど・・・。大護くんの刀つて本物だから、シャリーーのところで非殺傷設定にしてもらわないと。」

なのはが言つていると

「呼びました？」

ドアから長い茶髪でメガネをかけた女性がやつて來た。

「シャーリー？ちょうどよかつた！彼の2本の刀非殺傷設定にしてくれる？」

なのはが依頼する。

「彼つて昨日運ばれて來た？べつに構いませんが。なぜですか？」

「実は・・・」

わけを説明するなのは。

「なるほど。わかりました。じゃあ・・・」

大護に駆け寄るシャーリー「柳瀬 大護だ。よろしく頼む。」

大護はシャーリーに刀を渡す。

「シャリオ・フィーノです。わかりました。すぐに終わりますね

！」

と言つてシャーリーは急いで2本の刀を持つて食堂を後にした。

「では、ついて来い！」

シグナムの言葉について行く。なのは、フェイト、はやて、ヴィータとフォワードメンバーの8人。

「大護くん。バリアジャケットいらないの？」

なのはが大護の格好を見て言う。上はジャージ。ズボンはすでにボロボロの侍のような物。仕舞いには靴はボロボロの足袋。

「大丈夫。オレに攻撃当てるやつはオレの知り合いでもあまりいな  
いから・・・」

その言葉を聞いた8人はなぜか嘘のように思えない。「オレはかな  
り強いから大丈夫だ。」

これで大護のミッドチルダでの戦いが始まった。

## 第三話 白髪の雷童子 対 烈火の将

大護はなのは達とともに機動六課の演習場に来ていた。

「何もない場所でやるのか？」

大護の視界には何もないただの埋立地しかない。

「違うよ。これから魔法を使ってシユミレー・ショーンするの。」

なのはが説明するがあまりわかつてない大護。

「これが六課自慢の訓練場や！」

はやでが言うとなのはが手元のキーを押した。すると、何もなかつた埋立地に段々ビルが建ち並ぶ。

「すごいな・・・」じつちの魔法は・・・

大護が関心していると

「さあ！早く始めるぞ！」すでにチャイナドレスのよつなバリアジヤケットに身を包んだシグナムがいた。彼女が先に向かう。

「・・・なあ、シグナムつて・・・」

「お前の察した通り、バトルマニアだ。」

ヴィータが答える。大護はゆっくりシグナムの後を追つた。

「本当に大丈夫なの？その格好で・・・」

フェイトが大護の服装を見る。上着は普通のTシャツ、ズボンはボロボロの侍の物、靴にいたつては足袋。「大丈夫だつて。この服のほうが動きやすい。」

大護はそう言って笑う。

「でも、シグナム副隊長強いんですよ！それなのに・・・」

スバルが言う。ほかのフォワードメンバーも頷く。

「・・・勝負は装備で決まるわけじゃねえだろ？勝つのは強い方・・・だろ？」大護はそう言つとシグナムと対峙する。

「大丈夫なんだな？」

シグナムは自らの「デバイス“レヴァンティン”」を構えている。

「問題ないぜ・・・。とつとと始めようぜ・・・」

大護は雷龍丸を抜き構える。右手に刀、左手に鞘。一刀流とは違うがその構えに似ている。

「じゃあ、いくよ・・・」なのはがコインを空に上げた。それが地面に落ちた瞬間、

大護がとんでもないスピードでシグナムの間合いを詰めた。

「何！？」

いきなり、間合いを詰められ慌てて迎え撃つシグナム。大護は鞘と刀を上手く使いシグナムの防御を崩そうとする。シグナムは大護の不規則な動きに戸惑いながらも攻撃を防ぐ。

（ここだ！）

シグナムが大護との間合いをかなり詰め鍔せり合いになつた。

「へえ～なかなかやるじゃん！」

余裕の笑みを見せながら押し切ろうとする大護。シグナムは逆にその反動を利用して大護との距離を取る。

「大護くん・・・あんなに強いんだ・・・」

ビルの上から見ているなのはが言う。

「ロミット付きとはいえシグナムをあんなに苦戦させるなんて・・・

」  
はやても同じだ。昨日まで重傷だつた男が歴戦の戦士追い込んでいる。

「大護。あの大刀使わないのかなあ？」

フェイドが大護の背中の大刀を見る。

「たしかに、なんでだ？」ヴィータもフェイドと同じく考える。

シグナムと大護は激しい空中戦を繰り広げていた。大護がヒットアンドアウェーを狙えばシグナムのカウンターを狙う。両者一進一退の攻防。だが、かなり息が切れているシグナムに比べ大護は呼吸を乱していない。

「おかしくない？運動量は同じくらいなのに・・・」なのはが不思

議に思う。

「たしかに、大護さん息を切らしてませんね・・・」ティアナも同意する。

「でも、大護のほうがかなり魔力使つてゐるのに・・・」模擬戦を見ていた全員が思う。大護の異常に

2人は再び鎧ぜり合い。

「けつこうやるもんだねえ。」

大護が力を込める。

「そちらもな・・・！」

シグナムが距離を取る。

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

レヴァンティンから薬莢が飛び出す。そして、刀の形状が変わった。

鞭のような形だ。それを見た大護は

「多節棍か・・・いたなあそんなの使うバカが・・・」

大護の脳裏に6年前の戦友で青い髪で顔にタトゥーを入れていた男を思い出す。「あんたと大介・・・どっちが強いかな？」

その瞬間シグナムがシュランゲフォルムのレヴァンティンで大護に攻撃を始めた。鞭特有の不規則な動きだが大護はそれを軽々しく避ける。それどころか逆に間合いを詰めていく。

（馬鹿な！？反射だけで避けているのか！？）

シグナムはレヴァンティンで大護を包囲した。そして先端の刃が大護を襲う。

「そう来たか・・・」

大護はそれを避け距離を取る。

「こつちも本氣でいくぜ・・・！」

大護は雷龍丸に魔力を込める。そして

「轟け！雷龍丸！！」

その言葉と同時に雷龍丸に雷のような魔力が纏つた。

「いくぞ・・・」

その言葉と同時に大護がシグナムの視界から消えた。（消えたっ！？）

焦るシグナム。その目の前に雷龍丸を上段の構えで構えている大護の姿があった。しかも刀身にはかなり魔力が込められている。

「天雷 斬」

それを振り切る大護。とっさにシグナムは防いだが予想以上の威力で吹き飛ばされた。

「くつ！」

体制を立て直し再び攻撃するが当たらない。そして、また大護の姿が消えた。

「龍追閃」

シグナムの上空から攻撃を仕掛ける大護。シグナムはそれを避ける。空振ったがシユミレー・ションのビルが数棟倒壊してしまった。

「なかなかやるじゃん。でも・・・こいつはどうかな？」

大護が雷龍丸を自分の前に出した。すると、訓練場の空気が変わった。空に黒い雲。雷雲が。

（ますい！！）

シグナムの本能が感じた。「七天 蒼龍破！！」

それと同時に雷の雨がシグナムを襲つた。

「きやああああ！？」

見ていた全員が耳を塞ぐ。そして、降り止んだ雷の先には、大護がシグナムの喉元に雷龍丸を置いていた。「オレの勝ちだな・・・」

「そうだな・・・」

素直に負けを認めたシグナム。

大護がみんなのもとへ行くと

「お前何者だ？」

ヴィータが言った。

「何者か・・・その答えは難しいな・・・」

「ふざけるな！おかしいんだよお前の戦いがランクだつていきなりSS-だし。シグナム相手に息切れをしない！お前は一体何者なんだ！！」

「・・・オレは今までずっと、長い間戦つてきた。だから、オレは戦うことしかできない人間。としか今は答えられない・・・」

「ふざけるな！そんな答えで・・・」

「ヴィータ！もうよせ！」ヴィータが言い切る前にシグナムが言った。

「たしかに大護は戦うことしかできない者だ。それに、かなり過酷な戦いをしてきたのだろ？」

シグナムが聞く

「ああ、オレは、オレ達は何度も死ぬ思いで戦つてきた。今はそれしか言えない・・・」

大護の目はどこか悲しそうだった。

「でも・・・いつか話してくれるよね？」

なのはが聞く。その言葉に大護はただ黙つて頷いた。彼は知らないこの世界にあの男がいるのを・・・

（？？？サイド）

誰も知らない研究所にある男が侵入した。その男は立ちはばかる無数の機械をただの刀で斬り伏せていた。

「君がこれを？」

一人の科学者が聞く。

「ああ・・・あんたに用があつて来た・・・」

「わたしはジエイル・スカリエッティ。君は？」

スカリエッティの言葉に男はフードを取った。灰色の髪で瞳の色が紅い。

「柳瀬 神威・・・。ルシフェルの血を引く者だ。  
堕天使の血を引く者がいるのを大護はまだ知らない。」

## 主人公紹介（前書き）

とりあえず伏線的な感じです。

## 主人公紹介

名前：柳瀬 大護

年齢：22歳

容姿：身長177cmくらい。体重62kg。少し長めの白髪。瞳は蒼色。左耳にピアスをしている。

性格：少しばかり天然だが中身はしっかりしている。つらい過去の持ち主。冷たく接してしまうが実際はかなり面倒見の良い人物。最年少12歳で十三隊の六番隊隊長に上り詰めた。

武器：雷龍丸と大刀戦刀。

能力：秘密。

十三隊：大護が出身の地球のギルドの一つ。日本の関東地区を統轄する集団。実際は政府直属の傭兵らしい。その名の通り十三の部隊からなるが部隊員はおらず隊長と数人の副隊長で構成されている。隊長格はかなり強く実力は少なくともオーバーランク。

だが、5年前に隊長達が7人に減つてしまつたらしいがそれは過去編参照。

隊長格。名前のみ

壱番隊隊長：橘 嵐

弐番隊隊長：宮木 影義

参番隊隊長：宗像 热志

四番隊隊長：	新庄
五番隊隊長：	宮原
六番隊隊長：	柳瀨
七番隊隊長：	千樹
八番隊隊長：	姫矢
九番隊隊長：	弧門
十番隊隊長：	宮田
十一番隊隊長：	飛鳥
十二番隊隊長：	鈴宮
十三番隊隊長：	吹石

准 懈 大護 剛  
一希 信次 凌 茜那

## 第四話 ファーストアラート

あれから2日後。大護とフォワードメンバーは朝早くから訓練をしていた。元々朝が苦手な大護にとっては最もつらい時間である。あの模擬戦以来フォワードの4人から

「戦い方を教えて下さい！」

と頼まれるが

「隊長達に勝つたらなあ！」

無理な難題を言って断る。

アンチ・マギリング・フィールド

大護はA・M・Fを搭載したガジエットドローン相手に訓練をしていた。A・M・Fがあるといえ大護にとつてはこの程度の敵はかなり楽勝の部類に入るためなのはに頼んでガジエットのレベルを大護だけ最強にしてもらっているがそれでも何度も死線を潜り抜けて来た大護にとつてはまだ楽な訓練である。

朝の訓練が終わり朝食をフォワードの4人と食べる大護。するとスバルが

「大護さんの左手の薬指の指輪って結婚指輪なんですか？」

突拍子もなく言うスバル。大護は

「何だと思う？この指輪？」

逆に聞く。

「えつ！？」

「それってどう言う意味なんですか？」

ティアナが聞く。

「4人に任せることの意味。それにそういう事は聞かない方が身のためだぞ」

半ば脅し半分に言う大護に4人は苦笑いをするしかなかつた。

朝食後。大護も受け取る物があるためなのはとフオワードメンバーとともにデバイスルームに向かっていた。

「大護さんつて変換資質持つてるんですか？」

エリオが聞く。

「変換資質？ ああ。エリオが持つている電気とかの事か。」

それに頷く5人。

「俺は電気の上の”雷”（いかずち）と他は内緒」

「雷つてその刀の性質の？」

なのはが聞く。

「雷龍丸の能力の事。こいつは所有者の”氣”、お前らで言う魔力を雷の性質に換え己に附加させる事が可能になる」

「だから、あんなに速いんだ」

納得のいったなのはであった。

「これが大護くんのバリアジャケットのデバイスね」

デバイスルームでシャーリイから青いブレスレットをもらつ大護。

「中身は大護くんのデザインしたのになつているから」

なのはが付け足す。

「別にいらぬえんだけど……」

大護が不満を漏らす。

「制服着ないんだからバリアジャケットくらい着るー。」

なのはに叱責される。

「はいはい・・・」

などと言いながらシャーリイの説明を受けていると

ビー ビー ビー

「アラートー？」

「どうやら、かなりの面倒」どうしいな

こうして大護たちはミットチルダの山岳地帯に緊急出動することになった。

～～～サイド～

ある部屋で灰色の髪の男が映像を見ていた。

「さて・・・挨拶くらいしておくか・・・」

その男柳瀬神威はその場から姿を消した。

これが大護の選択する戦いの始まりであった。

## 第五話 自分の身は自分で護れ

6人はヴァイス・グランセニック陸曹が操るヘリで現場に向かっていた。大護は緊張しているフォワード4人と違いあくびをしていた。「初出動でいきなり新デバイスだけど訓練どうりにやれば大丈夫だから。それにいざとなつたら私やリイン曹長、大護くんもいるしな」なのはが言うと

「なんでオレも入ってるの？」

大護が聞く。

「大護くんは民間協力者だし強いんだし・・・」

「オレはガキのお守りを頼まれた覚えはねえぞ。それに朝から晩まで訓練してんだ自分の身ぐらいい自分で守れ・・・」

大護が冷たく言う。

「でも、護るんでしょう？」

なのはが言う。

「・・・気が向いたらな。でオレは何をすればいいんだ？」

「私とフェイト隊長と

一緒に空域の制圧。あんまり本気にならないでね」

「わかってるよ」

大護はチラッとキャロを見た。何かに戸惑っている感じだ。

「なのはさん！大護！準備してください！」

ヴァイスから連絡がはいる。大護は立ち上がりキャロの前で座つた。

「大護さん・・・？」

「迷つてんなら自分が信じてる事をやれ・・・そうすれば道は見えるからな」

そう言つてキャロの頭を優しく撫でた。なのはの横に立ち空を見ていると

「優しいんだね・・・大護くんは」  
なのはが言った。

「・・・昔のオレだつたらあんなことは言わなかつたよ。さてと、仕事するか・・・」

と言つて首を鳴らす。そして

「柳瀬 大護。出る！」

空中へ飛んだ。指定されたところへ飛んでいく。その後ろをなのはついて行く。

（キレイ・・・）

なのはは大護の飛ぶ姿に見惚れていた。少し長めの白髪をなびかせながら飛ぶ姿に・・・

ガジェットとの交戦になつた。大護は雷龍丸を抜き応戦する。  
「よつと！」

攻撃を軽々しく避けカウンターを仕掛ける。

「天雷 斬！」

その時、大護は視線を感じた。

（誰か見ている・・・？）

その後も順調にガジェットを倒して行つた。途中エリオとキャロが崖の下へダイブしたがフリードが巨大な竜となり2人を助け事件は幕を閉じた。

大護はリニアレールに散らばつたガジェットの部品を見ていた。すると、キャロが寄つてきて

「あの、ありがとうございました！大護さんのおかげであたし勇気が出ました！」

「・・・あれはオレも言葉じやねえし、それに自分の力だろ？そつちに感謝しとけ・・・」

そう言つとある一点を見る大護。そして、

「隠れてねえでさつさと出て来い！！」

その言葉に空間が歪み。フードを被つた男が現れた。

「さすがだな・・・」

「なんであんたがここにいる!?」

男に怒鳴る大護。

「今日は挨拶だ・・・お前がどつちを撰んだか見ておきたくてな

「・・・目的はなんだ?」

「それは言わない。では、機動六課と天使・・・」

男はそう言つて消えた。

「なんであいつが・・・!」

拳を握り締める大護

「・・・神威・・・!」

男の名前を言つた。

こうして機動六課の初出動は幕を閉じた。

（？？？サイド）

「やつぱり、ユフィの血を撰んだか・・・そうでないと困る・・・」

男は狂喜の笑みを浮かべていた。

## 第六話 平和な世界

初任務から数日後。

大護は朝からスバルと組み手をしていた。今日はヴィーサがいないから教えてくれ。となのはに頼まれ一度は拒否したがなのはの怖い笑顔。大護にとつてはトラウマ的の笑顔に心が折られ承諾した。組み手が始まつてゆうに5分。大護は元の位置から全く動いていない。

「ハア ハア ハア」

息を切らしているスバル。5分間自分の持てる全ての技を出したが大護が平然と防ぐ。

「まつ。そんなもんどうな。攻撃が単純すぎ、それに無駄な力入れすぎ、そして回避、防御力がダメ・・・そんなんじや体がもたないぞ」

「そう言われても・・・大護さんが強すぎるんですよ」「今日はお

前に合わせていたぞ。それにそやつて逃げ道作つてるとヴィーサにボ「ボコにされるぞ」

「はい・・・」

「今日はここまでな」

そう言つてスバルとの組み手を終え食堂に向かつた。

「ねえ。大護つて元の世界で何やつてたの?」  
フェイントが突然聞く。

「何つて、人の事をあんまり詮索しないほうが良いぞ。時に地雷を踏むから」「地雷つて・・・」  
「まあ、戦つてたことは教えておく」

大護はそう言いながら「」飯を食べる。

「何と戦っていたの？」

なのはが聞く。

「うーん・・・“神”かな・・・」

「「えつ！？」」

大護の答えに驚くのは、とフュイト。

「神つて、神様のこと？」

「そんな感じ」

「なんで戦つたの？」

「何となくかな？」

首を傾げてとぼける大護。

「「・・・」」

2人が言葉を失つていると

〔柳瀬大護さん。至急部隊長室まで来て下さい〕

放送が入り大護が

「つー訳だ。ちょっと行つて来るか」

ゆっくり立ち上がり食堂を後にした。

「・・・大護くんつて」

「何者・・・」

なのはとフュイトは言葉を失つていた。

「入るぞー」

大護ははやてのいる部隊長室へ入つた。

「大護さん。すみません。朝「」はんの最中に・・・」

申し訳なさそうに謝るはやて。

「別に良いつて。で、話つてのは？」

「・・・先日のフードの人物について何か知つていますよね？教え

てくれませんか？」

「…………そのことはまだ話せない……」

「なぜ？」

「人には誰にも言いたくない過去があるだろ？お前みたい」

「それはそうですけど……」

「あいつが来たらオレが戦う。で、いつか話してやるよオレの過去をな」

笑顔で言う大護。

「そつか・・・それで事は相談なんやけど。大護くん町に行かない？日常品とかないやろ？いつまでもジャージつて訳にもいかんやろ」はやてが提案する。

「それもそうだな・・・買いだしに行くか」

それから大護、はやて、シャマル、ザフイーラはフェイトの車に乗りミッドチルダの市街地のデパートに来た。

「大護くんはザフイーラと買いだしをお願い。時間があればいろいろ見て回つて良いから」

「わかった」

大護はザフイーラとともに六課に必要な物の買いだしと大護の日用品を買うことにした。

「IJの世界は平和なんだな・・・」

買い物袋を持ちながらデパートを歩いている途中に言った。

「お前の世界は平和じゃなかつたのか？」

右側を歩いている人間形態のザフイーラが聞く。

「・・・平和じゃなかつた。北の大国と南の連合の戦争があつた。

それが3年も続いたんだ。そのせいで多く人が哀しんだ・・・」

「お前も戦つたのだろう。それが正しいと信じて……」

ザフィーラの言葉に大護は

「……オレが正しいとかは解んねえ。ただ、あの世界はもう平和だし、オレは早く帰らないといけない。ここであいつの真実を知つてからな」

「律儀だな……」

「もともとそういう性格なんだよ」

笑顔で答える大護。

それからザフィーラと別れて本屋で暇をつぶしていると、デパートないが騒がしい。本屋をあとにして様子を見ると大護の前から男が1人走つて来た。その後ろにはバリアジャケットを着た魔導士がいる。

すると男が手に持つていたナイフを大護の喉元に当てる。

「動くな！動くとこいつの命はねえぞ！！」

人質を取つた犯人がよく言う典型的な台詞を言つ男。

「人質を解放しなさい！！」

一見スバルに見えるが違う。髪が長い魔導士が説得する。

（・・・オレって人質？）

ようやく事態を理解した大護。周りを見るとかなりパニックになつてゐる。

「早く俺のデバイスと車を持つて来い！！早くしねえとこいつが死ぬぞ！！」

（・・・どうすっかなあ。はやてとかはいないし・・・）

かなり冷静な大護。それを見ていた魔導士。ギンガ・ナカジマは（なんで人質の彼冷静なの？）

「ねえねえ。犯人さん。こんなことしても意味ないんじゃない？」

突然犯人に話し掛ける大護

「ああ！？何だと！？」

「だから、こんなことしても結局は捕まるよつて言つてんの」

「オレは逃げるしかねえんだよ！！」

「・・・交渉決裂。自力で抜け出すか・・・」

そう言つて大護は犯人のつま先を踏み付けた。

「ぎやあ！！」

悲鳴を上げ大護を離した犯人。

「足元がお留守だつたよ」

「このガキイ〜・・・殺す！！」

ナイフを長くし切り掛かる犯人。だが、大護はそれを簡単に避ける。そして、脛を蹴る。

「また、足元がお留守だよ。弱いんだから早く自首したら？」

かなり余裕の大護。

「このお〜！！」

再び襲い掛かる犯人。すると大護は構えた。

「天龍剣 無手の型・・・」

ゆつくり拳に力を溜め、ナイフを左手で防ぎ。

「裂空剣！！」

強烈な掌底を顎にヒットさせた。犯人は大の字になりピクピクしている。

「さてと帰りますか・・・」

大護がギンガの横を通つた。

「あの・・・」

ギンガが御礼をしようとした時すでに大護の姿はなかつた。

「・・・カツコイイ・・・」

ギンガは大護に一目惚れしてしまつたようだ。

そんなこんなで買い出しは終わつたが大護ははやてから説教が待つていたのは言つまでもない。

## 第七話 ホテル・アグスタ（前編）

数日後。大護はヘリではやて、なのは、フェイトとフォワードの4人とともにホテル・アグスタに向かつていた。

「今までわからなかつたガジェットの制作者がわかつたの。この男」  
フェイトが映像を見せる  
「ジエイル・スカリエッティ。生態実験などで広域使命されている次元犯罪者。こつちの調査は私がするけどみんなも頭の片隅に入れとてね」

「「「「はい」」」

4人が返事をする。

「で、今回のお仕事はホテル・アグスタでの警備です」  
リインが言う。

「ここ」で開かれるオークションに管理局が認めたロストロギアが展出されるんだけど。それをレリックと誤認してガジェットが来ないとは言い切れないから。その警備が今回の仕事ね」  
なのはが説明する。

「ホテル内部はあたし、なのは隊長とフェイト隊長。外は前線メンバーと昨日からそつちに行つている。シグナム副隊長とヴィータ副隊長。襲撃際には副隊長達の指示を従うよう」  
はやてが説明する。

「あと、このてのオークションは密輸があるかもしれないからそつちもお願ひね」  
フェイトが付け足す。

「オレは？」

スカリエッティに関する資料を読んでいる大護が聞く。

「大護くんは大変やけどホテル内部と外部の警備をお願い。その格好で問題起こさんといでな」

「わかつてゐよ」

大護はすでに半分バリアジャケット姿だ。オーバーコートを着ないで黒いTシャツに侍風のズボンで足袋を履いている格好。

「なんでそんなにスカリエッティの資料読んでたの? 大護は簡単に無視すると思つたのに」

フェイトが聞く。

「・・・いや、どの世界もこんな奴はいるんだなあつて思つてな。それにオレはこのての男が嫌いなんだよ」

「・・・大護さんつて元の世界で彼女とかいたんですか? また、突拍子もなくそんな事を聞くスバル。

「・・・なんでそれを今聞く?」

大護は内心ちょっと怒つている。

「だつて前にあんな事言つたから気になつちゃつて」

「ハア・・・その答えは保留にしといてくれ。答えるのが面倒だから」

そんなこんなで一行はホテル・アグスタに到着した。

「? ? ? サイド」

「じゃああいつによろしくね三尾」

神威がある人物に言つた。

「分かつてるよ。もう一回大護と殺りあえるんだ。それぐらいやつてやるよ」

その人物は中性的な顔だちの男で着崩れした着物を着ている。

「さて、どうなつてるかな? 大護は・・・」

その男は三尾。過去に大護の最凶のライバルとして彼の田の前に立ち塞がつた男。

ホテルについてから大護は散歩を兼ねてホテル内部を見て回っていた。

（サボるっかなあ～・・・今回オレの出番なさそうだし）  
等と考えていると

「大護！」

後ろからドレスを着て着飾ったフェイトの姿があった。

「フェイトか。どうした？」

「さつき、ヘリの中でスバルが言つた話しが気になつちゃつて・・・

「・・・だから、保留つて言つたる？・・・いるよオレにはそんな  
大切な人が」

「やつぱりいるんだ・・・」

「・・・オレの言つてるのは彼女じゃない。お前にもいるだろ？自  
分より大切な誰かが」

「いるけど・・・それがどうしたの？」

「そういう奴は強くなれるって事」

そう言つて大護はフェイトと別れた。

「・・・うまくお茶を濁された気がする」

（でも、なんでそんな事言つたのかな・・・）

不思議に思いながらも大護の言葉を考えているフェイトであった。

その頃ティアナは

（やつぱりあたしつて凡人よねえ。スバルとかみたいに強くもない  
しレアスキルもない・・・。でも機動六課の戦力を異常・・・隊長  
達全員がオーバーランク。副隊長達でもニアラランク。それに大  
護さんにいたつては本気じやないのにSS・・・なんであの人は

あんなに強いんだろう）

「ねえここってホテル・アグスタであつてる？」

突然後ろから声が聞こえた。振り返ると着崩れした着物が特徴で中性的な男性がいた。

「はい。そうですけど・・・あなたは？」

「俺はある人物に会いに来ただけだから。ありがとね」

そう言つて男は立ち去つた。

客員に通達！ガジェットが来たわ！迎撃の準備！

シャマルから念話が入る。

（悩んでもしようがない！証明すれば良いんだ！ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるつて！！）

それからガジェットの迎撃に入るシグナム、ヴィータ、ザフィーラとフォワードの4人。順調に迎撃していくが急にガジェットの動きが変わり。戸惑う。そして、謎の召喚士によりガジェットがホテルに召喚される。スバル、ティアナに合流したヴィータにある男が現れた。

「あれれ、大護がいない、残念だなあ」「

着崩した着物に中性的な顔だちの男。

「おいつ！一般人は危険だ！サッサッと避難しろ！！」

ヴィータが怒鳴る。

「・・・俺は大護にようがあるだあ、ちつちやい、ゴスロリ少女に興味がないけどこの機械邪魔だ・・・」

そう言つて青龍刀のような刀を取り出す。それを一振りする。すると見えない何かがガジェットを斬つた。

「なつ！？」

驚くヴィータ、スバル、ティアナ。

「てめえ！何者だ！！」

「うーん・・・大護がいないし来るまで遊んでるかあ。俺は三尾。

十三隊六番隊隊長柳瀬 大護を殺しに来た男だ」と言つて三隊は青龍刀を構える。

「あいつが来るまで俺と遊んでくれよ～」

「・・・」の氣、三尾か！？』

強烈な氣を感じ起きた大護。

大護さん！至急ヴィータちゃん達の援護に回つて！あの男かなり・・・

「わかつてゐる！すぐに向かう！～」

ヴィータ、スバル、ティアナの3人は三尾の青龍刀から繰り出される見えない刃に苦戦を強いられていた。

「何なんだよこいつ！？」

「こうなつたら・・・スバル！クロスシフトA！いくわよ！～」

「おう！～」

スバルはティアナの指示に従いウイングロードで三尾の誘導する。

「ねえ～逃げてちゃあ～つまんないよ～」

その間にティアナがクロスマーティアのカートリッジをリロードし自分の周りに幾つもの魔力弾を作る。

「クロスマーティア～～～ト～～」

無数魔力弾が三尾に襲い掛かる。だが、その中の1つが三尾に向かわずウイングロード上のスバルへ向かっていく。

「スバル！避ける！～」

それを見たヴィータは声をあげる。そして、直撃。

（ちくしょう！あたしはまた守れないのか！～）

「・・・へえ～5年顔見てないけど、変わったねえ～。・・・大護

！」

スバルのいる場所から煙りがそこには

「ふうー危なかつたな」

左手で魔力弾を防いでいる。大護の姿があつた。

「大護・・・」

「やつぱりこの波動はお前だつたか・・・三尾！」

大護は雷龍丸を抜き臨戦体制に入る。

「大護・・・！十三隊六番隊隊長！！」

さつきとは明らかに違う殺氣立っている三尾。

「・・・ヴィータ。ティアナとスバルを連れてラインまで交代しろ。・・・。こいつはオレ一人でやる！」

「でもよお！」

「私達も戦います！！」

ヴィータとスバルが言う。

「足手まといだ・・・！」

冷たく言う大護。

「それに女にケガさせるわけにはいかねえだろ？だから、とつとと下がれ」

「わかった。死ぬんじゃねえぞ！」

「頑張つて下さい！！」

ヴィータ、スバル、ティアナの3人は退いていく。

「さて・・・始めようぜ・・・」

「ククククツ ハハハハ！！やつとお前を殺せる！！

やなせえええ！だあああい「おおおお！！」

殺意を剥き出しに三尾。過去からの狂敵。最凶の敵。赤蜘蛛の三尾  
が大護に牙を剥く！

## 第七話 ホテル・アグスタ（後編）／三尾（王蛇） 対 六番（大護）

三尾と対峙する大護。三尾の武器の性質を知っているがあればなかなか凶悪な武器だ。迂闊には攻められない。

「来ないなら・・・こつちがいくよ！！」

青龍刀“王蛇”を振る三尾。刃が大護に迫る。大護はそれを避け居合斬りの構えで三尾に切り掛かる。

「翔龍閃！」

居合斬りから雷龍丸を切り上げる大護。

「甘い！」

それを王蛇で防ぐ三尾。大護は左手の鞘で二段抜刀術で三尾の頭を狙う。だが、三尾はそれを避けバックステップをしながら王蛇を振る。

「お前の武器の正体ぐらいわかってんだよ！..」

見えない刃を雷龍丸で切り倒す。

それを見ていたヴィータ達3人は

「何だよあの刀・・・」

「刃が連結して・・・」三尾の刀王蛇は仕込み刀の一種で刃の中に無数の刃が重なりあつていて、それを振れば見えない刃が相手を襲う。

「これが初代の草鹿 錬空の作った完成型変体刀の一本。邪刀王蛇！お前には何回も見せてるが・・・いくぜ・・・」

三尾は王蛇を振る。連結刃が大護を襲う。だが、三尾の攻撃はこんなのではない。

「まだまだあ！..」

王蛇を鞭のように振る。シグナムのレヴァンティンのシュランゲフオルムとは違う地面や木に当たり軌道を大きく変える。これではうまく避け切れない。

「くそつ！..」

刃の津波と呼べる三尾の刃が大護を襲う。

「ハハハハ！！切り身にしてやる！！」

三尾の動きが弱冠だが大振りになつた。

「今だ！！」大振りになつた瞬間の刃の動きが遅くなつた。その瞬

間を見逃さない大護。刃の津波を避け三尾に切り掛かる。

「天龍剣 居合術 奥義！ 天翔飛龍！！」

雷龍丸の附加能力“雷化”で常人を遥かに超えた大護の高速抜刀術が三尾を斬つた。その技。まさに神速。

「すげえ・・・！」

2人の戦いを見ていたヴィータは素直にそう思つた。

「ぐがつ！！」

斬られふらつく三尾。

「ハハハハハハハハハハハハツ！！ハハハハツ！！」

この男はこの程度じゃ死なない。

「やっぱり大護には本気で！この辺り一帯を死体で埋めてやる！！」

ハハハハハハハハツ！！

狂つたように笑う三尾。

「・・・雷龍丸だけじゃ無理か・・・」

雷龍丸の鞘をしまい刀を左手に。右手は背負つている戦刀の鍔に。三尾はいきなり王蛇を自分の胸に突き刺した。

「なつ！？」

ヴィータは三尾の行動に目を疑つ。

「蛇尾れ（いびれ）・・・王蛇！！」

その言葉とともに三尾の体が変わり始めた。手が王蛇の刃を纏い。体全体が蛇のようになっていく。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

全てをぶつ殺してやる！！

ヒヤアハハハハ！！

体の変化が終え狂ったように笑う三尾。

「おらあ！！」

両手の刃が大護を襲うそれはまるで蛇のようだ。さつきの段違いの速さだ。

「！？」

かろうじて避ける大護。空に逃げ三尾を見る。

「・・・戦刀を使うか・・・」

戦刀を鞘から取り出し三尾に向ける。

「悪いが終わらせてもらつぞ！！

『目覚めろ！ 戦刀！..』

戦刀が変わる。大刀から長刀に刀身全体が漆黒の刀。

「無双王 戦刀！！」

右手の戦刀。左手の雷龍丸を構える。

「そうこなくちゃつ！やなせえええ！」

両手の刃を大護に振る重なりあつた刃が大護を襲う。それを一本の刀で防ぎ、避けながら三尾との間合いを詰める。刃が右の頬をかする。三尾の動きが大振りになつた。

「これで終わりだあ！」

「今だ！！」

大護は大振りになつた瞬間のタイムラグを見逃さない。右手の戦刀を上段に構え放つ技。漆黒の刃に黒い魔力が纏う。

「龍天月破！！」

巨大な漆黒の刃が三尾を襲つた。その刃が通つた道は何も無くなつていた。

「ハア ハア」

息切れする大護。体の至るところから血が見える。

「すげえ・・・あれが大護の本気・・・」

その光景を見ていたヴィータは畠然としていた。

煙りが晴れ三尾の姿が見えた仰向けになり下半身がない。大護は近づき

「三尾・・・」

その横にしゃがむ。

「また負けちまつたな・・・すまねえな迷惑かけちまつて

「ああ」

「気をつける。神威はお前を狙つてる・・・」

「わかつてゐる・・・オレは負けねえよ」

「そつか・・・ありがとな解放してくれて」

三尾が皿をつぶるとその体は砂のようになり消えた。

それからしばらくして。

「いててて！シャマル痛いって！」

シャマルからケガの手当を受ける大護。

「あはれないので！なんでこんなケガするの！？」

包帯を巻くシャマル。

「・・・・ティアナは？」

「ちょっと落ち込んでるみたい」

「そつか・・・」

大護は立ち上がりフォワードの様子を見ていた。

「よく働くねえ！」

と言っているとなのはが誰かと歩いているのを見た大護は、

「まんざらでもないみたいだな・・・」

2人の会話を盗み聞きしていた。

「なにやつてるの？」

「なにつて。楽しいこ・・・」

振り向くとフェイトがいた。恐ろしいほど怖い笑顔の大護のトラウマ的笑顔のフェイト隊長がいた。

「盗み聞きを良くないよね！」

思い切り耳を引っ張られる大護。

「ちよつ！痛いって！いてて！オレケガ人！」

そんなこんなでホテル・アグスタでの任務を終え隊舎に帰る機動六課前線メンバーであつた。

余談で大護の恐怖の記憶にフェイトが新たに付け加えられたらしい。

## 第八話 重なる影

ホテル・アグスタでの任務から数日後。大護は朝からはやて達に尋問されていた。理由は先日の任務で現れた三尾についての情報を聞こうとしたが大護がうまく逃げていたためはやはては寝ている大護を拉致し部隊長室で尋問する事にした。

「さあて。大護くん。洗いざらい話してもらおうか！－！」

額に怒りマークをつけているはやて。

「・・・・・めんどくせえからバス」

「めんどくさいって！大護がケガしたんだよーそれにあの三尾ってのかなり強いって聞いたし」

なのはが言つ。

「・・・あの程度ならまだ大丈夫だ」

「大護。何か知ってるよね？」

フェイトが聞く。

「わかつたわかつた。話してやるよ。・・・あの三尾は5年前にオレが倒した男だ。そして、死んだ」

「死んだって！？じやあなんで生き返ったんや！？」

「リニアレーる襲撃の時に姿を見せた男の術に“反魂の術”つてのがある。そのせいで時間つきだが一時的に蘇つたんだ。だから、あいつは全体の8割ぐらいの力しか使ってなかつた。オレが知つてるのはこれくらいだ」

「死者を蘇らせるつて・・・何者なのあの男・・・」

「少なくとも人を超えた存在だ」

「大護くんは知つてるの？」

「その話はまだする気がない・・・」

話が終わり。大護がフォワード達と訓練をしていると  
(ティアナの動きが・・・)  
ティアナの動きに違和感を覚えた。

訓練を終え。夕食後。大護はなのは、フェイトからティアナの兄テ  
イーダ・ランスターについて聞いた。

「なるほど・・・オレと似たようなくちか」

「似たようなつて、大護にお兄ちゃんいたの?」

フェイトが聞く。

「義理の兄が2人いた。あーいつタイプはよく知ってるよ  
「大護くんのお兄ちゃんつて今どうしてるの?」  
なのはが聞く。

「・・・今もいるよ、オレの心にな」  
〔11〕

と言つて自分の胸を指差しその場を去つた。

隊舎に戻る最中ティアナが1人自主練をしているのを見かけた。そ  
の姿を見ていると少年の頃の自分に重なつて見えてしまう大護。  
(あの時のオレみたいだな・・・)  
それからしばらく見ていて一段落したのを見計らつて

「もうやめたらどうだ」

「大護さん・・・。まだやります」

「・・・その意気込みは良いが体壊すぞ」

「やるしかないんです。凡人ですから」

そう言って再び構えるティアナ。

「・・・あまり兄さんのこと因われ過ぎないほうが良いぞ」

「なんで、兄の事・・・」

「いろんな人から聞いた。・・・何か1つに囚われるとその内取り替えしのつかない」とになるぞ」

「どういう意味です」

「兄の汚名をとか、馬鹿な考えはやめろ」

「！？あなたに何がわかるんですか！？」

「正直なとこお前の気持ちなんてサッパリわからん」

「だつたら！？」

「ただ、オレから言える事が2つある。1つは兄の汚名を晴らすなら無茶しない事。2つ目は・・・その願いを叶えた時の事を考えとけ」

大護はせつて隊舎に戻った。

「あなたに何がわかるんですか！？幸せなあなたに！..」  
そつ言つてまだ自主練をするティアナの姿があつた。

それから数日が経ち。大護はヴァイスと朝食を食べていた。  
「オレも説得してみたがダメだった。さらにスバルまで参加してやがる」

ヴァイスは最初に会つた時からやけに馬が合つりしくよく話している。

「そつか・・・」

「今から模擬戦らしいがどうする？」

「・・・最悪のシナリオにならない事を祈るしかないな」

「ところでお前さんはなんであんなに強いんだ？正直言つてお前の強さは異常だぞ」

「・・・それはまだ言えないんだ。済まないな・・・じゃあオレはもう行くから」

大護は食堂を後にした。

（ほんと。最悪のシナリオにならなきや良いんだけどな・・・）  
そう願いながら訓練場へ向かつた。

訓練場ではすでに模擬戦が始まっていた。ティアナがクロスファイヤーを放つがいつもよりキレがない。そこにスバルが特攻を掛ける。その間ティアナが砲撃に入る。

「ティアナが砲撃！？」

ヴィータが驚く。大護は冷静に

「あれはフェイク・・・。本物は・・・」

本物のティアナはウイングロードを走っている。クロスマリージュに魔力刃を纏わせている。

（そんなの肉を斬らせて骨を断つにしかならない！）

「一撃必殺！！」

ティアナとスバルの渾身の一撃が入った時

「レイジングハート・・・モードリリーース・・・」

なのはから殺氣を感じた。

「おかしいな・・・どうしちゃったの2人とも・・・」

スバルのリボルバー・ナックルとティアナの魔力刃を片手で止めてるなのはの姿があつた。2人は何が起こったのか解らず脅えている。

「訓練の時だけ言うこと聞いたふりして実戦でこんな事したら教導の意味ないじゃない・・・」

「あ・・・あ・・・」

パニックになつていたが

「私は・・・もう何も失いたくないから！―強くなりたいんです！」

「少し、頭冷やそうか・・・」

なのはが桃色の魔力弾をティアナに放つた。誰もが直撃したと思つたが

「・・・なんで邪魔したのかな？・・・大護くん・・・」

ティアナの前で魔力弾を防いだ大護の姿があつた。

## 第九話 大切なこと（前編）／蒼き翼を持つ天使

「なんで邪魔したのかな・・・。大護くん・・・」  
なのはが大護を睨む。

（・・・昔のオレみたいだ・・・）

「大護さん・・・」

その言葉に大護はティアナ達と距離を取つた。  
「ティアナ。勇気と無謀を履き違えるな！」

「！？そんな事ありません！私は・・・」

「あんなの実戦じゃ2人とも死んでたぞ！！それにスバル！！お前のパートナーならなんでティアナの事を止めなかつた！！！」  
スバルは一瞬びくつき。

「パートナーだから・・・その・・・」

「大切なパートナーなら相棒の無茶を止めるべきだろ」  
そして、なのはを見た。相変わらず大護を睨んでいる。

「なのは。お前の取つた行動はティアナやスバルより愚かな行動だぞ！」

「なんでかな？私は2人の教官として間違つたところを正そうしただけだけど」

「あれは教導でも注意でもない！ただの撃墜だ！！」

・・・オレは1回取り替えしのつかない事をやらかした。お前がそれをすると言うなら・・・オレがお前を倒す！！」

大護は戦刀を取り。なのはに向ける。

「いくぞ・・・動けるもんなら動いてみろ！！」

大護の声が聞こえた瞬間なのは達は何かに押し潰される感じがした。それは今までに感じた事のない恐怖。大護から発せられる殺氣。大気が自分を押し潰す感覚。

「ああああ」

ティアナが意識を失いそうになつた時

「大丈夫か？」

大護がそれをとめた。涙目で今にも崩れ落ちそうなティアナ。大護が額に手を当てる。ティアナは眠りに落ちた。

「スバル。ティアナを頼む」

スバルにティアナをたくし。再びなのはと対峙する。

「戦刀！」

刀を解放する。漆黒の刃がなのはの瞳に映る。

戦刀。強度と切れ味に関しては右にでる刀はない。初代十三隊の総隊長が使っていた大刀。

「アクセルシユーター！ シュート！！」

桃色の魔力弾が大護を襲う。それを避けるが魔力弾は導かれるように大護へ向かっていく。

「誘導型！」

さらに放たれた魔力弾が大護を襲う。

「あんなの避け切れないよ！」

その光景を見ていたフェイント達は

「ダメだ！念話で止めようとしたけど2人ともとまんねえ！！」

大護は避けるのをやめ戦刀を構える。そして、とんでもない行動に出た。

「ハアアア！！」

魔力弾を戦刀で切り落としていくのだ。

「嘘だろ！？」

唖然とするヴィータ。

「・・・そつか。あの戦刀つて刀。解放状態にすることで大護の魔力が圧縮された刀に形状を変えたんだ！」

フェイトが大護の姿を見て納得する。

全ての魔力弾を撃ち落とした大護は再び構える。

（・・・遠距離砲撃タイプとやつたことねえからきついな。・・・やつぱ、一回地獄を通るしかないか・・・）

覚悟を決めなのはに立ち向かう大護。なのはの攻撃を避け戦刀を振りかぶる。

「ああ！！」

戦刀となのはの防御魔法がぶつかり合い火花を散らす。プロテクションを押していく

（あと少し・・・！）

と思った瞬間。なにかが大護を襲つた。バランスを整えなのはを見る。なのはの周りを複数の魔力弾が回っている。だが、なのはは攻撃の手を緩めない。

「確かに大護くんはすごいよ・・・。でもなんであんな無茶したのかな？」

攻撃を続けるなのは。

「お前が解り合あうしないからだ！ティアナが迷つていたのになぜ話さない！！自分のことを！教導の意味を！」

「大護くん黙つて！！」

ティバインバスターを放つなのは。

「龍天月破！」

ティバインバスターを戦刀の技“龍天月破”で相殺する。

（・・・使うしかないか）

大護は覚悟を決めた。再びなのはに突っ込んで行く。

（なんで！？なんであなたは！？）

攻撃を続けるなのは。

「自分の勝手で仲間を傷つけるな！人間は誰でもわかり合つ事ができる！！」

ディバインシューターを避ける大護。なのはの周りの魔力弾を斬り落とし再び戦刀でなのはの防御魔法と火花を散らす。

（ここだ！！）

その瞬間。大護に蒼い光が纏つた。

「天使・・・」

なのはの目に一瞬だが大護の背中に蒼い天使の羽が見えた。

「“顯現”！！」

空いている左手が蒼く輝き。プロテクションに触れた。すると、なのはの防御魔法が消えた。

「え・・・」

「悪いが寝てろ・・・」

大護はなのはの腹に思い切りパンチを喰らわせた。

氣を失うなのは。大護は彼女を担ぎ。フェイト達の元へ降り立つた。

「大護・・・あなたは」

「・・・なのはオレが医務室に運ぶ・・・心配するな」

と言つて立ち去ろうとしたが

「ちょっと待て！！お前本当に何者だ！？」

ヴィータが怒鳴る。

「・・・」

「答えるよ！！」

「・・・オレは“人”だが“人”じゃない存在だ。今はそれしか言えないんだ」

大護はそう言つてなのはを担ぎ隊舎へ戻つていった。

## 第九話 大切なこと（後編）／わかり合つたために

「そつか・・・そんな事があつたんか」

食堂でフェイトがはやてにさつきの模擬戦の事を聞いていた。

「うん。なのはもティアナも大丈夫だつて。シャマルが言つてたけど・・・」

「よく考えたら、うちら大護くんのこと全然知らんよね。で、その大護くんは？」

「なのはを医務室に運んでからどつか行つちゃつたけど。どこかで寝てるんじゃないかな？」

その頃。大護は草原で寝転んでいた。

「・・・フェルトは元気かな？」

大切な人のことを心配する。

（嵐や憐。あいつらは元気だよな・・・）

左手を太陽に掲げ薬指の指輪を見る。

「・・・ハア」

ため息が出た。

「なーにため息なんかしてるの？」その声に気つき起き上がり振り返る。そこにはフェイトとはやてがいた。

「また尋問か？」

「ううん。違うよ。教えてほしいの・・・大護の事」

「・・・ヴィータに言つたろ？オレは“人”だが“人”じゃない存在だつて」

「その事やないんよ。大護くんがなのはちゃんと使つた技の事を聞きたいんよ」

はやてが言い。両隣に座る2人。大護はまた寝転ぶ。

「あれはオレの顕現できる能力だ」

「顕現？」

「オレは奴。神威と似たような存在なんだ・・・。この能力は母親譲りだけどな」

「・・・なんで止めたの？いつもめんどくさいとか言つてゐるのに」

「エイトが聞く。  
「・・・オレと同じような道を辿つてほしくないんだ。オレは一回とんでもない過ちをおかした。あの2人にそんな道を辿つてほしくないからな」

大護はそう言つて立ち上がつた。

「なんかあつたら呼べ。隊舎内ブラブラしてつから」と言つて大護は隊舎へ戻つていつた。

その夜。機動六課隊舎の近くの海上にガジェット？型が出現した。ヘリポートに集まつた。機動六課前線メンバー。大護はなのはトイアナを見ていた。

「・・・トイアナは自室で待機しようかなのはが言つた。

「・・・」

2人の会話を黙つて聞いてる大護。そして、ため息をつき。2人の間に入り。

「大護くん・・・」

「大護さん・・・」

ビシッ ビシッ

2人に「コピング」した。

「「えつ？」」

驚く2人。

「お前ら2人にはやるべき事があるだろ。昼間言つたろ?人間はわかり合う事ができるつて」

その言葉にハツとする2人。

「話し合えば良いだろ?夢だとか目標だとか」と言つてへりに乗る大護。

「大護くん・・・みんなロビーに集まつて。教えてあげる私の教導の意味を」

なのはがフォワード4人を集めた。その光景を大護は優しい瞳で見ていた。

ガジェットの迎撃が終わり。なのははティアナにクロスマリージュのダガー モードを見せた。ティアナは大泣きしながらずつと謝つていた。

「・・・これで良いかな」

その光景を見ていた大護は満足そうに微笑んでいた。「盗み聞きは良くないよね?」

フェイトに耳を引っ張られ連れて行かれる大護。

「ちょっと待て!! 痛いって!!」

悲鳴をあげる大護。

「ありがと・・・」

フェイトは大護に聽こえないように礼を言った。

## 第十話 機動六課のある休日（前編）

あの事件から2週間後。いろいろあつたがあの時以来大護となのは達の距離が少し縮まつたようだ。理由ははやて、フェイトの2人が大護があの時止めに入つた理由を話したのもあるが彼が本当は優しいと知つていてるからだ。あれ以来なのはもティアナも無茶をしなくなつた。

「はい。今朝の訓練も模擬戦も無事終了。で、何気にさつきの模擬戦が第一段階の見極めテストだったの。どうでした？」  
なのはがフェイトに聞く。

「合格」

即答するフェイト。

「あれだけやつて問題がある方がどうかしてるけどな」  
ヴィータが言う。

「大護くんは？」

「オレは詳しい事は知らんが良いんじゃね？」

「じゃあ明日からセカンドモードでの訓練ね」

「明日・・・から？」

4人とも不思議に思つている。

「今日はみんなお休み。町に出て楽しんでくるといいよ」  
なのはの言葉に4人は目を輝せていた。

朝食を食べているとはやてが突然

「そういう世界つてどういう世界だったの地球つて言つてたけど魔法文化あつたみたいな事言つてたし」

「オレの世界？魔法はあつたが魔石を媒介にしてからこいつの魔法とは違つたぞ」

「魔石？」

「簡単に言えば魔力を持つてゐる石。オレの世界はそれを加工して魔法を使ってたんだ」

「ということは雷龍丸も戦刀もそれから作ったの？」

なのはが聞く。

「ああ。雷龍丸は雷霆石つていうかなり特別な魔石から作つて、戦刀は初代十三隊の総隊長の使つていた刀だ」

「へえ～他に何かあつたんか？」

「後、亜人がいたくらいかな」

「亜人？」

「エルフとか獣人の事」

そんなこんなで話しが終わり。4人を見送つてから大護は隊舎の近くの草原で寝転んでいた。

「大護が寝てる・・・」

フェイトが大護の寝顔を見て言った。

「ホントだ・・・」

その後ろから見ているのは、大護は微動だにせず寝ている。大護は機動六課の女性陣から見たらかなりの美男子だ。ちょっと高めの身長に白髪。左耳のピアス。不良みたいではあるがカッコイイ部類に入る。その彼が無防備で寝ているのだ。

「こう見ると大護つて普通の人には見えないよね」

「うん。でたらめに強いけど・・・」

2人が話していると

「人の寝顔を見るとはかなり良い趣味だなあ～」

と青年に言われ2人はデコピンされる。

「お、起きてたの！？」

慌てるなのはとフェイト

「お前らがオレの上に来てる」から。で、何のようだ？尋問なら受けないよ」

「ほり、前の事でお礼とか言つてなくて……」

なのはが言つ。

「？？？オレはお礼を言われる事なんかしてねえぞ。それより謝つてなかつたな」

「そんな事ないよ！私の方だよ謝るのは……」

落ち込むのは。すると、何を思ったのか大護は彼女の頭を優しく撫でた。

「元気が出るおまじない。ガキの頃、母さんによくやつてもらつたんだ」

と言つてフェイトの頭も撫でる。なのはと違つてフェイトは顔を赤らめていた。

「・・・オレはな一回だけやつてはいけない過ちを犯した。その時のオレにあの時のはが似ていたから止めに入つたんだ・・・」

「やつてはいけない過ち？」

フェイトが撫でられながら聞く。

「前に話したよな。オレには義理の兄が2人いたつて。オレはその人に怒りまかせに刃を向けたんだ・・・それだけならよかつた・・・でも、その人に消える事のない傷をつけちました・・・。オレの事を本当の弟のように思つてくれた人を殺しかけたんだ・・・」

悲しい眼をする大護。

「・・・聞いたやいけないと思つけど・・・なんで」

なのはが聞く。

「あの時のティアナみたい・・・いや、ティアナよりオレは力が欲しいつて思つていたんだ」

「・・・なんで」

「復讐つていう呪いにとり憑かれていたんだ・・・その先の事を考えずにな。だから、ティアナもなのはも本当はあんな感じで止めたくはなかつた・・・。『ゴメンな』

「そんな事ないよ！！私だつて・・・」  
なのはが言葉に詰まってしまう。

大事などこやけど至急3人とも隊舎に戻つて！！緊急事態や！！。  
はやてから念話が入る。

「話しの続きはまた今度。戻るぞ！」

話しによれば休暇を楽しんでいたエリオとキャロが地下から現れた  
女の子を保護。そして、その女の子がレリックのケースを持つてい  
た事が事の始まり。

「フォワードの4人はもう1個のレリックを。大護くんもそつちを  
お願い！私達は空のガジェットを殲滅させる！！」  
なのはが指示する。

「――「了解！！」」

「わかつた」

5人は地下水路を走る。その途中にスバルの姉。ギンガから今回事  
件の事を聞き合流しレリックのある広い場所に出た。だが、そこには  
「そのケースは渡せないんでね！！」

6人を太い槍が襲つたが大護が戦刀で軽く防いだ。

「剛槍“神鉄如意”・・・今度はお前か、ぐにゃぐにゃの色男」大  
護の視線の先にはオールバックのプラチナブロンドの髪にスースを  
着た男がいた。

「久しいな雷童子」

男が言つ。

「死人が言つうか？“完全な世界”の参柱臣の将軍の1人。ファーニ  
ヴァル」

大護が戦刀を向ける。

「スモールファイブ」

「知ってるんですか？」

ギンガが聞く。

「知ってるさ。三尾より強いがあいつよりはマシだ・・・」

「言つている事がおかしいような・・・」

冷静に考えるティアナ。

「こいつはオレが相手する。お前らはレリックをなんとかしろ！..」  
大護はそう言つてファーニヴァルに切り掛かる。今回は戦刀を解放  
していない。

「ふんっ！！」

剛槍と大刀がぶつかり合つ。凄まじい音が聞こえる。ファーニヴァ

ルが空中へ距離をとつた。

「龍天・・・月破！！」

を放つが避けられ天井に穴が空く。大護はファーニヴァルを鎧ぜり  
合いに持ち込み。空へ押し出した。

「ここなら好きなだけ暴れられるぜ・・・戦刀！雷龍丸！」

大護が2本の愛刀を解放させる。漆黒の刃“戦刀”を右手に。雷を  
纏つた刃“雷龍丸”を逆手に持ち構える。天龍剣 一対一刀の構  
え。

ファーニヴァルは伸縮自在の槍。剛槍“神鉄如意”を構える。

3つの武器がぶつかり合つ。その音はまるで大砲を撃つているかの  
ようだ。

その頃。幻影と実機の混成部隊に苦戦していたがはやてが限定解除  
しガジェットの殲滅に当たつている頃、なのはとフェイトはヘリの  
護衛に向かっていた。

突然2人の前方の空間が歪みリニアレール事件の時に姿を現したフ  
ード男が現れた。

「悪いけどここから先は通せない」

男が言う。構えるなのはとフェイト。男は左腰に長剣を一本携えている。

「あなたは何者ですか！？」

フェイトが問う。

「何者？大護から聞いてないのか？」

「え？」

その言葉を不思議に思うなのは。“大護から”

「あなたは大護くんの事を知っているんですか！？」

今度はなのはが問う。

「ハハハハハハ！！知ってるかだつて！？そりやあ知ってるさ！アハハハハハ！！確かにあいつは話さないだらうな・・・オレのこと・・・」

男は笑う。そして、フードをとつた。その顔に2人は言葉を失つた。灰色の髪に紅い瞳。誰かに似ている顔立ち。そして、男は言つた。

「オレの名は神威。柳瀬 神威。大護の実の父親だよ！！」

第十話 機動六課のある休日（後編）／大護（子） 対 神威（父）

「大護のお父さん……」

フェイトは目の前にいる男。柳瀬神威の言葉に耳を疑つた。

「父親つてもあいつは認めてねえけどな。オレはあいつに復讐つて名の呪いをとり憑かせた張本人だからな」

「どういう意味？」

再びフェイトが問う。

「……オレがあいつの母親。オレの妻をこの手で殺したからだ」

その言葉に2人は言葉を失つた。

「嘘でしょ……」

「大護のお母さんを……あなたが……」

2人は神威の言葉を疑つた。いや、信じたくなかった。生涯をともにする大切な人を殺した？ ありえない。2人の脳内は混乱していた。

「あんたらの物言いだとあいつは自分の事話してないらしいな」

神威が言つた。

「自分の事？」

なのはが聞く。

「あいつは特別な血筋を持つ男。大天使を持つ男だ」

「かみのちから……？」

フェイトがハツとする。

なのは。もしかして

顕現の事？

2人が念話をしていると、神威が一本の刀を抜いた。大護のようにな  
変な刀じゃない刀。鞘も锷もしつかりしている日本刀。

「さてと。こつちはこつちの仕事をしなくちゃならないんでね……  
悪いけど遊び相手になつてくれよ」

左手に刀を構える。一見隙だらけだが、隙がない。

「あなたの目的はなんですか！？」

なのはが問う。

「目的？今回はあいつとあんたらの足止めだけど、構えを崩さない神威。2人も構える。彼の実力は分からぬ。下手に動くのは危険。

「来ないのか？ならこっちから行くぞ！」

襲い掛かる神威。フェイトがそれを防ぐが

「強いつ！！」

徐々に押される。

「おいおい・・・がつかりさせるなよ」

フェイトが一旦距離を取る。

「ディバイイイイイン・・・・バスター――！」

なのはの砲撃が直撃した。

「やつたの！？」

煙りが晴れる。そこには神威の姿はない。

「すごいな・・・でも、その程度じゃオレは倒せないぜ」2人が振り返るとそこには無傷の神威がいた。

「いつの間に・・・」

「ファーニヴァル程度じゃ相手にならんか・・・。あと、ヘリはもう無理だな・・・」

神威の言葉にハツとするなのはとフェイト。

市街地に魔力反応！！推定オーバーS！！

ロングアーチから連絡が入る。ファーニヴァルを倒し終えた大護は

「雷天」

その場から消えた。

廃棄都市の一角からヘリに向かつて砲撃が発射された。

直撃。なのはもフェイトも間に合わなかつた。誰もがヘリは撃墜した思つたが

「さすがに落とさせないか・・・あいつは」

神威だけは違つた。

砲撃をしたナンバーズN。・10。ディエチが見たところには。

「・・・・・」

左手一本で砲撃を防いだ大護の姿があつた。そして、その左手を上げる。そこのたナンバーズの2人N。・4のクワットロとディエチの上に雷雲が

「七天 蒼龍破！！」

雷の雨が襲う。

ビンゴ！！

シャーリー達ロングアーチが思つたが

「逃げられた・・・！それより・・・」

再びその場から消える大護。そして、なのは達2人と神威の間に姿を現した。

「速いな・・・大護」

神威が褒めるが

「神威・・・！」

大護は戦刀を向ける。

「おいおい。実の父親を呼び捨てか？」

「あんたをあの日から父親と思つた事はねえ！」

「そりだらおな・・・」

神威は一本目の刀を抜く。大護は戦刀と雷龍丸の二刀流の構え。

「なのは、フェイト。さがつてろ・・・。巻き込まねえ自信がねえ・

・・・！」

大護の体に雷が纏い始めた。2人は今の大護がやばいと感じヘリのとこまでさがる事にした。

神威は長い一本の日本刀、右手に空刀“虚空”。左手に十鍊。一本とも初代草鹿鍊空が作つた名刀だ。

「雷天」

雷龍丸が徐々に消えていく。そして、大護に雷が纏う。漆黒の刀“戦刀”を両手持ちで構える。

「大護が本氣で戦う・・・」

フェイドが言つた。

市街地に魔力反応！推定 え？

シャーリーから念話が入る。

「シャーリーどうしたの？」

なのはが聞く。

ト、SSSが2つ！？こんなのがりえない！！

シャーリーが混乱している。その時

ドーンっ！！

大気が揺れた。2人が見た先には、大護と神威が鎧ぜり合いをしている光景だった。

「どうした！？この程度か！？」

神威が一本の日本刀で押す。

「くつ

龍天・・・」

戦刀に漆黒の魔力が纏う

「月破！！」

本来放出される月破を戦刀に纏わせる事によつて破壊力を格段に上げる技。

「つお！？」

距離をとる神威。

「危ねえ危ねえ。雷速にこの攻撃力・・・とんでもねえな・・・」構え直す神威。大護を見た瞬間、大護が消えた。

「！？」

そして、突然目の前に龍天月破を纏つた戦刀を構える大護の姿。

「虚空一閃！！」

ほぼ、条件反射でそれと刃を交える。そして、また大気が揺れる。大護は再び光速の世界へ。雷龍丸の雷を自らの身に纏わせる事で雷と同等の速さで攻撃する事ができる雷速術。

「おつかねえ・・・悪いが見えるんでね！？」

大護の雷速に先回りし虚空と十鉄を構える神威。三本の刀が交じり合つ。剣合だけで大気が揺れる。それはもはや人間のする戦いじゃなかつた。

再び距離をとる2人。

「さすがだ。本気じやねえのにそんなに強いか。やつぱりお前は人じやねえな・・・まあ、オレとコフイ、いや、ルシフエ！？」神威が何かを言いかけた時大護が切り掛けた。

「てめえが母さんの名を口にすんじゃねえ！」

怒りをあらわにする大護。

「そゆ事・・・まだ、覚醒してないんだな・・・て」

「黙れえ！！」

最大級の龍天月破を放つ大護。

「悪いが・・・本気でいかせてもらう・・・」

大護は自分の指を戦刀で斬らせ血を刃に流す。

「『血に色に染まれ 紅色戦刀！！』」

戦刀が深紅の刀に変わつた。

戦刀本来の姿。紅色戦刀。戦国の時代その役目を忘れた刀がその刀

身を血で染め上げた刀。

「……初代の所有者しかできなかつた一段解放……おもしろい

再び刃を交える2人。

「あんなの化け物じやねえか・・・」

遠くで映像を見ているヴィーナが言う。フォワード4人とリインとギンガも同じだ。あんな戦い見たことない。それしか言葉が出てこない。

幾度なく刃を交える大護と神威。その光景はかつて親子だったとは思えない。敵としての2人。距離をとる2人。体には無数の切り傷。だが、まだ致命傷のケガをしていない。

神威が再び構える。

「ドクターが退け。だそうです。神威様」

のトーレがいた。

おいおい 今良いとこなんたよ  
睨む神威。トーレは一瞬怯えたが  
牙魔しないて浴しけれ

「感謝します」

刀を鞘に仕舞う神威。

「悪いな！勝負はお預けだ！次会う時はせめて覚醒くらいしておけ

よ。天使の血を引く者。大護よ！！」

神威はそう言つて姿を消した。

「・・・・・」

大護は戦刀と雷龍丸の解放を解き鞘に仕舞う。

「大護くん・・・」

なのはとフェイトが寄つてくる。

「済まないな。迷惑かけた」

そこにはいつも大護がいた。だが、その瞳は悲しい眼をしていた。

その後。レリックも無事封印し隊舎へ帰る時大護はずつと夕焼けの空を眺めていた。

（・・・本当の選択。か・・・）

いつぞやの夢に出て来た男の言葉を思い出していた。

（？？？）

ナンバーズとともに帰つて来た神威は  
「神威様は大丈夫なの？」

「N.O.・6。セイン達と歩いていた。

「いや、きつちり良いのをもらつたよ」

セインに腹の傷を見せる。

「それにオレもあいつもまだ本気じゃない・・・」

その言葉を理解できなかつた。

神威は1人で歩いていた。

「ハハハハハハ！！まだまだよなあ！？そつだろ？・ラファエル！」

！」

狂喜の笑いをする神威があつた。

## 第十一話 預言と天使

大護が神威と対峙してから翌日。

はやは部隊長室でフェイトと話していた。

「大護くんは？」

はやてが聞く。

「朝からどこにもいなくて・・・たぶん、まだどこかで寝てると  
思うけど」

「まさか、あの人があの人が大護くんのお父さん。だつたとはな・・・ど一  
りで話したくないわけや」

「うん。あの人人が言つてた。『オレがあいつの母親を殺した』つて  
『そして、大護くんの魔力値は推定SSS以上。あの人も同じ』  
『ねえそろそろ聞いても良い?六課設立の本当の理由』  
『そやね。そろそろ、ええ時やな。これから、カリムんとこに行く  
んよ。クロノくんも来る』

「クロノも?」

「あと、大護くんも連れていぐ。彼が一番の“鍵”やから」

その頃。大護はとある木の上で寝転んでいた。

「・・・天使・・・か。オレは・・・」

神威から言われた言葉を考える。

「考えててもしようがねえか・・・」

木から飛び降り隊舎へ向かう。

はやは達が入った部屋に入るとなのはに昨日保護した女の子が泣き  
ながら抱き着いていた。

「・・・なにこれ？」

率直な感想を述べる。

「大護くん。どうやら懐かれちゃつたみたいなんよ、なのはちゃん  
「なるほど」

そこにフェイトがうさぎの人形を使いなだめる。

「・・・達人がいるよ達人が」

「フェイトちゃん。あーいうのなれどるからなー」

「慣れてるつて・・・まさか、フェイトって子持ちー!?」

かなり誤解している大護。そこに

「誰が子持ちだつて？」

女の子をなだめ終えたフェイトがやつて來た。

「あ、い いや、それはね」

「名前聞こえなかつたんだけど? 誰かなー?」

恐ろしい笑顔のフェイト。大護にとつてはトラウマの笑顔。大護の  
脳内にある記憶がフラツシユバツクした。

「ゴメンなさいーー! 食べないでくださいーー!」

意味不明な事を言い物陰に隠れた大護。

「・・・」

あまりにも急な出来事でそこにいた。なのは、はやて、フォワード  
の4人とフェイトは絶句した。

「大護くーん。大丈夫?」

ソファーの後ろを見るなのは。そこには、あの大護が丸まつて震え  
てゐた。

「もう言わないから食べないでーー!」

泣きながら叫ぶ大護。

「大護くん。フェイトちゃんは君の事食べないから落ち着いてな。  
それより行くとこあるからついて来て  
はやてがなだめる。  
「・・・わかつた」

大護達が部屋を出た後、フォワードの4人は

「大護さんって……」

「強いかどうかわかりませんね」

ヘリの中。大護はヴァイスの隣の席にいた。

「なんで大護が隣なんだ? 部隊長達と同じ位にいたらどうだ?」

「……何處的魔羅一劍，三三三！」

「金髪の悪魔? フェイトさんの事が? 食べられぬって……」

「トラタマだから言いたくない・・・」

「アリカの事が？」

卷之三

「アーチー、アーチー、アーチー！」

大護の言う金髪の悪魔の声がした。

「来た――！食べられる――！ヴァイス助けて――！」

「うあ！！！大獲離せ！！あぶなえか？！？！」

「食べ———ひ———る———」

昨日凄まじい戦いをした男が泣きながら助けを求めていた。ヘリの中は一種の力オース状態になっていた。

聖王教会。

「ハア……で、なんでオレまでこんな感じで来る必要があ  
るんだ?」

やつと落ち着いた大護。

「機動六課の後見人の1人が大護くんに会つて確かめたい事がある

「んだつて」

「はやてが言つ。

「確かめたい事？」

はやて後を歩きある部屋にたどり着いた。

「コンツ コンツ

「どうぞ」

ドアをノックすると女性の声がした。入る4人。そこには、金髪でカチューシャをした女性カリム・グラシアとショートヘアでカリムの秘書のシャツハ・ヌエラ。黒い服を着た男性クロノ・ハラオウンがいた。

「失礼します。高町なのは一等空尉であります」

しつかり敬礼し挨拶するのは。

「同じくフェイト・T・ハラオウン執務官であります」

フェイトも同じように挨拶する。

「柳瀬大護です」

名前だけ言つ大護。

「聖王教会。教会騎士団騎士カリム・グラシアです。よつこそ。大護様」

「はい?」

カリムの言つた言葉に大護は素つ頓狂な声を出す。

「どうなされました?」

「いや、オレなんかに様なんて付けないでくれ。苦手なんだ・・・」

苦笑いしながら話す。

「そうですか。どうぞ席へ」

席に座る4人。

「クロノ・ハラオウンだ」

クロノと握手する。

「フェイトちゃんのお兄ちゃんや」

はやてが言つ。

「久しぶり。お兄ちゃん」

「ぶ お兄ちゃんはよせ。お互いまつい年なんだから  
フェイトの言葉に赤面するクロノ。

「なあはやて。クロノって結構妹に対して過保護だろ?」

「まあ言えてるなあ」

「・・・しかもフェイトって天然だから困るだろおな

「なんか言つた?」

再び怖い笑顔で大護を見るフェイト

「何も言つてません!!で、六課設立の理由となんぞオレなんか連  
れて來たんだ」

大護がはやて達に聞く。

「六課設立の表向きの理由はロストロギア。レリックの対策と独立  
性の高い少數部隊の実験例なんだが本当の理由は、

クロノが説明するとカリムが立ち上がり。

「それは私の能力『預言者の著者<sup>プロフェューテン・シリフテン</sup>は最短で半年から数年先に怒る未  
来を詩文形式で記す事ができます。文字も古代ベルカ語で解釈によ  
つて意味の変わる難解な文書』

3人の前にその預言の紙を見せる。なのはとフェイトは読めてない  
みたいだが大護にはそれが読めていた。

「オレ・・・この字読めるんだけど」

その言葉に6人は目を見開いた。

「今、なんて言つた・・・」

フェイトが聞く。

「この古代ベルカ語だつけ?読めるんだけど・・・」

「なんでや!?おかしいやんけ!」

はやてが問い合わせる。

「その話は後で。騎士カリム。その預言にヤバイ事件が書き記され  
たつて事だろ?」

「はい」

「この預言には管理局のトップも目を通すことになつている。有識

者の予想情報として「

クロノの付け足す。

「ちなみに地上本部は」の預言がお嫌いや事実上のトップがああやから「

「レジアス・ゲイズ中将だね」

「あのテレビに映つていた顔デケエ、オッサンの事か」

大護は昨日テレビで見た映像を思い出していた。

「その預言が

旧い結晶 無限の欲望が集い交わる地 死せる王の下 聖地より彼の翼が蘇る 死者達は踊り なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ちる それを先駆けに 数多の海を守る法の船も砕け落ちる

「それって」

「まさか！？」

なのはとフロイトは預言の意味を理解した。

「レリック事件をきっかけに始まる管理局システムの崩壊と地上本部の壊滅の預言です。そして、」の預言が書かれたと同時期に大護さん。あなたに関する預言が出ました」

「・・・あんま占いとか信じたくないけど。聞かせて」

大護はゆっくり紅茶を飲んでいた。

「はい。

蒼き翼の天使 彼の地に舞い降りる 死者を操る黒き天使とあいまみえん 二つの翼がぶつかりし時 本当の選択をする

「これがあなたに関する預言です」

「」の“蒼き翼の天使”か“黒き天使”が大護くんかと思つとつたんよ。大護くん解る？」「はやてが聞く。

「天使ね・・・確かに蒼き翼はオレの事で黒の方が親父だな」「だよね。顯現使つた時天使に見えたし」  
なのはが言つ。

「その前になぜ古代ベルカ文字が読めたんだ？次元漂流者なのに」  
クロノが聞く。

「その理由は・・・・・オレがその預言通りの蒼き翼の天使だからだ」

「どういう意味なの・・・」

大護の呆然とする6人。

「オレの父親。神威が墮天使で母親が大天使の血を受け継ぐ者だつたんだ。母親は全知全能の大天使ラファエルで父は神を裏切つた墮天使ルシフェルの血を継ぐ人だつたからだ・・・」

大護の言つている事が理解できない6人。

「そろそろ話すべきだな・・・オレの過去を・・・なんでオレがここに来ちましたのかとオレ自身の事を・・・。明日の午後2時から六課のブリーフィングルームで話すから騎士カリムもクロノも来れるなら来た方が良い。オレは外にいるから・・・」

そう言つて大護は部屋を出て行つた。

「なんか、いろいろあつたね・・・」

なのはが口を開いた。

「うん・・・」

「とにかく！明日話してくれるつて言つたんやから。カリムもクロノくんも明日来て！――

はやてが言う。

「わかつたわ

「わかつた」

2人は了解し話しあは終わつた。

ついに明かされる柳瀬大護の過去。悲しみと戦いという道を歩んできた男の過去が明かされる・・・

## 第十一話 預言と天使（後書き）

ついに過去編突入！！

恐らくかなり長くなると思います。その辺は御了承下さい！

第十一話 追憶の天使（少年編）（前書き）

過去編ついに始まります！  
最初からかなり悲しいです。

## 第十一話 追憶の天使（少年編）

翌日。午後2時10分前。

ブリーフィングルームには部隊長のはやてを初め前線メンバーの隊長、副隊長の4人。フォワードの4人。シャマル、ヴァイスにシャーリー、ロングアーチのルキノにアルト。はやての肩にいるリイン。そして、六課後見人のクロノにカリムの総勢17人という人が集まつた。

「……なんでこんなにいるんだ？」

素直な感想を述べた大護。

「いや、みんな知りたいんよ。大護くんの事」  
はやてが笑顔で言つ。

「なんで？」

「大護さんって彼女がいるか」

「気になっていますから！」

アルトとスバルが目を輝かせて言つ。

「お前ら……またそれか……」呆れる。というかこの事に関しては六課女性メンバーのほぼ全員が気にしている。

「映像で見せるから、気分悪くなつたら言え。最初はかなりグロいから」

「なんでや？」

「……見れば解る。

オレのいた世界はなのは達のいた地球とはかなり違う。まず、魔法文化はあつた。ここは異なつた魔法だがな。それとエルフや獣人、魔族いわゆる亜人と呼ばれる者達と一緒に暮らしていた

「画面に映像が映る。そこには薄い水色の髪をした4歳ぐらいの男の子とその母親が映つていた。

「オレの家は普通だけどちょっとだけ普通じゃなかつた。世界中を

旅して回っていたからな

「じゃあ、あの男の子は大護くん？」

なのはが聞く。

「そうだ。んで、一緒にいるのが母さんだ」

「お母さん若っ！」

スバルが言う。

「確かに、歳はあれで35だつたらしいが。スバル。関係ねえ事にあまりつつこむな」

「周りの町つていつてもかなり古いみたいだけど」

フェイトが聞く。

「オレ達の世界は文明とかが発達してるとこはあつたが発達してないところもあつてな。この地域は交易の町だからな」

「幸せそうですね」

キヤロが言う。

「この時はな。まあ、母さんに怒られるといつ恐怖もあつたが幸せだった。あの頃の神威。父さんも優しかったからな・・・」

大護はこの時神威の事を“父さん”と言つた。

「でも、オレが10歳の時にある事件が起つた。オレ達家族が日本にいた時の事だ・・・」

映像が10歳の大護の映像になつた。夕暮れ時。2人の兄みたいな人と遊び家へ帰つた。

大護『ただいまー！』

元気に扉を開けたがいつもの返事がない。

大護『？』

急いでリビングへ向かう。そこで見たものは

神威『・・・帰つたか。大護』

血がついた刀を握った父とその下で胸から血を流し倒れている母 フイだつた。

大護『父さん・・・なにやつてるの・・・』

神威『・・・母さんを殺したんだ』

聞きたくない言葉が言われた。

大護『な・・・んで・・・なんで！！』

神威『過去からの運命には逆らえないからだ・・・』

大護『わからない！ そんなのわからないよ！！』

神威

家から出ようとする神威。

神威『・・・オレが憎いならオレを殺しに来い・・・それがお前の存在理由になる・・・』

神威は去つていった。

ユフィ『だ・・・い・・・』

大護『母さん！！』

ユフィ『憎しみで

生きないで

大護の名前の意味

考えて

』

大護『うん！』

あなたを撫でてもらう。

ユフィ『元気の出るおまじない』

彼女は微笑むながら目を閉じた。

「これが全ての原因になつた」

みんな悲しい目をしている。

「オレはその後、十三隊というギルドのお頭に引き取られ今のこの力の基礎を学んだ。」

髪を水色から赤色に変えた大護の姿があつた。鋭い目つきで今の優

しそうな目ではない。

「そして、オレは・・・たくさんの人を殺した」

場所が変わり港の倉庫になった。そこには暴力団が何人もいてなにやら取引の準備をしている。そこに背中に大刀“戦刀”。左腰に雷龍丸を携えている大護の姿があった。

男A『何じゃてめえは！－ガキはとつとと帰れ！－』

大護

男A『誰だと聞いとるんじゃ！－』

大護『・・・今から死ぬ奴に名乗る名はない・・・』

その瞬間、男の首が飛んだ。大護が雷龍丸で男の首を斬つたのだ。他の暴力団員は

『貴様あ！－』

手に持つていた刀やら鉄砲で躍りかかる。だが、大護が斬る。いくら返り血を浴びようが斬りつづける。

見ている全員が顔を背ける。

「これが10年前のオレだ・・・」

最後の一人に雷龍丸を向ける。その周りは何十人もの人が死んでいる。大護が殺した。

最後の男にとどめを刺そうとした瞬間誰かに腕を捕まれた。

姫矢『よせ！お前はこれを望んだのか？』

黒い短髪の男。八番隊隊長の姫矢 准だ。

大護『邪魔しないでくれる？姫矢さん・・・』

姫矢『お前は神にでもなつたつもりか？』

大護『オレは己が強くなるためなら何でもする。それがたとえ人殺しでもな！！』

その瞬間、戦刀で最後の男を斬り殺した。

姫矢『お前・・・変わったな・・・』

大護『人は誰でも変われる・・・憎しみがあれば・・・』

睨み合う2人。

信次『ハイハイ！2人とも止め！！一応仕事は終わり！大護はとつとと帰還しろ！！』

金髪の男。十番隊隊長の宮田 信次だ。

嵐『とりあえず、大護を六番隊の隊長にするがこれからは人を殺すな』

燈色の髪の男。壹番隊の隊長の橘 嵐だ。

大護

倉庫を去つていく大護。

「これが昔のオレだ」

「嘘だろ・・・お前がこんな奴なわけねえ！！」

「そうです！！何かの間違えですよね？」

映像を否定するヴィータとリイン。

「いや、これは真実だ・・・これが12歳のオレだ。復讐に取り憑かれたんだ・・・」

全員がありえないという顔をしている。

「オレはこの後も人を殺し続けた。ただ、自分が神威に勝つためだけに・・・。その2年後オレは変わったんだ」

大護が信次と修業をしていた。信次は天才と呼ばれ、初代草鹿鍊空の創った五本の刀の一本 王刀“叢雲牙”の所有者だ。

信次『いい加減に戦刀の解放覚えるよ』

大護

やつてんだができない

信次『・・・大護。戦刀の伝説知つてか?』

大護『伝説?』

信次『戦刀の最初の所有者と初代の十三隊の壱番隊隊長はその刀を一振りするだけで百人の人を護つたと言われている』

大護『何が言いたい』

信次『大護・・・。お前に護る者はいるか?』

大護『護る者? オレにそんのはいらない! オレはただ強くなる! ただそれだけだ!!』

信次『それだけじゃ。あの人には勝てない。・・・・・それと見てるなら出て来たらどうです?』

空間が歪み。そこから神威が現れた。

神威『良くわかつたな。さすが、天才だな。竜人の末裔』

大護『神威!!』

躍りかかる大護。だが、

神威『ちよつとは腕を上げたらしいがまだまだ』

軽くあしはらわれる。

信次『ようつてのはオレを殺しに来たんですか? いくらかつての師匠といえどオレはあなたを許さない!!』

叢雲牙を抜く。かなり長い大剣だ。

2人の刀が交じり合つ。だが、一瞬の隙をつき信次の心臓を突いた。右手の空刀“虚空”だ。倒れ込み刺された胸から赤い液体。血が流れる。その光景はあの時と同じ。母を失った時と

大護『信次!!』

神威《さて、そろそろお前も殺すか・・・もつ覚醒しないみたいだからな》

神威が近づいて来る。

大護《・・・護る者ならある・・・》

神威《ハ?》

大護《護る者は・・・オレの・・・オレの存在を認めてくれる奴だ! ! 》

涙を流し戦刀と雷龍丸を構える。

大護《『目覚めろ! 戦刀!!』『轟け! 雷龍丸!!』》

一本の刀が真の姿になる。漆黒の刃“戦刀”。雷を纏つた“雷龍丸”。

大護《ああああ!!》

神威に斬り掛かる。防ぐが威力が桁違いに上がっている。

神威《何!?》

大護《ハアアアアア!!》

攻撃の手を休めない。そして、

大護《龍天・・・月破!!》

戦刀の黒い刃が神威を切り裂いた。

神威

神威は粒子となつて消えた。

大護《信次!!》

信次《・・・わかつてゐるぢやねえか・・・お前の護る者・・・お前は本当の“護るもの”を見つける・・・それがお前の未来を変える・・・》

姫矢・嵐《信次!!》

2人がやつて來た。

信次《准・・・オレ達の弟を頼んだぜ・・・》

姫矢

信次《嵐。十三隊を頼む・・・》

嵐

信次『大護・・・じゃあな。いろいろ楽しかったぜ・・・』  
彼は目を閉じた。

大護『信兄？・・・信兄！-』

6年前。初めて言つた彼への言葉を言つが彼は目を開けることはなかつた。

「信次さんは・・・」

なのはが言つ。

「24歳で死んだんだ・・・。オレはこの時、十三隊を辞めようとした」

「なんですか？」

ティアナが聞く。

「生きる意味が無くなつちまつたからだ・・・。神威を倒すことも兄さんを倒すことを全て無くなつたからだ。でも、ある男と会つてそれが変わつたんだ」

信次の葬儀が終わり大護は十三隊のギルドの都市“裏街”を出て行こうとした時1人の男が前にいた。

？？？『逃げるのか？』

大護『千樹 憐・・・。そうかもな・・・』

七番隊隊長の千樹 憐だ。

憐『逃げるなよ！』

大護『わからねえんだ・・・自分が何すればいいか』

ガツ！

憐が大護を殴つた。

大護『何しやがる！』

憐『何すればいいかわかんねえじゃないよ！人殺した罪から逃げるなよ！！』

ガツ！

今度は大護が憐を殴つた。

憐『お前だけがつらいわけじゃない！つらいからつて逃げるな！』

大護『てめえに何がわかる・・・。全部失つた奴の気持ちが！！』

刀ではなく殴り合う2人。

憐『お前だけが全部失つたわけじゃない！嵐もオレも隊長格みんながお前と同じなんだ！！』

大護『！？』

憐『自分が生きて何かをしろ！逃げたところで何にもならない！』

！』

大護『わかんねえんだよ！！』

大護の拳が当たり。憐は倒れた。

大護『クソッ！！』

大護は走りだした。

小高い丘で一人夜風に当たつていた。憐に殴られた左頬をさする。

大護

そこに

姫矢『やつぱりここにいたか・・・何かあつたらいつもここに来るよな』

後ろには姫矢と憐がいた。

姫矢『お前の気持ちはわかる俺も一時期同じようになつた。そん時

に信次の奴に言われたんだ・・・『迷つてんなら自分のしたい事をすればいい。そうすれば道は見える』 つてな・・・。確かに人を殺した罪は一生消える事ない・・・だからといって逃げる事も許されない』

憐『だから、オレも嵐達他の隊長達はあのギルドにいる。だから、大護もいて良いんだ』

姫矢『生きる意味なんて考えてもわかるもんじゃねえ。俺達は自分がいたいからあの場所にいる』

大護『オレもいても良い・・・のか・・・』

憐『当たり前じゃん！オレ達もう“友達”だろ？』

その言葉に大護は涙を流した。

憐『泣くことじゃないだろ！？』

大護『ありがとう・・・。憐』

いい笑顔の大護がいた。

「つーわけだ」

「いい話しゃんけ〜」

「はやてちゃん」

はやてトリインが泣いていた。

「それから、他の隊長達とも仲良くなつた。」

「あの時お前の父親は死んだのか？」

シグナムが聞く。

「確かに死んだ・・・オレの目の前で粒子になつてな・・・。なん

でこの世界にいるかはわからん

「なんか吹つ切れたつて感じだな」

映像を見ているクロノが言う。

「なんかあいつら見てたら迷つてるのがバカらしくなつたからな」

映像は十二人の隊長と数人の副隊長で楽しく宴会をやつている。

「あのせあ・・・大護この時14歳だよね?なんでお酒飲んでるの?  
?」

フェイトが聞く。

「知らん。ほぼ成り行きで飲んでた」

きつぱり言う大護。

この時大護は14歳。憐は16歳。

「それ以来オレは人を殺さなくなつた。でも、殺さなくちゃならぬ  
い奴を殺す事もあつた・・・」

「なんで・・・」

なのはが聞く。

「・・・三尾並に危ない連中がいたからだ。それは2年後。オレが  
16歳の頃。この時にオレ達は命を懸ける戦いをいくつもした・・・」

「

16歳に成長した大護。この時、彼ら十三隊は壮絶な戦いをする。

## 十一話 追憶の天使（テーゼ委員会編？）

「元々十三隊は日本政府直属のギルドなんだ。政府からの依頼とかをするところでな」

大護が説明する。

「その依頼といつのは？」

カリムが聞く。

「主に密輸の阻止だとか暴力団の検挙とか、政府が表沙汰にできな  
い事を裏でやるのが仕事だつた」

「じゃあお金をもらつていたんですか？」

エリオが聞く。

「ああ。その依頼によつて違うけどな」

「密輸される物は何ですか？」

ティアナが聞く。

「武器とか魔石だな。そんな中やつかいな物が密輸されてしまい。

東京都内の某地区が廃墟になつた」

映像が都心のビルが崩れまるで戦争でもあつたかのようだ。

「“リュンカ”。古代文字で『見えざる』と呼ばれる物が原因にな  
つたのがこれだ」

「ひどい・・・」

みんな画面を睨む。

「この事件はマスコミからはただ自然現象だの言われた。でも、実  
際はこの世界でいうロストロギアが引き起こしたものだつた。

この一ヶ月後。6月にオレ達は魔獣と呼ばれるのと戦う事になつた

「魔獣？」

はやてが聞く。

「簡単に言えば怪獣の事」

映像が大護と嵐、姫矢が矢墨 潤一といつ彼らに情報提供をするパソコンを見ている。

嵐『で、そのTILT（ティルト）って組織が怪しつて』

矢墨『はい。この組織内部で魔殖細胞の実験がされているらしいと情報があつた』

姫矢『ティルトは確か軍の武器や医学に関わる仕事のはず』

矢墨『でも、連邦政府から人が来てから方針が変わつたらしく。この人』

画面を見る3人。

大護『碇 ゲンドウ・・・?』

矢墨『でも、連邦のデータベースにこの名前はないから・・・』

嵐『怪しいな・・・』

姫矢『政府に言つか』

「魔殖細胞って何ですか？」

シャーリーが聞く。

「そのまんま魔獣の細胞の事。この組織、つつても研究施設でそれを使った生体実験をしてたらしい」

「生体実験・・・」

フェイドが言つ。

「その魔殖細胞は侵食性が高く人や亜人に投入しちまうと・・・」「すると？」

「体内で細胞が猛スピードで繁殖し人の細胞を魔殖細胞にしてしまう。そして、その人物は、魔獣へと姿を変えてしまう」

「そんな」

「ひどい！！」

はやてとフロイトが言う。

「それを何とかするためにオレ達はティルトと介入することになつた」

嵐『突撃するのはオレ、影義、リーダー、大護、姫矢に凌の6人。スリーマンセルで行く。目指すは地下最深部のセントラルドグマだ！行くぞ！！』

嵐はかなり女顔の二番隊隊長の富木 影義。リーダーこと三番隊隊長の宗像 热志とともに。大護は姫矢と銀髪の長い髪の女性、十三番隊隊長の吹石 凌とともにティルトへ向かった。

正面から強行突破。作戦なんてありやしない。

内部にはすでにティルトのSS（私設軍）が。手にはマシンガンや銃を持っている。それはまるで戦争のようだ。

姫矢『SSまで持つてるか。めんどくさい！』

大護『とりあえず倒しながら行くしかないね。凌！そつちはどうだ？』

凌『たいてい片付けたけど兵が多くすぎる！！』

彼女の両手には一本の刀が右手に華炎丸。左手が華氷丸だ。

姫矢『あの3人は大丈夫だ！先に行くぞ！大護はしんがりを頼む！』

！』

大護『了解！』

2人の後をついて行こうとしたら、突撃床が開き中に落ちた。

大護『ええ――！？』

姫矢・凌『大護――！？』

「なんで？」

はやてが笑いをこらえながら言つ。他のみんなも笑いをこらえているのが数人。

「連中の罠にはまつちまつたんだよ。でも、その穴は目的地に繋がつていたんだ」

大護《うわああああああああああああああ！！》

絶叫している。やつと地獄の滑り台が終わり見事に着地した。

大護

周りを見る。生体実験研究施設。どうやら目的地についたようだ。

？？？《ようこそ。セントラルドグマへ》

声がした。見ると黒いフードを被つた男がいた。

大護《あんたが碇 ゲンドウか？》

一本の愛刀の柄を握る。

？？？《いや・・・私の名前はザマ。テーゼ委員会の者です》

大護《テーゼ委員会？》

ザマ《しかし、今ここで死ぬあなたには関係ないことー》

ザマが襲い掛かる。

大護《遅い・・・》

神速の居合術が放たれる。崩れ落ちるザマ。

ザマ《ハハハハハハハ！ーー》の程度では私を倒すのは無理だなーー

ザマの体が変化していく。

大護《・・・己の体に魔殖細胞を》

ザマ《私は選ばれしアーテクトの子名のだーー》

体が人間の原形を留めていない。魔殖細胞の異常さを物語つてている。

大護《人間やめちまつたか・・・。だったら遠慮無しだーー》

ザマの腕は6本。それぞれ鋭利な爪がある。

大護はヒットアンドアウェーの戦法。ザマはそれを向かいつ。だ

が、ザマは大護の雷の付加能力の速さについていけない。勝負は一瞬。

大護『雷天 式烈斬！』

雷を纏つた戦刀と雷龍丸の一撃がヒットした。魔獣をも倒す天龍剣を加えればかなりの威力。倒れるザマ。

ザマ『我を倒したところで計画は止まらぬ・・・世界はいづれ・・・』

そこでザマは絶命した。

姫矢『大護！！』

大護『姫矢さん。凌。もう終つちまつたよ・・・しかも情報をある』

「このあとティルトは解散。地下最深部のセントラルドグマは焼却処分になった」

「ティルトは？」

「ナーフが聞く。

「奴らに関して全く不明。ただ、中東に奴らの本拠地があるのを知つたオレ達はそこへ向かうこととした」

「すごいな・・・十三隊は・・・」

シグナムが言う。

「でも、今回オレは日本で待機のはずだったんだが、ある事件をきっかけにそこへ向かうことになった」

大護『良いなあ～』

姫矢『しょうがないだろくじ引きで決まつたんだから』

中東に行つたのは嵐、影義、憐、九番隊隊長の孤門一輝に十一番

隊隊長の飛鳥 信と凌の6人。しかも決めたのはくじ引き。

「くじ引きで決めたのかよー！」

ヴィータがつっこむ。

「しょうがないんだよ。あいつら子供だから

「もしくじ引きじゃなかつたら・・・」

なのはが恐る恐る聞く。

「ケンカするに決まつてんだろ。で、あいつらが中東に行つてから一週間後。急に連絡が途絶えた。それと同時に魔獣が大量発生したんだ。だから、オレ達もそこへ向かうことになった

「何で？」

「飛空艇」

武甲山中から発進する飛空艇。

「お頭が持つっていたセイントローズって言つ船だ」

「カツコイイー」

目を輝かせるはやてヒシャーリー。

「空を飛べたのは良いんだが・・・エネルギーが無くてな。ある町に寄る事になつた。オレの故郷にな」

大介《ああ。だから、この町グラクトでいろいろ探す》

青い髪に顔に雷マークのタトゥーをしている五番隊隊長の富原 大介だ。

セイントローズを町の郊外に着陸させようとしたら

ビー ビー

アラートがなつた。

アルフィン《あ》

セイントローズの操舵手のアルフィンが言つた。

リーダー《あ つてなんだ!! あ つて!!?》

新庄《リーダー落ち着けつて・・・。ただ落ちてるだけだから》

侍のような風貌で長い黒髪をしばつている四番隊隊長の新庄 剛が

言う。  
茜那

その後ろにいる十一番隊隊長の鈴宮 茜那も続く。

リーダー《もうへへいやへへだへへ!!》

96

「船落ちたのか・・・」

クロノが言つ。

「着陸が軟着陸になつた」

「グラクトつてどんな町なんですか?」

スバルが聞く。

「オレの故郷みたいな場所だ」

新庄《必要な物は?》

大介《ソーラーパネル10基と食料だな》

リーダー《2つにわかれるぞ。オレと新庄、大介と茜那はソーラー

パネルを探すから姫矢と大護、アルフインは食料を頼む』  
と言われ金の入った袋が渡される。

食料の買い出しを終えた3人はとある店で休んでいた。

姫矢『そつか。ここはお前の故郷みたいなもんか』

大護『うん。この町にはだいたい5年くらいいたから』

姫矢『知り合いとかいるのか?』

大護『もう8年前だしな。いるかすらわかんないよ』

そうしているとソーラーパネルを探していた4人が帰つて来た。

姫矢『どうだつた?』

新庄『10基で50000だと! 頑張つてまけて3570だ』

姫矢『こっちの持ち金は2000···約2倍か···』

茜那『ねーねー! あれ何?』

茜那が指差すところには石造りの建物があつた。

大護『あれば闘技場だよ。剣闘士を闘わせる娯楽施設』

新庄『闘技場···』

嫌な笑みをこぼす。大介もだ。

リーダー『まさかお前ら···』

大介『善は急げだ!』

「どういう意味なん?」  
はやてが聞く。

「あそこに賭博施設があるんだよ」

なぜか大護の案内で場内にある選手の控え室に来た一行。  
新庄『しつかしこの町亞人達多いよな』

大護『元々交易都市だからな』

大護はなぜかヘアバンドをしている。

茜那『あそこから声が聞こえる』

奥から声が聞こえ耳をします。

男 『フェルトのやつこっちの言つ事に聞き耳持たねえ』

男 『どうする！？もう掛け金集まつてんだぞ！？』

男 『簡単だ。ようはフェルトが負ければいい』

男 B 『でも相手はあのフェルトだぜ』

男 A 『奴の試合形式を団体戦に変えといた。いくらあのフェルトだって無理だ』

「どういつ意味なんですか？」

スバルが聞く。

「八百長しようとして失敗したから力ずくでって話しだ」

新庄『気にいらねえ・・・』

リーダー『変な気を起こすなよ』

新庄『心配すんなよ。フェルトって奴なんか知らねえし』

？？？『私もお前の事なんて知らない』

新庄の後ろに大護と同い年ぐらいの猫耳の少女がいた。

大介『オレ達の背後を取るとは・・・』

新庄『てめえがフェルトか？』

フェルト『そうだ』

姫矢『ビーストクオータの剣闘士か・・・。そりやあ強いわな』

フェルト『私の強さをその理由にされるのは・・・』

大護『嫌い だろ？久しづびだな。フェルト』

フェルト『その眼・・・大護か！？』

大護ああ

フェルト『8年ぶりだな』

リーダー『知り合いか？』

大護『幼なじみだ。で、勝てるか？試合に』

フェルト『正直なところ厳しいな』

大護『なら手伝うか』

姫矢『ちよつ！大護！？』

フェルト『無理だぞ！それに・・・』

大護『心配すんな。もうあの頃のオレじゃねえよ。今のオレには一本の刀があるし相棒がいるだろ？』

フェルト『でも！』

大護『ガキの頃借りぐらい返させろよ』

フェルト『しうがない。変わらないな・・・お前は』

姫矢わかつた『わかつた。オレ達は一切手だししないからな』

大護

ゴオーン ゴオーン

鐘が鳴つた。

フェルト『次だ』

大護わかつた

闘技場は超満員。対戦相手は剣闘士にオーケが3匹にワーワルフも3匹。

剣闘士『おやおや。さすがのチャンピオンも助つ人を雇いましたか』

フェルト『心配無用だ。私の相棒だからな』

大護『豚に狼かよ・・・』

刀を抜く。今回は雷龍丸一本だ。

結果。大護、フェルト組の連携と強さの前に相手はボロ負けした。

「強いな」

シグナムが言う。

「その後ソーラーパネルも無事手に入つた」

大護『そーいやフェルト。両親は元気か?』

フェルト『2人とも7年前に・・・』

悲しい顔をするフェルト。

大護『そつか・・・。姫矢さん先行つて！後からちゃんと合流するから』

姫矢『わかった。ごゆっくりとな』

大護『墓参り・・・行くか?』

フェルト『そうだな』

墓参りを終えセイントローズに帰ろうした時

フェルト『大護。ついて行つても行つて良いか?』

大護『・・・別に良いんじゃね？ただし、オレ達は魔獣と戦争しに行くんだぞ?』

フェルト『そんなの平氣だ』

こうして新たな仲間を加えた一行は中東の大国アザディスタンを目指した。

「そして、テーゼ委員会。魔獣との全面戦争に突入する事になった」

次回。大護が怒る！その理由は？  
“大切な物”を少し理解する。

## 十一話 追憶の天使（テーゼ委員会編？）（後書き）

隊長紹介。

壹番隊隊長：橘 嵐

容姿：赤いオレンジ色の髪。身長192cm。体重81kg

性格：一言で言つなら馬鹿。だが、人一倍仲間思い。現在、宮田信次の妹の麗奈と婚姻関係にある。彼女は妊娠している。

刀：鬼神丸と天刀“天龍牙”

式番隊隊長：宮木 影義

容姿：一見女に見えるほどの顔。身長174cm。体重59kg

性格：いつも冷静だが極度の方向オンチ。実家は剣術道場。兄を倒し家宝の一本の刀を取り戻すのが夢。

刀：花風楼刃と黒天陵王玄武。

今回はこの2人についての説明です。  
次回とその次で全員紹介させていただきます。

第十一話 追憶の天使（テーゼ委員会終幕編）（前書き）

かなりはショッてしまった・・・。  
伝わっていれば幸い。

## 第十一話 追憶の天使（テーゼ委員会終幕編）

「向かつたのは中東の大団アザディスタン」

アザディスタンの領内ではすでに大量の魔獣がうごめいていた。

大護《数が半端ねえな》

リーダー《奴らはアザディスタンをこれから拠点にするつもりだ  
な》

それから嵐達の先発隊と合流しテーゼ委員会の1人エイジアがいる  
“ソマリスの塔”へ向かつた。

嵐《オレらが調べた情報によると奴らは4人らしい。ザマ、エイジ  
ア、アウル、カートンの4人だ》

姫矢《連中の狙いは?》

憐《アザディスタン、アフリカのセントニア、千塔の都 王都オス  
ティアの陥落。そして・・・》

影義《全世界に魔殖細胞の蔓延》

「奴らは祖先でアーテクトの復讐のためにアーテクトが古代に造つ  
た魔殖細胞装置で世界を壊し自分達の国エルディアを復活させよう  
としていた」

「ひどい・・・」

「ひどいが言つ。

「で、オレ達は委員会の1人エイジアを倒すためにソマリスの塔に

向かつた

ソマリスの塔内部に潜入した十三隊の隊長格とフェルトは敵兵や魔獸を倒しながら屋上へ向かつた。

大護とフェルトを嵐といふ。最初に屋上に着いた。

エイジア『貴様ら……私がここで始末してくれる……』  
ザマ同様に体が魔獸になつていく。その姿は虫のようだ。  
嵐『虫かよ……。『天空切り裂け！天龍牙！！』』  
大剣、天龍牙を解放させるが刀自身に変化はない。  
大護とフェルトは他の魔獸と戦つてゐる。

天龍牙と爪がぶつかり合つ。

嵐『ハアアアアア！！』

エイジア『きしやああああ！！』

大柄な嵐を押していくエイジア。嵐が距離を取り空へ逃げる。

嵐『ここなら大丈夫だな！天龍牙は天空龍の刀！天空の力を見せてやる！』

エイジアの周りに無数の氷の刃ができる。

天龍牙は大気中の水を凍らせる刀。いわば嵐にとつては大気そのものが武器なのだ。

嵐『天麟剣！！』

エイジアにその刃が突き刺さつた。苦しみ悶える。空から落ちていつた。

「反則やんけ……」

はやてが言つ。他のみんなも同じだ。

「実際オレ達はみんなあんなんだつたからな」

嵐が戻り帰ろうとした時

# フェルト《さやあ！！》

？？？『彼女は預からるよ』

アリトを被った男。  
アリセ委員会の者だ。

嵐《貴様はアホ川！！》

大譲『であ!!!!』

雷龍丸でせり掛かる だが、万里の縄界は描まる  
アカル《ジース、フオーダー。良、材料》

# 大護『貴様！！』

アウル《さらばだ》

アウルはフェルトを連れどこかに消えた。

「それから2週間。何もできなかつた・・・」

「フルトさんは・・・」

ルキノが聞く。

「ある男から“アクチエアの森”にいると言われ、オレと憐、新庄さん、陵はそこに向かつた」

アクチユアの森。中東のジャングルだ。奥に進んで行く4人。洞窟の中に入り中を探す。

大護

4人の前にはデカイ扉が。それを開け中に入る。

大護『フェルト！！』

生体ポットのようなものに入れられたフェルトがいた。ポットを丁寧に開け彼女を救い出す。

陵『大丈夫。命に別状はないみたい』

安堵する4人。

アウル『それはどうかな？』

アウルが現れた。

新庄『てめえの目的はなんだ！？』

愛刀の獅子丸を抜く。

アウル『ここで私は戦わない。貴様らの相手はこいつだ』

横から魔獸が1体現れた。

ガルベロス『ゴアアアアア！！』

かなりデカイ。

アウル『では、私はセントニアの“エンクレイムの塔”にいる』  
アウルは消えた。

憐『思念体・・・。大護！！』

憐は右手に蒼月丸。左手に紅月丸を持っている。

大護『わかってる！！』

雷龍丸を抜く。

新庄『吼ろ！獅子丸！！』

刀から白い獅子が現れる。

大護『雷龍丸！』

2人の一撃必殺の技が放たれる。

大護『天雷斬！！』

新庄『獅子・・・咆哮斬！！』

ガルベロスに当たりバラバラになる。だが、そのバラバラになつた肉片がくつつきガルベロスが復活した。

憐『再生能力！？』

陵『早すぎる！！』

再びバラバラにさせるが同じ事を繰り返す。新庄《クツソたれ！…》

大護《くそ！…》

2人が再び技を放とうとした時

フェルト《あなた達ではその魔獸に勝てない……》

フェルトの体が光そして

大護《嘘……だろ》

大護の目の前にいたのは魔獸となつたフェルトの変わり果てた姿だつた。

フェルトの攻撃でガルベロスは消滅。フェルトは人間の姿になり気を失つた。

4人はセイントローズに戻りこの事実を知らせた。

「嘘でしょ……」

フェイドが言う。他のみんなも信じられないという顔している。

「真実だ。そしてオレは一人で1万の敵を相手にする事になる……

「1人で……」

「1万の敵だと！？」なのはとシグナムが驚く。

「……オレはあの時の……修羅と呼ばれた自分に戻る事になつた。」

大介がフェルトが寝ている医務室から出て來た。

嵐《どうだつた？》

大介《まだ、体全体が侵食されてないから今は大丈夫だ》

姫矢《タイムリミットは?》

大介《後・・・10時間》

絶望的な数字。

嵐《・・・ここからエンクレインまで約5時間。塔には1万の敵・・・》

リーダー《かなり0に近いな・・・》

嵐《大護。何準備している》

大護は隊袋を着て準備している。

大護《オレの雷天なら1、2時間で行ける》

嵐《お前・・・相手は1万とアウルだぞ!?》大護《オレが行かなきやフェルトが死ぬ・・・オレはもう大切な人が死ぬのを見たくない・・・》

扉を抜ける。

大護《オレは今一度・・・修羅に戻る・・・!》

大護はたつた1人でエンクレインの塔に向かった。

大護の眼前には人と魔獣だけ。すべてが敵。

大護《行くぞ! !》

走る出した。雷龍丸と戦刀を解放させ闘う。来る敵を斬り殺す。返り血を浴びようが関係ない。目指すは塔の頂上。

塔内部にも敵が。階段を上がり走る。敵を斬り走る。何人の敵を斬つたのか。隊服は血に染まり二本の刀も血がついている。

戦い初めて6時間。タイムリミットまで残り2時間。だつた1人という孤独の中で

大護《アハア》

息を整え最後の部屋へ

アウル《待っていたよ・・・神威の子》

大護《貴様を殺しに来た! !》

アウル《彼女には私の細胞を与えた。感想はどうだったかな?私の作品の》

大護『黙れえ！！』

切り掛かる。アウルは空へ避けた。

アウル『私は選ばれしアーテクトの子・・・。貴様を倒す』

アウルの体が変化する。巨大化し顔が3つある。先の2人とは違う。悍ましい姿。

大護『オレは貴様だけはぜつてえゆるさねえーーー！』

怒る。体から魔力が漏れ出す。

バチバチッ！

体の周りで電気が発生した。

大護が切り掛かる。だが、

アウル『甘い・・・』

障壁で防がれる。そして、1つの顔が大護を叩きつける。

大護『ぐあ！』

もう1つの顔が薙ぎ払う。

アウル『弱いな』

大護はすでに満身創痍。だが、闘う。大切な人を救うために実際はアウルの力をザマとエイジアとでは桁違い。

大護は全身から血を流している。解放が強制的に解かれ万事休す。

ドックン　ドックン

戦刀から鼓動が聞こえる。

立ち上がる。戦刀が自分の血を吸つていて。刀身が紅くなり

大護『『血に色に染まれ　紅色戦刀！！』』

漆黒とは違う紅蓮の刃。

大護『うおおおおお！！』

全身全霊の一撃。

大護『龍　天　月破！！』

紅蓮の龍天月破がアウルの障壁をも破り直撃。アウルは消し飛んだ。

セイントローズではフェルトからアウルの細胞が消えた。

嵐、姫矢、憐が頂上に来た時には戦いは終わっており、大護が倒れていた。

セイントローズの医務室で起きた。

姫矢《・・・起きたか》

嵐《まあ、今回はよくやつたって褒めといてやる》

「たつた1人で・・・」

「1万の敵を・・・」

全員がありえないという顔をしている。

「アウルが死んだことでフェルトを侵食していた魔殖細胞は消えた。かなり危なかつたらしい。それから1週間後、カートン、テーゼ委員会と最終決戦になる」

セントミラに侵攻。十三隊は総力で対抗。敵の数は万の敵。魔獣と人間の混成軍。リーダー《嵐、姫矢、大護！！お前らでカートンを倒せ！！》

大護《リーダー！？》

リーダー《ここはオレ達で防ぐ！心配すんな》

姫矢《わかつた。大護！嵐！行くぞ！！》

カートンは護衛を着かせずただ1人でいた。

カートン《我らの夢をよくも・・・！貴様らここで世界の塵にしてくれる！！》

カートンの体が変化する。巨大化し龍、いや恐竜の頭が2つ。その中心にカートン自らがいる。

嵐《橘 嵐！いざ参る！！》

3人掛けかりでカートンを倒そうとするがアウルより堅い障壁。恐竜の体。不可能に近い。

嵐くわん

姫矢《》お！！

吹き飛ばされる2人。大護は叩きつけられる。

嵐『あれを使うか・・・』

崖が立つた時大護も立つ

大護『人間を・・・人間を舐めんじやねえ――――――!』

その瞬間雷が落ちた。雷龍丸が消える。大護に雷が纏う。

# 嵐《どうこう意味だ?》

姫矢『雷龍丸は所有者は雷の能力を付加させるんじゃなかつたんだ  
本当の力は“天候”そのものを支配する事だつたんだ』

大護が左手を空に掲げた。空には黒い雲  
雷雲。

大護《七天》  
蒼龍破！！

雷の雨がカートンに降り注ぐ。

雷が終わると大護は戦刀に自身の魔力を溜め圧縮している。

嵐《おいおい・・・あんなの打つたら・・・！！》

そのやばさを肌で感じる。

# 大護『巨神殺し（ティタノクトン）』！－』

巨大な槍と化した戦刀を投げる。カーテンは障壁を最大限に張った

が雷の魔力を圧縮した巨神殺しの前では無意味。カートンは雷の槍により消滅した。

大護は倒れた。

姫矢《大護！？》

大護は雷龍丸と戦刀を握りしめ寝ていた。

嵐は虫の息のカートンの前にいた。

カートン《我……らは……選ばれし……者……貴様……らには……》

嵐《戦いの中でそんなのは意味を持たない……。お前らよりあいつの思いが強かつた……。ただそれだけだ》

「勝つちゃったの……」

フェイトが聞く。

「そういう事」

大護が起きたのはそれから4日後だった。

大護

姫矢《ここはセイントローズの医務室だ。4日間眠つてたんだよ》

大護《姫矢さんが看病してたの？》

姫矢《違う。お前のベッドで寝てる幼なじみだ》

大護は自分のベッドで寝ているフェルトを見る。

姫矢《4日間つきつきりで看病していたんだ。俺は嵐に連絡していくから》

姫矢が部屋から出た後優しくフェルトの猫耳を撫でていた。

フェルト《ん……ん》

フェルトが起きた。

大護『起きたか?』

フェルト『大護・・・。どこ触ってる?』

くすぐつたい様子のフェルト。

大護『相変わらず耳だけは苦手なんだな』

フェルト『や、やめ・・・』

大護『これで貸し借り無しだ』

「こうしてテーゼ委員会との激戦は終わった」

「その後はどうなったのですか?」

カリムが聞く。

「テーゼ委員会は元々連邦の組織だつたんだ。悲しい事にな。連邦はテーゼ委員会を潰した。魔殖細胞装置も消えた・・・」

「世界は平和になったの?」

フェイトが聞く。

「表面上はな。オレ達はウラの人間だから表に出られないんだ。その後日本に帰つたんだ。問題お超しながら・・・」

「その後は?」

なのはが聞く。

「とりあえずオレが関わつた事件を見せる。ファーニヴァルとかと関係して来るのをな」

次回。十三隊隊長格大暴れ!?

第十一話 追憶の天使（テーゼ委員会終幕編）（後書き）

沖縄に旅行に行く十三隊。平和な旅行になるかと思いきや・・・。  
『完全な世界』<sup>コスモアルフайнネス</sup>が動き出す。

次回。最強の十三人編。

集いし思いを持つ者達。最悪の敵に立ち向かう。

## 第十一話 追憶の天使（隊長格大暴れ編）

「ちょうど8月にオレ達は沖縄に旅行に行つた」

「なんで？」

フェイトが聞く。

「休暇。でも、そこで厄介な敵と出合つた」

沖縄に来た十三隊一行は海ではしゃいでいた。久々の休みだ。だが、遊んでいる一行の前に

？？？『君達が最強世代の十三隊かい？』

金髪の少年が話し掛けてきた。

嵐『誰だ？』

カイル『僕はカイル・アーウェルンクス。君達の敵だよ』

突然砂浜から石の槍が出てきた。

嵐『甘い！』

間合いを一気に詰める。槍剣“鬼神丸”を抜き切り掛かる。カイルが避け

カイル『今回は挨拶だよ。これより完全な世界と海の魔獣が動き出す』

そう言つて消えた。  
コスモアルフィネス  
姫矢

リーダー『やばい相手だな』

「コスマアルフィネスは世界有数の秘密結社でその介入は一国情勢をも動かすほどの組織だつた」

「海の魔獣つていうのは」

はやてが聞く。

「太古の昔ニライカナイの遺跡にいた怪獣の事だ」

大護達は図書館にいた。

姫矢《海の魔獣ねえ》

憐《クラーケンとかじやないよね?》

大護《たぶん・・・こいつじやない? 大海魔ダガーラ》

資料をコピーしホテルに戻る途中に憐が

憐《ぐあ!? 頭が・・・》

頭を押さえ苦しみだした。

大護《憐! ?》

???《見つけた・・・グリゴリノ・3・・・》

3人の前にいるのは憐と同い年くらいの薄い銀髪の少女。

憐《マリー・・・?》

大護《知り合いか?》

姫矢《場所が悪い。退くぞ》

「セイントローズに戻つたオレ達は憐がいた施設“グリゴリ”について聞いた」「その施設つて」

フェイドが聞く。

「人工的にオレ達を超える異能力者を作りだすところだ。しかも、

それのある一国の政府が認めていた・・・」

「ひどいな・・・」

シグナムが言つ。

「憐はそこから逃げ出してお頭に拾われたんだ」

「コスモ……なんとかの差しがねだつたんですか?」

スバルが聞く。

「いや・・・。奴らは連邦からだつた。テーゼ委員会の件の報復にな。で、彼女は憐にとつて大切な人だつた」

その翌日。夕方から連邦軍約500人が攻めて来た。

風《とつとひ》終わらせて宴会やつぞー。」

# リーダー『影義と大介は船を頼む』

戦闘が始まった。敵はかなりの実力者。だが、十三孫の前では

風《おうやせああああ！》

新庄『死ねえええ！！』

第一陣全滅。続いて第二陣。数は倍。その部隊の中には憐の大切な人。マリー・ハロルドの姿があった。

憐マリー！

嵐『憐！他はこゝちでかたつけるからお前は自分の仕事やれ！』

マリーの元へ隠れんで行く。

敵兵にはバズーカかやロケットランチャーを持つてゐる者もいる。

「ソレでもリミテッドの一件、おまかせください。」

敵がバズーカを発射した。船に直撃apis。

影義  
『舞い散れ。花風樓刃』

影義が花風楼刃を解放させる。刀身が桜の花びらのようになりつた。

影義が手をかざす。発射された魔力弾を花びらが防いだ。

もう一発バズーカから発射された。

大介『『死に曝せ！白雷！！』』

大介の三節根の刀身と棍の部分がバラバラになり

大介『よつと！』

器用にバズーカを防ぎ。

大介『あらつよつと！！』

射手を払い落とした。

新庄『吼ろ！獅子丸！！』

新庄は刀から召喚された獅子とともに敵を倒していく。

リーダー『『天へと導け！雷虎！』』

リーダーの刀、雷虎の刀身が輝き敵を斬る。敵は糸が切れた人形のようにならかに落していく。

リーダー『・・・せめて安らかな眠りを』

狐門『疾風走れ！鷲天斬丸！！』

狐門の一本の刀が連結し両刃槍になり

狐門『はあ！』

舞を思わせる戦いで敵を打ち落としていく。

姫矢『『罪斬れ。斬龍』』

刀身が黒くなり敵の影を斬つた。敵は苦しむ。

姫矢

信『『輝け！白月！』』

十一番隊隊長の飛鳥 信の刀が光り敵を包んだ。

信『『ただの幻・・・夢へと・・・』』

茜那『『夕闇に誘え！弥勒丸！』』

茜那の刀は錫のようになり

茜那『吹つ飛べえ！』

竜巻が発生し敵を飲み込んだ。

陵『華炎丸！華氷丸！』

陵の二一本の刀は青龍刀のようになり

龍『神冥流 舞之型 式剣乱舞！』

能の踊りのように敵を倒していく。

「みんな強いやんけ・・・」

はやてが唖然としている。他も同じだ。

「確かにね。みんなそれなりに修羅場をくぐり抜けて来たからな」

「皆さん異質な能力ですね」

エリオが目を輝かせている。

「影義は守りに重点を置いてるし、リーダーは解放状態なら人の魂を斬る。新庄さんは獅子の召喚。大介はシグナムのレヴァンティンと同じ。姫矢さんは変則三刀流。狐門は槍の使い手。信は幻術。茜那は竜巻。陵は怖い」

「なんで陵さんだけ怖いの？」

なのはが聞く。

「トライウマの元凶なんだよ・・・。戦闘が終わってから憐が行方不明になつて探したんだ」

嵐『大護は島の方を頼む！』

影義、大介、姫矢、フェルトの4人が残り他は憐の捜索にそれぞれ

散っていた。

大護『海に落ちたわけじやねえだろうな・・・』

親友を探す。すると前方から敵の司令官らしき人物が来た。戦刀を抜き警戒する。

？？？『待て！戦う気はない！お前の探してた男ならこの先の島にいる』

そう言つて大護の横を通り過ぎて行つた。

大護は男の言つ通り島に向かつた。海岸を見ると探している人物を見つけた。通信機のスイッチをいれ

大護『こちら大護。憐と他1名を発見』

姫矢『わかつた。セイントローズで行く』

大護『ゆつくり来てね。今良いとこだから』

大護が見る海岸には憐とその大切な人がキスをしているところだつた。

「大護くん趣味悪・・・」

なのはが嫌な目で大護を見ていた。他の女性メンバーも同じ。

「いや・・・あいつらに感化されたからな」

「でも、盗み見るのは良くないよ」

フェイトが言つ。

「わかつた！オレは性格が悪いですよーー！」

逆ギレする。

「で、その後なぜか宴会をした。その3日後。海底遺跡“カナルティアの神殿”と大海魔ダガーラが出現したんだ」

「海底遺跡？思つたんやけど大護くんの世界つてこっちで言うロストロギア関係多くない？」

はやてが聞く。

「 こいつの世界は魔石にしろ飛空艇にしろ古代の遺物“オーパーツ”が異常なまでに多かつたんだ。カナルディアの神殿もその1つだ」

大護、嵐、大介、憐、姫矢、陵、フェルト、マリーの8人は神殿内へ。他の6人はダガーラの討伐に向かった。

神殿内は古代遺跡とは思えない程原形を留めている。

姫矢『ホントに古代遺跡か?』

憐『推定3000万年前・・・そこらは同じだな』

マリー『何のためにこんな神殿を・・・』

みんなが考えてる中大護は石版を見ていた。

フェルト『読めるのか?』

大護『うん・・・ところどころ読めないとこもあるけど』

嵐『なんて書いてある?』

大護『『カナルディアは誕生の神を祭る。人は四つの理より生まれる。その神の名は・・・』で止まってる』

姫矢『・・・誕生の神。四狂神の伝説か?』

大介『とりあえず先に進もう』

8人は遺跡の内部をさらに奥へ進んで行つた。  
進む事數十分広い広場に出た。4体の石像がある。

嵐『4体の石像・・・』

姫矢『大護。なんて書いてある?』

大護『エーッと・・・破壊、混乱、殺戮、恐怖って書いてある』

姫矢『やはり四狂神伝説か』

嵐『神話の時代の話なんだけどねえ・・・』

などと考えていると

大介『・・・誰だ!?』

大介が何かを感じたようだ。声に反応し空間が歪み

カイル《よくわかつたね・・・でも、君達はここで我らの神と主のための犠えになつてもらう!》

さらに空間が歪み5人の人がやつて來た。

嵐矢

やるしかなこな

それぞれ刀と槍を構える。

大護の目の前にはフードを被つた男が日本刀を持つている。

大護《あんたが相手か》

男

黙つて頷く。

「結局オレ達が勝つた。外もダガーラを倒したらしいしな」

「オーパーツつて何なの?」

フェイトが聞く。

「わからん。てか、オーパーツや魔石自体がさっぱりなんだ。学者達は人の魔力增幅装置とか言つてるが実際はどうだか

「わからないの?」

なのはも聞く。

「ああ。オレ達の世界はわからない事だらけだつた。それからいろいろあつてな。嵐の恋人の妊娠騒動とか信の許嫁が軟禁されて強制結婚されるからその殴り込みだとかいろいろあつた!」

「・・・一体何やつとんねん!?」

はやでがつっこむ。

「基本的に考え無しにいろいろやつかな!」

で、翌年の3月に十三隊最大の敵 赤蜘蛛と衝突する事になつた

最大の敵 赤蜘蛛。それぞれの因縁、思いが交差する！  
そして、最悪の運命の歯車が動き出す。

## 第十一話 追憶の天使（隊長格大暴れ編）（後書き）

隊長格紹介。

三番隊隊長：宗像 热志

特徴：身長184cm。体重76kg。スキンヘッド。

性格：みんなからリーダーと呼ばれ頼られている。いつも冷静に物事を見ている。本人は他の隊長を家族と思っている。26歳。

刀は雷虎。

四番隊隊長：新庄 剛

特徴：身長182cm。体重75kg。侍のよつに黒髪を一本に縛つている。

性格：嵐、大介とともにいつも酒を飲み馬鹿騒ぎをしている。だが、一度心で決めた事は意地でもやり通す強さを持っている。25歳。

刀は獅子丸。

五番隊隊長：宮原 大介

特徴：身長179cm。体重69kg。青髪で左目にタトゥーをしている。

性格：十三隊一の女たらし。新庄とは幼なじみ。実家はかなりの名家らしいが家督争いに嫌気が差し新庄とともに十三隊へ。かなり冷静。25歳。

刀（槍）は白雷。

七番隊隊長：千樹 憐

特徴：身長174cm。体重68kg。茶髪で少しづしゃ髪。

性格：人懐っこい性格で大護とは親友。元は連邦政府実験施設にいた。グリゴリと呼ばれ感応に長けた能力を持つ。マリーとは意志疎通ができる。18歳。

刀は蒼月丸と紅月丸。

八番隊隊長：姫矢 准

特徴：身長185cm。体重80kg。黒い短髪。

性格：大護の義理の兄。第八十八代目の“斬罪の使徒”。十三隊ではいつもツツコミ役。普段は温厚だが怒るとかなり恐い。26歳。

刀は斬龍。

## 第十一話 追憶の天使（対赤蜘蛛編）（前書き）

かなり長い・・・

本文も長いが過去編そのものが長い・・・

最後まで読んでくれたら幸いです。

## 第十一話 追憶の天使（対赤蜘蛛編）

「それからいろいろあつた・・・。そして、赤蜘蛛から決戦を申し込んできた」

「赤蜘蛛って十三隊どんな関係なんですか？」

スバルが聞く。

「昔つても江戸時代から中が悪いが今回は違つた。赤蜘蛛の七人の首領“おうち蟻”の1人が先代の一番隊隊長、嵐の師匠を殺した本人で。影義の兄もいた」

「兄弟で戦つたの？」

なのはが聞く。

「まああいつらはいろいろあるから・・・。三尾はオレに目をつけていたからな・・・」

夜9時過ぎ。大護は嵐と酒を飲んでいた。

嵐《明日か・・・》

大護

嵐《怖くないのか？》

大護

嵐《そつか。オレはサー・ジエスを倒さねえとなんねえ》

大護《2年前のオレと同じ？》

嵐《・・・そつかもな。でもオレは帰つて来なきゃなんねえ。麗奈

と新しい命のために》

大護

嵐《次期にわかるよ。大護にもな》

その翌日。3月21日。天気は晴れ。

フェルト『・・・勝てるの?』

大護『正直わからん』

フェルト『この戦いが終わったら言いたいことがある・・・。だから、その・・・』

大護『なんだよ?今言えよ』

フェルト『今はダメだ。ちゃんと言つから帰つて来て』

フェルトの顔は少し赤かった。

大護、フェルト、姫矢は手紙に書いてある場所。錦座町の高層ビル街に来た。

姫矢『ここだな。ビルが何棟残るか・・・』

フェルト『人はいな』

大護『姫矢さん。この戦い何か違和感を感じる・・・』

姫矢『オレもだ。お前は自分の戦いに集中しろ』

大護『了解』

3人はビル街の十字路にいる。車どころか入っ子一人いない。

嵐は一尾。『アリー・アル・サージェス』。

影義は二尾。実兄『宮木影虎』。

大護は三尾。邪刀“王蛇”的所有者。

新庄は四尾。空賊『グラツフル』

憐は五尾。グリゴリノ・2。

信は六尾。黒刀“黒月”的所有者。

陵は七尾。異母姉と

「みんな特別つていうより嫌な思い出があるからな」

午後2時。約束の時間。前方から着崩した着物を着。中性的な顔立ち。右手にはすでに邪刀“王蛇”を握っている。

大護『三尾・・・』

三尾『さあ～始めよう殺し合いを！…やなせえええ…だあああい』  
おおお！…』

殺氣剥き出しの三尾。その氣で大気が振動する。

大護も雷龍丸と戦刀を抜き構える。

三尾まで約50m。その10分の1の5mが三尾の間合い。

大護『雷龍丸！！戦刀！！』

解放させ、雷を纏つた刀雷龍丸と漆黒の刀戦刀。

間合いを一気に詰める。

三尾『ひやあは！…』

王蛇を振る。連結した青龍刀の刃が大護を襲う。だが、大護を速度を緩めるどころかさらに加速した。

大護『天龍剣 双龍牙！』

高速の一連撃。三尾に当たりよろける。腹部から血を流すが

三尾『ハハハハハハハハハハ…！』そうだ…！この時を待っていたんだ

！！オレと同等の力を持つ奴を…！』

狂氣いやそれより遙かにヤバイ。大護はそれを肌で感じた。構え直す。

三尾の目を見る今までの獣猛な獸の眼じやない。人殺しを楽しむ狂氣の眼だ。

三尾『ハハハ…！』

王蛇を振る。避ける大護。だが

三尾『避けるなよおおお…！』

鞭のように振る。大護に襲う掛かる刃。それは蛇が獲物を追うがごとく。

大護『ぐあ！？』

刃が頬を掠る。血が流れる。

距離を取り様子を見る。

大護（間合いが広いすぎる・・・！）

三尾『来ないなら・・・」つちからだ！！』

突つ込む三尾。大護も間合いを詰め鍔ぜり合いに持ち込む。だが

三尾『甘いよ』

バックステップで距離を取られ王蛇を振られる。

その刃が大護を切り付けた。

大護『ぐああ！』

ふらつく。だが三尾は

三尾『ひやあはつ！！』

さらに王蛇を振るう。

王蛇の牙に斬られる。胸部から血を流す。

踏ん張り持ちこたえる。

大護『ハア ハア 雷天！』

雷龍丸の雷を纏い光速の世界へ行くが

三尾『いくら速くてもストリーマーがあるんじや・・・』

動きが読まる。

「なんで・・・」

映像を見ているフェイトが不思議に思う。

「あの時の雷天はただの雷化でしかなかつたんだ。雷だから、先行ストリ放電があつた・・・つまり自分の行動を三尾に教えていたんだ」

三尾『確かに速さはすごいが・・・あんなんじゃなあ』

大護はすでにボロボロだ。雷天を見破れた。龍天月破も放とうにも時間がない。

姫矢『この状況であそこまで冷静とは・・・』

姫矢とフェルトは崩れたビルの上で戦況を見ていた。

フェルト『・・・大護！！』

その言葉に振り向く。

フェルト『もういい！もう・・・いいから・・・傷つかないで・・・』

泣き目の彼女の言葉が大護の心に響いた。

三尾『よそ見してんじゃねーーー！』

連結刃が大護を襲う。だが、大護はその刃を素手で止めた。

大護『・・・三尾。オレはどうやら傷つくわけにはいかないらしい・・・』

戦刀を振るつた。漆黒の刃が三尾に直撃する。

三尾もボロボロ。

三尾『まだだ・・・！オレはまだ楽しめてねえ！』

三尾はその瞬間、邪刀“王蛇”を自分の胸に突き刺した。

三尾『蛇尾れ！！王蛇！！』

体が蛇のようになり手が王蛇の刃になつた。

三尾『ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！すすべてぶつこわしてやる！！』

刃が大護を襲う。避ける。さらに追撃。

大護『避けきれない！』

戦刀で防ぐが威力が段違い。吹つ飛ばされビルに激突。

フェルト『大護！！』

フェルトの声が聞こえる。

大護は防ぐが威力が段違い。吹つ飛ばされビルに激突。

大護は立ち上がり戦刀に自分の血を吸わせ

大護『血に色に染まれ！紅色戦刀！！』

戦刀が紅蓮の刃になり炎の粒子が舞う。

三尾『それが本気か！？楽しめてくれよおおおお！』

刃を振るつ。

大護『うおおおおお！』

さらに加速し突つ込む。

紅色戦刀に紅蓮の炎が纏い

大護『炎 一閃！』

一撃必殺の技。天龍剣天翔飛龍。

三尾の解放が解かれた。下半身が消えすでに虫の息だ。

三尾『ちつ・・・負ちまつた・・・まあ良いか楽しめたし・・・』

三尾は息を引き取つた。

大護『勝つたか・・・』

解放を解き座り込んだ。

姫矢

フェルト『大護！』

泣き目で抱き着いて来た。

フェルト『よかつた・・・ホントによかつた・・・』

大護『痛い・・・』

「勝つちゃつたの・・・」

フェイトが呟いた。

「そう」

「他人達は？」

なのはが聞く。

「今から見せる」

陵は異母姉の七尾『九条 朔夜』と戦っていた。九条の槍『一仙歌』の攻撃を防いでいる。

九条『弱いね。がつかりだなあ。半分は同じ血なのに』

陵

陵は右手に華炎丸。左手に華氷丸を握り黙っている。

九条『だんまりは良くないよ！』

一仙歌を振るう。陵はこの槍術を知っていた。8年前にいなくなつた人のものに

陵『違う・・・。水無月一閃槍術はこんなんじゃない！！』

陵の脳裏に兄と呼べる1人の男と2人目の母親と呼べる少女の槍術を思い出した。

九条『ハア！？わけわかんない！！』

九条が距離を取る。

陵『あなたが私の姉かもしだいけど・・・母さん達と兄さんを馬鹿にするなら・・・許さない！！』

陵は8年前に髪を銀色に染めた。あの人『如月 玖音』に近づくためには。

陵『神冥流 奥義 式閃剣乱舞！！』

彼女が兄から教わった神冥流 舞の型の奥義であった。九条は倒れ絶命した。

信は六尾。黒刀“黒月”の所有者。名のない剣士と戦っていた。

信『・・・強い・・・』

剣士『幻刀“白月”・・・。愛する者を守るためか・・・』

信の後ろには彼の最愛の人。睦月 葵がいる。

だが・・・ここまで・・・

剣士

剣士が黒月に気を集中する。

信『勝てなくとも・・・あきらめない！－白月』

白月が輝く。星の様に

剣士『煉獄！！』

信『白帝剣！！』

白と黒の波動がぶつかる。その瞬間、信はそのぶつかり合つ波動に突っ込んだ。

葵『信様！！』

彼女が見た光景は

剣士『吾輩が負ける・・・？』

信が剣士を倒した瞬間であった。

信『勝つたよ。葵ちゃん』

すでにボロボロだが優しい顔の信が彼女の前にいた。

憐は五尾。同じプロメテウス・プロジェクトのメンバーの1人、グリゴリノ。吉良沢 優と戦っていた。吉良沢はプロジェクトで覚醒した予知能力で憐の攻撃を読む。しかし、憐の戦いで培つた経験値がそれが無意味だと知った。

吉良沢『終わりにしようか』

天に手を掲げる。太陽の光が集まる。

憐は心の奥で“勝てない”と悟っていた。その時

？？？『成せばなる！自分を信じろ！！』

グリゴリにいた時に師から教わった言葉。

憐『蒼月丸！！紅月丸！！』

一本の刀を連結させ弓の様に構える。弓が輝く。

吉良沢『天墜！』

圧縮された光の弾が放たれる。

憐『アローレイ・シュトローム！！』

弓の刃が発射される。

双方がぶつかり合つた。憐のアローレイ・シュトロームが天墜の弾を切り裂き吉良沢に直撃。

吉良沢

粒子となつて消えた。

新庄は四尾。空賊グラッフルと戦つていた。

グラッフルの銃剣“アルカード”に苦戦していた。

獅子丸を解放し隣にいる。グラッフルは片手持ちのアルカードを持つ

つている。

新庄

：やるしかないか

決心した。

グラッフル『何をするんだ？ てめえはここで死ぬんだ！ そんな事してねえでさつさとあきらめろ！！』

新庄『いやここで死ぬのはお前だ。グラッフル』

新庄は刀を突き出し

新庄『神獣 合身！！』

刀が消え、獅子が体と同化する。爪がはえ、耳が獅子の様になり、牙がはえる。金色の毛で被われた体。

グラッフル『それが切り札って事か』

新庄『ああ。悪いが一瞬で終らせてもらう！！』

新庄が消えた。いつの間にかグラッフルの間合いをかなり詰めていた。

グラッフル『なにつ！？』

避けようとするが

新庄『遅い！！』

爪で切り裂く。蹴る殴り飛ばす。正拳突きの様に構え

新庄『獣戦閃！！』

本物の獅子の「」とくグラッフルを切り裂く。

グラッフル『ぐあああああ！？』

哀れにも絶命した。

新庄も神獣状態を解く。血をかなり流している。

新庄『ちつ・・・流し過ぎたか・・・』

新庄は倒れてしまった。

影義は一尾。実兄の宮木 影虎と戦っていた。

影虎は宮木家の家宝の刀“鳳仙花”と“白天陵王白虎”。

影義は“花風樓刃”、“黒天陵王玄武”と父から授かつた 龍刀“銀龍”。

同じ剣術同士の戦い。達人の戦い。攻めるのは影虎。鳳仙花を解放させ氣弾を飛ばす。白虎を刀に纏わせ剣を振る。

影義は花風樓刃で守り、玄武と銀龍で攻撃を防いでいる。

影虎『やつぱりお前には向かないんだ！！』

影義『そんなんの関係ない！！』

両者隙を見つけての戦い。

影虎『甘い！！』

白虎の一撃が影義に直撃。だが

影義『宮木神冥流は攻じやなく守の剣・・・。その真髓はいかなる時でも防御をできること』

花風樓刃で残り数cmのところまで斬撃を防いだのだ。

影義『破魔 龍王刃！』

銀龍の一撃が影虎に直撃。  
影虎

右からの袈裟斬り。左腕を斬られ倒れる。

影義『兄さん・・・』

影虎『やりやあできんじやねえか・・・。ほら、こいつをやつから・・・』

と言つて鳳仙花と白虎を差し出す。

影虎『すまなかつたな・・・オレがお前に嫉妬していただけだ・・・後は影義。お前の好きな道を行け』

影虎は目を閉じた。その瞳が開く事はなかつた。

嵐は一尾。アリー・アル・サージェスと戦っていた。

自分の故郷クルジスを滅ぼされ、師である如月玖音を殺した張本人である。

サージェス《動きがあめえ！！》

鋸の様な大剣“キリバチ”を振るう。

嵐《くつ！》

天龍牙で防ぐがサージェスはそんなのでは終らない

サージェス《行けよ！ファングウウ！！》

キリバチの刃がビットの様に動き嵐に突き刺さる。血が流れる。

嵐

サージェス《よええな！人様の仕事邪魔しといてその程度か！？》

嵐はまだ立っている。

麗奈《嵐・・・》

嵐の恋人。富田麗奈が見ている。

嵐《まだだ・・・まだ死ねねえ！！まだ終わるわけにはいかねえ！！》

槍剣の“鬼神丸”と大剣の天刀“天龍牙”を前に出し

嵐《玖音を超える！》

その技は自身の限界を超える技。使えたのは彼の師のみ

嵐《限界 突破！！》

鬼神丸と天龍牙が一つになり方典戟の槍が現れた。

嵐《滅龍鬼槍！！》

槍を振り回し構える。

サージェス《槍だあ？あいつと同じじゃねえか！！ファングウウ！！》

刃が襲い掛かる。嵐はそれをすべて弾く。

サージェス《なにつ！！》

嵐《我流水無月一閃槍術 舞之型 百花繚乱》

さらに構える。

嵐『我流水無月一閃槍術 終之型 』

上段の就きの構え。

嵐『オレは未来に進む！！』

神雷！！』

神速の突きの技。

いくら魔殖細胞を取り込んでいるサーチェイスどいえ

サーチェイス『オレが死ぬ・・・？』

キリバチが碎け散りサーチェイスはその姿がなかつた。

「みんな勝つて一件落着だつて思つたが・・・」

大護が顔をしかめる。

「なにがあつたの・・・」

フェイトが聞く。

「連邦と自衛隊がオレ達を攻撃してきた

「なぜだ？」

シグナムが聞く。他のみんなも驚いている。

「オレ達を快く思わない連中の仕業だつた」

「なんでや！？大護くん達はテーゼ委員会を倒した時とか頑張つた

やんか！？」

はやてが反論する。

「まあそうだが。テーゼ委員会は元々連邦の組織だしそれを潰した  
オレ達の存在が邪魔だつたんだ。でも、敵はそれだけじゃなかつた

戦つた7人は看病する茜那。他のリーダー、大介、姫矢、孤門の4

人は軍の攻撃を防いでいた。圧倒的な数とはいえ逆に圧倒していた。

茜那『何か来る!!』

感知系である茜那が何か巨大なにかを感じた。

その瞬間すべてが闇に包まれた。

???『とこしえの闇』

全員がいる場所が爆発。

???『ザコガ』

何者かがいなくなると

リーダー『行つたか?』

茜那『行つたみたい』

なぜかみんな無事。

「その後セイントローズに戻ろうとした時、東京湾沖に巨大な塔が現れたんだ・・・奴ら“ノア”と呼ばれる奴らのな」

姫矢『奴らがノアか・・・となるとクリスタルを持つてるな』

リーダー『行くか・・・大介、孤門、茜那。行けるか?』

大介『了解』

孤門『OK』

茜那『行こう行こう!!』

5人はセイントローズを降り塔に向かった。

「そして、あの人達は一度と帰つて来なくなつた・・・  
「え?」

「・・・死んじまつたんだ・・・。その直後塔の最上階から9つの光が世界各地に飛び散った」

信『敵が・・・奴らが来る!』

全員が満身創痍。相手はかなり強い。

大護『姫矢さん・・・』

大護はブリッジを飛び出した。

嵐『大護!?』

憐『無茶だ!?!』

大護『オレが時間を稼ぐ!アルフイン!最大出力でこの空域から離脱しろ!?!』

フェルト『大護!?!』

全員の静止を振り切り大護はセイントローズを飛び出した。

「この後、オレはノアの攻撃にやられた・・・。この日。十二隊は壊滅し世界のバランスが崩れた。大陸が変動した・・・。世界各地で紛争が起こり、その收拾のために動いた連邦が2つに別れ衝突しちまつた」

全員言葉が出ない。

「大護はどうなつたんだよ・・・」

ヴィータが遠慮がちに聞く。

「生きてたよ。奇跡的に。そして、4年後の話に続くわけだ」

「4年後?」

フェイトが聞く。

「オレの髪が白くなつた理由とか両親の真実・・・『完全な世界』、ノア達との決戦があつた。それよりちょっと休憩しよう」

その4年後。再集結する仲間達。その先にあるのは・・・

## 第十一話 追憶の天使（対赤蜘蛛編）（後書き）

### 隊長格紹介

九番隊隊長：孤門 一輝

特徴：身長178cm。体重65?。黒い短髪が特徴。

性格：心優しい青年。実家の家業を継ぐのが嫌で十三隊へ。十三隊の中でも最も常識がある人物。24歳。  
刀（両刃槍）は我天斬丸

十番隊隊長：宮田 信次

特徴：身長183?。体重73?。少し長めの金髪が特徴。

性格：大護の義兄で天龍剣を教えた人物。姫矢とは旧知の中でよき相談相手。実力は嵐を超えると言われるが定かではない。26歳。  
刀は王刀“叢雲牙”

十一番隊隊長：飛鳥 信

特徴：身長176?。体重61?。黒茶色の髪を縛っている。

性格：十三隊一の切れ者。様々な剣術などを使えるオールラウンダ

一。残酷な性格だが優しい。許嫁の葵とは幼なじみの関係。  
刀は白月。

十一番隊隊長：鈴宮 茜那

特徴：身長167?。体重????。灰色の髪が特徴。

性格：種族はハーフエルフ。エルフという割にはがさつ。十三隊一の食いしん坊。その量は嵐を超える。天然だが優しい。かなりの常識知らず。  
刀は弥勒丸。

十三番隊隊長：吹石 陵

特徴：身長172?。体重????。銀髪の長髪を一本に束ねている。

性格：大護に数々のトラウマを植え付けた張本人。先代の一番隊隊長、如月玖音に憧れ銀髪に染めた。十三隊の古株メンバーで姐御的存在。かなりの酒豪。23歳。

刀は華炎丸と華氷丸。

その他のメンバー。

フェルト・グレイス。

身長170?。体重?/?。左の猫耳にピアスをしている。  
。ビーストクオーター。大護の幼なじみ。体術は大護より強い。  
7歳。やがて。。。1

## 第十一話 追憶の天使（復活編）

20分の休憩が終わり再びブリーフィングルームに集まつた。時刻は午後6時。

「悪いな長くて」

大護が苦笑にする。

「で、話だと4年後の話なんだよね」

フェイトが聞く。

「そつ。あの戦いから4年後だ」

「世界はどうなつたの？」

なのはが聞く。

「世界地図がかなり変わつた。そして、6つあつた大陸が3つになつた。人口もかなり減つたらしが詳しくはわからん。

で、一番でかい大陸ユーラシアに4つの国ができた。北の帝国『力イゼルシュルト』、南に連合国『メガロメセン』。この2つが実質上、大陸を支配していた。そして、中立国『オープ』と千塔の都王都『オステイア』。

で、なぜか知らんが世界が変わつて1年後に帝国と連合が戦争を始めた

「なんでや？ おかしいやん！」

はやてが疑問に思つ。

「そう。早過ぎるしおかしい。原因は物質些細な争いから始まつたが元々連邦が鷹派と鳩派に別れたの事の発端でな。鷹派。つまり帝国はテーゼ委員会とかの集まりで連中の狙いは文明発祥の地『オスティア』の奪還だった。

で、前置きはここまでにしといて。オレはかなり重傷でオープのパ

「セライトと言う町で保護されていた」映像が映る。赤い髪の青年になつた大護が映つてゐる。

大護が町を歩いてゐる。変わらず左腰には雷龍丸を差し、背中には大刀“戦刀”を背負つてゐる。いつものようにぶらぶらと町を散歩していると前からビーストクオーターの女が走つて来る。猫耳で左耳にピアスをしていて赤に近いピンク色の髪をしている。

少女『大護！！』

大護に抱き着いた。その少女は彼の幼なじみのフェルト・グレイスであった。

「感動の再会ですね！」

スバルが目を輝かせている。なぜかアルトとルキノも

「そうだと良かつたんだけどな」

大護が軽く笑いながら言つ。

「何があつたの？」

フェイトが聞く。

「見りやわかる」

映像を見る。

大護『・・・あのさ。誰？』

フェルト『え？何言つてんの？フェルトだよ！幼なじみのー』

大護の言葉に焦る。

大護『ゴメン・・・オレ、記憶ないんだ』

フェルト『・・・ウソでしょ・・・』

大護『ホントなんだ。オレは4年前までの記憶がないんだ・・・』

「記憶喪失・・・」

なのはが言う。

「ああ。4年前にノア達の攻撃を受けたオレは誰かに守られ即死は免れたが吹っ飛ばされて頭を強打。そのせいで記憶を失ったんだ」

大護はフェルトに連れられ町の市役所の連絡所“UNN”に来ていた。

そこで憐と連絡したものの大護の記憶は戻らず

フェルト『どうしたら良いのかな・・・』

憐『しばらくはそこに居て。帝国が大護の情報を持つてるって噂だから』

フェルト『了解』

連絡を終えて大護のところへ行く。イスに座つて何を考えている。

大護『さつきの人はオレの知り合い?』

フェルト『そうだよ。ホントに覚えてないの?』

大護『ああ。覚えてるのはこの剣でたくさん人を殺したのかもしれないのと、手に着いてる血の臭いだけ・・・』

フェルト『そう・・・！？危ない！！』

大護は引っ張り込む。

大護『なに！？』

2人の前には2人の男がいた。

賞金稼ぎ『オレ達はあんたらを始末しろって雇われたんだね』  
傭兵『さつさとおとなしくしろ！！』

剣を持つた2人が襲い掛かる。

フェルト『逃げるよ！』

大護の手を握り走る。

大護（この感じ・・・懐かしい・・・？）

2人は賞金稼ぎ達に追われる途中フェルトがボーガンで足を打たれ傷を負う。路地裏に逃げ込んだが行き止まり。

傭兵『さあ、おとなしくしろよ～』

男達が剣を抜き構える。

大護は刀を抜こうとしない。

フェルト『大護思い出して！お前の事もみんなの事も全部！！思い出して！！』

フェルトの言葉が大護の心に響いた。

賞金稼ぎ『死ねえ！！』

その時、大護が雷龍丸で男達の剣を防いだ。

大護『何を思い出すんだよ？忘れるわけねえだろうが』

フェルト『大護・・・』

大護

賞金稼ぎ『てめえ！なにもんだ！！』

大護『・・・刑務所行く奴に答えるわけがない』

斬り伏せた。

大護『多分痛みはないと思うから・・・』

「ロマンチックやな」

はやてが言つ。

「ん？まあ良いとして。オレは保護してくれているアーティさんつて言うエルフにフェルトを合わせた。その次の日にノアの1人と対峙する事になった」

次の日。大護とフェルトは憐の指示で町外れの教会に向かつた。

大護『なんで教会に行く必要があるんだ？』

フェルト『情報屋がいるの。生き残った7人で今居場所がわかんないのは新庄だけ。そこで情報があれば提供してもらう』

大護『新庄さんなら生きてると思うけどな』

2人は教会に着いてシスター達から今的情勢を聞いた。

大護『影義はオステイアにいて、憐、信、陵の3人はメガロメセンの傭兵。嵐は世界中を飛び回って、新庄さんは帝国の辺境か・・・』  
フェルト『3人は最近まで一緒にいたけど。嵐を全然見ない・・・』  
エルレイン『橘さんなら隣町のテオラドにいたと』

大護『わかつた・・・。さて長居は無用だ。世話になつたね』

エルレイン『後、未確認ですが両国内に怪しい動きがあるようです』

2人が教会を出ると

？？？『生きてやがったか。天使の末裔よ』  
空から声がした。

大護

大護は黙つて雷龍丸を抜く。空間が歪み1人の男が現れた。

大護『ノアの1人か・・・！』

ゼバス『オレは“闇のノア”ゼバス。やはり、あの時全員殺すべきだつたか』

フェルト『どういう意味だ！』

ゼバス『まあ良い。ここにクリスタルはないらしいな・・・でも、お前は邪魔だなあ』

ゼバスは大護を指差す。

？？？『待て！』

どこからともなく声がする。

ゼバス『なんだよ！今良いところなんだよ！！』

？？？『そやつにはやつてもらう事がある』

ゼバス『わかつたわかつた！とつとと戻りますよ！命拾いしたな・・・』

ゼバスは空間の歪みに消えた。

「その次の日にオレ達は嵐を探しに『オラド』って町に向かった」「ノアって何者なんですか？」

カリムが聞く。

「見てればわかりますよ。

『オラド』の占い師によれば嵐は魔導士の町ミティアに行つたんだ。

そこでオレ達はノアの1人に会つた」

ミディアに着いた2人が見たのは魔導士達が無惨に殺された惨状だつた。

フェルト『ひどい・・・！』

大護『ここに“土のクリスタル”がある。なら“土のノア”だらうな』

町の中に進むと

大護『嵐の気を感じる！！』

走るとそこには嵐がノアの1人と対峙していた。

ノア《試練の山にいる・・・そこで教えてやろう。我らに逆りつてどうなるか・・・》

ノアが去り。

大護《嵐！――》

2人の前には赤オレンジの髪に身長192?という大柄な男。十三  
隊壱番隊隊長の橘 嵐だ。

嵐《大護！？お前やっぱ生きてたか！――》

大護《それよりあいつは？》

嵐《あれがノアだ。9人いる中の1人。土のノアだ。話は試練の山に向かいながら話す》

「ノアは9人いて、己と同属性のクリスタルを狙う連中でな。4年前にあの塔から出た光がクリスタルってわけだ」

「じゃあそのクリスタルを探してるので？」

なのはが聞く。

「そう。でも奴らは自分の属性のクリスタルしか探せないという難点がある」

「なんでや？」

はやてが聞く。

「その点に関してはさっぱりだ。嵐はそのクリスタルを探すために妻子を置いて世界を旅していったらしい」

大護《あいつが土のノアか》

嵐《ああ。ノアの厄介なところは強いだけじゃねえ。その理を操る力を持つって事だ》

大護《理を操る力？あいつらの目的は？》

試練の山の山頂には土のノアが待ち構えていた。

？？？『私は土のノア。名をマルーシャという。』

嵐『クリスタルを渡して貰おうか！マルーシャ！！』

嵐は天龍牙を抜き構える。

マルーシャ『それはできない。これは我らの悲願にどうしても必要なのだ』

嵐『だつたら力ずくだ！！』

嵐が突っ込む。マルーシャも鎌を手に取る。撃ち合いが始まる。

天龍牙の能力。“大気の操作”でマルーシャを串刺ししたが

マルーシャ『やはり殺すべきだなあ・・・危険な存在は。クリスタ

ルよ！我に力を！！』

マルーシャがクリスタルと同化した。

マルーシャ『これできさまらもおわりだあ！！』

嵐『生憎オレはお前に興味はない。クリスタルの力を使い切れてないお前なんかにな』

マルーシャが大地を殴る。大地そのものが揺れる。3人は空に逃げる。

嵐『大護！手えだすなよ！！』

嵐は天龍牙に波動を注ぐ。

大護

フェルト『ウソ・・・』

2人が見たのは

戦艦一隻は叩き斬る事が可能なぐらい巨大な天龍牙であつた。嵐は天龍牙の周りの大気を凍らせ圧縮し巨大な刀を作り上げたのだ

マルーシャ『死ねえ！！アースクエイカー！！』

マルーシャが魔力弾を放つ。

嵐『いくぞお！！』

必殺・・斬艦劍！！

それをマルーシャに突き刺す。

- 1 -

全員が詠葉を失してはいたが、風の異常には

大護さえも呆れる強さを持つ男。

山に突き刺さつた斬艦剣。おそらくマルーシャは死んだのだろう。  
クリスタルがありそれを掴む。

大護めいごしてゐる。一ひち一個でもあつやあ良いい

## 必殺技に声が出ない2人

『大獲『エオスつて工芸と交易都市ぞろ?誰が持つてんの?』』  
" がある』

嵐

「まあ。」こんな感じで工オスに向かつた

「クリスタルって何なの？」  
フェイトが聞く。

「世界すべての理。9つある理の結晶とだけ言つておく。見てりや  
わかる」

その2日後。

大護、嵐、フェルトの3人はエオスの町に来ていた。

3人は町の長と話していた。

長『つまり、そのクリスタルを渡せと』  
嵐『ああ。クリスタルは厄介だからな。オレ達は連合の者だ。いつ  
帝国が来るかわからんからな』  
嘘を並べクリスタルを貰おうとする嵐。  
長『良いだろう。ついて來い』

3人は広い倉庫に案内された。  
大護

祠のような場所に薄い緑色に発光している風のクリスタルがあつた。

その時

???『それはあたしの物！返してもらひよーー！』

空間が歪み。ゼバスと女のノアが現れた。

ゼバス『また会つたな。天使の末裔』

フィレス『あたしは“風のノア”、フィレス。クリスタルを渡して  
貰おう』

嵐に襲い掛かるフィレス。

ゼバス『天使の末裔。お前の相手はオレだ』  
大剣を取り出す。

ゼバス《知つてんのか？ならこの魔剣の事わかるだろ？》

大護はこの剣と刃を交えた事がある。前の所有者は鴉羽。花嫁強奪？の時に戦つた相手だ。

刃を交える。大護は戦刀と雷龍丸の二刀流だがゼバスはそれを軽々しく防ぐ。

ゼバス《弱いな》

距離を取り様子を見る。

ゼバス《“赤髪の悪魔”とよばれた実力はこの程度か？・・・クリ

タルは確保できないな。フィレス！！退くぞ！！》

フィレス《わかつた。待つてろよ！クリスタルは必ずいただく！！》

空間の歪みに消えた2人。

大護《・・・オレは・・弱い・・・！・！》

自分の無力さを悔しがる大護がいた。

その翌日。大護は姿を消した。

「オレはお頭を探し。お頭のいる晃憲寺に向かつた。そこでオレは自分に勝つ事をした」

大護の髪が赤から白になつた理由。

弱い自分。もう大切な人を失いたくない。大護は自分と戦う。

## 第十一話 追憶の天使（対闇編）

「オレはお頭を探して連合の領内の蓬莱山にある晃憲寺に行つたんだ」

「お頭つてなにもんだ？」

ヴィータが聞く。

「オレ達十三隊にとつては親父みたいなもんかな。歴代の隊長格のなかでもかなり強い部類に入る」

「そこで何をしたんですか？」

エリオが聞く。

「説明すんの面倒だから見てればわかる」

晃憲寺にたどり着いた大護はお頭、武田龍剣とその妻の呉葉と一緒に境内で話していた。

お頭《お前さんが来るとは・・・なんの用じゃ？》

大護《オレを鍛えてくれ！今のままじゃノアに勝てないんだ》

お頭《・・・鍛えてやりたいのはやまやまじゃが・・・無理なんじゃ》

大護《なんで？》

お頭《お前達7人は儂をすでに超えるからじゃ・・・》

大護《他に方法はないのか？》

呉葉《龍剣・・・あれがある》

お頭《確かに・・・。大護。自分に勝つことができればノアにも勝てるかもしけぬ・・・だが・・・》

大護《だが・・・？》

お頭《お前が闇に負ければお前自身が死ぬ……！その覚悟があるか？》

大護《・・・あるーー！》

はつきり言つた。

お頭《そうか・・・近くに洞窟があるその奥に“真実の闇”がある。そこに行け》

「オレはその洞窟に行つたんだ。そこで自分の闇と戦う事になった」「自分の闇？」

フェイトが？マークを浮かべる。

「簡単に言えば昔のオレ・・・かな？見てればわかるよ」

説明するのがめんどくさい大護。

大護は洞窟内を走り。広い空洞に出た。中央に鏡がある。

大護《また変な代物じゃないよな？》

恐る恐る鏡に触れる。突然空間が変わつた。何もない白い世界。自分1人しかいない世界。

大護《ここは・・・？》

？？？《位相の違う世界だ》

振り返る。そこには大護がいた。鏡じゃない。実物。

大護《お前は誰だ！？》

？？？《ん？お前の闇、いや影だよ》

黒い雷龍丸と戦刀を構える。

大護も雷龍丸と戦刀を構える。

？？？『オレはイスファル……お前と会うのは初めてだな』

大護『…………お前を倒す！！』

イスファル『そうだなあ。そろそろ中にいるのも飽きたし』

2人が刀を交える。

イスファル『ハハ！！お前は自分が母さんの血を選んだと思つてゐるようだが。違うんだよ！！』

イスファルが圧倒している。2人とも雷天で戦つている。

イスファル『お前はオレも受け入れない臆病者なんだよ！！』

大護『違う！！』

鍔せり合いに持ち込む。

イスファル『違う？どこがだ！！今まで散々殺したくせにお前は逃げたんだよ！！自分に流れる天使と堕天使の血から！！』

押され斬撃を喰らう。そして、腹部に戦刀が突き刺さつた。

イスファル『諦めろ』

仰向けに倒れる大護。

大護（オレは・・勝てないのか・・自分自身、過去にも、父さんにも・・・。ゴメン・・）

瞳を閉じようとした時

『あきらめるな！！』

誰かの声がした。懐かしい声だ。

『大切な事はどんな自分も受け入れることだ。光も闇も今も過去もどんな自分も受け入れること・・・。お前ならできる』

懐かしい声。

大護（兄さん・・・。オレは）

大護『今わかつた・・・。大切な事が・・・どんな自分でも良い・・・。オレはオレなんだ！！』

立ち上がる。大護から魔力が溢れる。今までの魔力とは違う。蒼い魔力が。

雷龍丸と戦刀を重ねる。

大護『限 界 突 破 ！！』

一本の刀が一つになり一本の長刀が現れた。大護の髪が赤から白になり

大護『戦雷！！』

イスファル『それがお前の答えか！？』

大護『オレはもう迷わない！オレはオレだ！柳瀬 大護なんだ！！』  
再び刃を交える。

大護『ハアアア！！』

威力が桁違いに上がっている。白い長刀を振るい。白髪をなびかせる。

イスファル『天使を選んだか！お前は！』  
距離を取り。構える。

2人とも同じ技。龍天月破の構え。

大護・イスファル『龍 天 月破！！』

白い龍天月破と黒い龍天月破がぶつかり合う。大護の方が威力が上  
だつた。イスファルのを破り直撃。  
倒れる。近くに寄る。

イスファル『忘れるな・・・オレはお前の影だ。いつかお前を・・・』

イスファルは元の大護の影になつた。

大護『忘れねえよ・・・』

位相が元に戻り急いで洞窟の外へ出た。

『というわけだ』

『じゃあ髪が白くなつたのは・・・』  
なのはが言う。

『オレが父さんじやなく母さんの血。大天使ラファエルの方を選ん  
だからだ』

「待つてください！じゃあ大護さんつて・・・」

ティアナはわかつているようだ。

「そうだ。オレは人間じゃない・・・。天使と堕天使の血を引く天使だ」

それが大護の真実。

「・・・・・」

全員言葉が出ない。

「でも、オレは人間だぜ！人間やつて来た方が長いから」

陽気笑いながら答える。

「そつか。大護くんがそう言つならそうやな。続きあるんやろ？」

はやてが言つ。

「ああ。洞窟の外、晃憲寺ではゼバスと水のノアがいた」

シーラ『死ね！』

水のノア。シーラの攻撃がフェルトに当たる瞬間蒼い光がそれを守つた。

フェルト『大護・・・？』

彼女の視線の先には白髪に戦刀を背負つた青年。大護がいた。

大護

雷龍丸を構えシーラに立ち向かう。

シーラは氷のつぶてでそれを防ごうとしたが

大護（遅い・・・？）

軽々避ける。

シーラ『なにつ！？』

氷で楯を作るが大護はそれを叩き斬る。

その時

？？？『ゼバス！シーラ！下がれ！』

声がした。教会で聞いた声だ。

ゼバス《・・・ダーナ》

空間が歪み。そこから1人の男が現れた。グレーの髪に外套みたいな服を来て いる。

大護と嵐は構える。

《待て。今は戦わない。話をしに来ただけだ》

大護《話?》

ダーナ《ああ。我はログ・ダーナ。“無のノア”だ》

嵐《で?話とはなんだ》

ダーナ《お前達は我らと戦う前にやる事があるだろ?それを終えるまで我らは手をださん》

ダ《代わりにクリスタルを差し出せと?》

ダーナ《違う。お前達が持つている3つのクリスタルはお前達に托す》

嵐《なに?》

破格の条件だ。

ダーナ《他の6つのクリスタルは我らが探す。我らはその間お前達に干渉も邪魔もしない。お前達がこのくだらない戦争を終える頃には我らもクリスタルを集め終えるはず。その時にクリスタルが輝く。その時が決戦だ。この世界を賭けたな。この条件呑むか?》

「向こうに不利な条件じゃない?」

フェイトが言つ。

「確かに・・・結局この条件を呑む事にした」

大護『わかった。その条件呑もつ。本当に手出しあしないんだな?』

ダーナ『ああ』

嵐

その言葉にダーナは不祥な笑みをこぼし消えた。

大護『どうする?』『これから』

嵐『その決戦に備えてあいつらと合流する。7人を集める!』

フェルト『じゃあ首都メガロメセンブリアへ行くんだね』

嵐『そこに憐、信、陵がいる。後は新庄と影義だけだ』

大護『じゃあ行きますか』

そう言って3人は戦争を終結させるために仲間を再び集めるために連合の首都メガロメセンブリアへと向かった。

「この後。オレ達は戦争を終わらせるために奮闘する事になった。だが、戦争の影にはある組織が関わっていた」

「ある組織?」

「完全な世界がな」

次回!

大護達は仲間達と4年ぶりの再開を果たす。それはさらなる戦いの幕開けとなつた。

謎の組織『完全な世界』と過去の亡靈『四狂神』。奴らの目的は?

「とりあえずこの戦争の原因は軽く話したよな？」

大護が確認する。

「北の帝国と南の連合がもめたのが始まりなんだよね」

なのはが言う。

「そう。些細な事から始まつたが確たる理由を持つて帝国カイゼルシユルトが侵攻を始める。帝国の目的は世界最古の都 王都オステイアの奪還だつた」

「オスティアってどんなとこ何ですか？」

スバルが聞く。

「空中に島が浮いてる」

ありえない事を言う。

「ハ？」

「天然の魔力で島が浮いんだよ。古代遺跡もたくさんあつて。だから、オーパーツが大量にあるから帝国がそれを狙つて奪還しようとしたわけだ。オスティアはかなり重要な国なるから知らなくてはんとかなる。

で、オレ達は憐達と合流した後戦争を終結させるために奮闘！その頃にシリウス・カグラ・バンテンバーグつて言う元連合の捜査官が仲間になつた」

映像が大護が憐達と4年ぶりの再開をはたしている。その中にスースに加えタバコというダンディな男性とその弟子がいる。

「で、オレ達が帝国のオスティア奪還作戦の阻止ためにそこに行つたら影義と新庄さんがいた」

映像が大護、嵐、フェルト、憐、信、陵の6人がオスティアに侵攻

してきた帝国の巨神兵や艦隊、魔導士相手に戦っている。

「なんか兵器もすごいけど大護くん達が化け物に見えてきた・・・はやでが率直な感想を言つ。

「まあそんなんだけね」

嵐《必殺！ 斬艦剣！！》

嵐が天龍丸で敵の戦艦を叩き斬る。

影義は敵囮まれていてるが

影義《舞い散れ 花風樓刃。弾け散れ 凤仙花》

宮木に伝わる五本の刀で敵を倒し

陵《はあああ！！》

陵は二本の青龍刀。華炎丸と華氷丸で敵を倒す。

新庄《獅子丸！！》

帝国から寝返った新庄は召喚した獅子丸に乗り戦場を縦横無尽に駆け回り。

信《白月！－》

信は白月特有の幻覚で敵を欺く。

憐《アローレイ・シユトローム！！》

紅月丸と蒼月丸を連結させ、弓の刃を放つ。

嵐《大護！後衛の準備できてつか！？》

嵐の視線の先には

大護《いつでもOK！！巨神殺し！！》

巨神殺しを放つ。その威力まさに無敵。

フェルト《こっちも終つた。敵主要艦隊撤退したよ》

フェルトは大護がチャージを終えるまでその護衛をしていた。

「これが原因でオレは敵から『悪魔の雷神』って呼ばれ、味方からは『白髪の雷童子』って呼ばれた」

「悪魔の雷神・・・」

おそらくみんな同じ事を思つただろう。

「こんな事して帝国が黙つてるはずがない。帝国の侵攻力は圧倒的だ。一度にわたるオステイア攻略戦は失敗したもの。まさかの大規模転移魔法で連合の喉元300?におよぶ巨大要塞『デュランダル』を陥落せしめる。王手に等しい一手を打たれたがたつた7人デュランダルを奪還したりした。それをきっかけに連合は勇躍。帝国へ巻き返しをした」

「たつた7人で・・・」

フェイドが驚く。

「その後オレはシリウスから一個の情報を得た」

デュランダル奪還作戦が終わり。

大護『もう核はないがこの戦争はいつ終わる?帝国を滅ぼしてか?この意味ねえ!!--まるで・・・』

信『まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているみたいだ

か

?』

シリウス『ある意味そうかも知れんぞ』

嵐

7人のところにシリウスとその弟子タカミチが来た。

シリウス『俺とタカミチ少年探偵団の成果がでたぞ。やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んでいる。秘密結社『完全な

それから嵐、影義、大護、信はシリウスに呼ばれ連合の首都本部に呼ばれた。

嵐『なんだよ。首都本部にまで呼び出して』  
シリウス『あつて欲しい人がいる。協力者だ』

影義『協力者?』

そこに連合の元老院議員が来た。

信『マクギル元老院議員!?』

議員『いや。主賓はあちらのお方だ』

階段を上がつて来る1人の女性。

議員『王都オステイアのウエステイリア王国・・・

アリカ王女』

彼女の姿に影義は見とれていた。

「帝国と連合。2つの巨大勢力に挟まれ翻弄され続けてきた王女アリカ・アタナシア・フォンディア殿下。彼女は自ら調停役となり。戦争を終わらせようとしたが力及ばず。オレ達に助けを求めにきたつてわけだ。ここまで質問ある?」

ティアナが手を擧げる。

「そのコスモアルフィネスは大護さん達が4年前に倒したはずじゃないんですか?」

「完全には倒してなかつた。ただ一部動いていた連中を倒しただけだつたからな。で、オレ達はそいつらは謎の組織を当初はマフィアや死の商人・・・つまり戦争があれば儲かる奴らだと推測していたが。結局、眞の正体はわからず仕舞いだつた」

大護が言うとスバルが手を挙げ

「新庄さんの隣の人って誰ですか？」

映像は大護達16人で楽しく酒を飲みあつてゐる。その中に新庄の隣に1人の女性がいた。彼女は4年前リーダーが使つていた刀「雷虎」を持つてゐる。

「あの人は新庄さんの恋人のルフィアさん。  
「何か言いたそうだね？」

フヒイトが言ひ。

「後でわかる事だ。オレ達は休暇をもらい。時ならぬバカンスを楽しみ。その時影義が姫君にビンタされていた。で、ある日。影義が姫君と買い物に行つてた時にオレはシリウスの部屋にいた」

大護は憐と賭けポーカーをしている。シリウスは深刻な顔して何かのファイルを見ていた。

# 憐《ケイーン》と1のフルハウス！

憐が手札を出す。大護は軽く笑い  
大護『ゴムノム。キノブの4ワード

そこに

嵐《暇そだなあ》

嵐が一人娘の桜を肩車してやつて来た。

桜を憐に預けシリウスのとこに行く。

シリウス《嵐。いや、奴らの真相に迫るファイルを手に入れたんだが。信じて良いのか・・・。情報ソースは確かなんだが・・・ううん》嵐《なんだよハツキリ言えよ。簡単わかりやすく》

シリウス『いや。お前さんに言つても興味ない話しだよ。それよりこっちの方が深刻だ。この男にもコスモアルフィネスとの関連の疑いが出て来た。大物だよ』

と言つて1人の政治家の写真を見せた。

嵐『こいつは・・今の執政官じゃねえか！このメガロメセンブリアのN.O.2まで奴らの手先なのかよ！？』

シリウス『確証はない外でしゃべるなよ？』

その時市街地から爆発音が聞こえた。

「影義が姫君と買い物中に連中のテロに巻き込まれてな。一昼夜アリカ姫を連れ回した挙げ句その敵の本拠地を壊滅させやがった」「何やつてんだが・・・」  
ヴィータが飽きれる。

「その時に影義がかなり良い証拠を手に入れた。で、アリカ姫はどつか行つて。オレ達はマクギル元老院議員のとこにその証拠を持つて行つたんだ。そして、奴があらわれる」

大護、嵐、シリウス、影義の4人を元老院議員の執務室に来た。

議員『ご苦労。証拠品はオリジナルだろうね？』

シリウス『ハ・・・法務官はまだいらっしゃいませんか』

議員『法務官は・・・来られぬこととなつた』

大護

大護は何か違和感を感じる。

シリウス『ハア』

影義『なぜ?』

影義も大護と同じ違和感を感じていた。

議員『いや・・その。私の意見ではない。そう考える者も多いといふことだ。時期が悪い。時を待つのだ。君達も無念だろうが今回は手を引いてだな・・』

その言葉に大護はある事を確信した。

大護『待て!あんた。マクギル議員じゃねえ!・なにもんだ!・?』

大護が右手から炎弾を放ち議員の頭に直撃させる。

嵐・シリウス『な・・!・?』

あの嵐でさえも驚く。

シリウス『ちょーーー!・?大護おまつ・・何やつてんだよ!元老院議員の頭いきなり燃やして!・!』

影義『シリウス!・よく見ろ!・!・?』

その言葉にシリウスが議員を見る。

???『よくわかつたね。白髪の雷童子。こんなに簡単に見破られるとはもう少し研究が必要なようだ』

そこには4年前に嵐がカナルディア神殿で倒したはずのカイル・アーウェルンクスの姿があつた。

カイル『本物のマクギル元老院議員は残念ながらすでに海のそこだよ』

嵐『アーウェルンクス!・?なんでてめえが!』

大護『てめえ!・!』

雷龍丸を抜き切り替える。

その時2人の男が表れた。

???『通しませんよ』

???『くらえ』

2人の水と火の攻撃が大護にヒットしたが大護はそれを間一髪で避け

大護『あいつら強い!・!』

嵐『だが生身の敵だ!なら万倍戦いややすい!・!』

影義『了解!・!』

2人とも刀を抜き臨戦態勢に入る。

その時アーウェルンクスが回線を繋げ  
カイル『わ わしだ！マクギル議員だ！うむ。反逆者だ！！確か  
に奴らに暗殺されかけた！は 早く救援を頼む！柳瀬、橘、宮木、  
バンテンバーグ。奴らは帝国のスパイだつた！奴らの仲間もだ！今  
も狙われている！軍に連絡を』  
餓<sup>マジ</sup>にはまつた。

大護

シリウス『やられたな』

4人で立ち向かつたが

カイル『君達は少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう』

執務室から石の柱を発生させた。大護達は海に飛び込み難を逃れた。

「あの時に連中を倒していればその後の展開もまた違つたのかも知  
れないので・・・結果論だな。で、それまで味方だった軍に暴れる  
わけにもいかねえ。オレ達は反逆者として首都、そして連合を終  
われた」

嵐『昨日までの英雄呼ばわりが一転して反逆者か。良いねえ。人生  
波乱万丈でなくちゃ』

1名だけこの現状をポジティブに考えている。

「で、オレ達は逃げてきた憐達と合流後、連合と帝国両方から終わるはめになつた。辺境を転戦し古代遺跡立ち並ぶ『夜宮殿』へ。そこにいるアリカ姫を救出に向かつた」

「ホントに波乱万丈な人生ですね・・・」

ティアナが言う。

「て言うかなんでアーウェルンクスが生きとんのやー?」  
はやてが聞く。

「知らん!で、夜宮殿に行つたオレ達はそこで四狂神に会い。ある真実を知る事になつた」

「四狂神?」

なのはが聞く。

「カナルディア神殿にあつた。破壊、混乱、殺戮、恐怖の神の石像があつた。それのこと」

「しかし、神は元々偶像ではないのですか?」

カリムが聞く。

「確かにそなんですが・・・。オレの世界は古代遺跡が多いしそう言つた神話や伝説の事実が本当にあることがあつたんです。もちろんなものありました。だが、四狂神の伝説は世界各國で誰もが知る伝説だつたからな・・・」

「その伝説つて内容は?」

フェイトが聞く。

「ありきたりな話しだよ。悪い神様を英雄が倒すっていう。まあ、国によつて誤差はあるけど。で、その四狂神が表れた。そして、口スモアルフィネスはそいつらと同盟を結んでいたらしい」

大護達は夜宮殿のなかである広間に出了。そこにはカナルディア神殿と同じ石像があつた。その1つ、殺戮の神“エリーヌ”にルフィアの姿が似ていたのだ。

ルフィア『ウソ……。これって……私?』

新庄『ただの空似……じゃねえな……』

その時。

???『ようやく來たか……エリーヌ』  
闇の中から人だが人じゃない者が表れた。

嵐

その3人は石像に似ている。いや、同一人物。

憐『四狂神……』

ガデス『そう我はガデス。破壊を司る神だ』  
甲冑に剣を持った。男が言う。

アモン『混乱を司る神』

顔が青紫の男。

ディオス『恐怖を司る神だ』

大護はディオスから来る波動を感じていた。

信『四狂神ねえ……』

陵『洒落にならないわね』

そう言って8人が刀を抜く。

ディオス『我らは敬い。祟めんとは由々しき事態だ』

嵐『はあ!? めえ何言つてんだ? オレ達は神なんて信じた覚えはねえ! ましてやてめえらのような邪神はな!』

アモン『愚かな……。物事を表面でしか捉えられないから後悔するのだ』

ガデス『人が栄えるのは我らに従うしか道はないのだ』

大護『生憎あんたらを信じるならこの馬鹿達を信じた方が良いな』

ディオス『やはり貴様23年前の……。あの2人の子か……。』

我らはエリーヌにようがあつて來たのだ』

ディオスがルフィアを指さす。

ルフィア《私はエリーヌじゃない！ただのルフィアよ！！》  
ディオス《だが、お前には記憶がないのだろう？幼い頃の記憶が。  
思い出させてやろう》

ディオスがルフィアの目を見る。赤く光。ルフィアが頭を抑える。  
ディオス《今度会つ時はどうなつてゐるかな》  
四狂神は消えた。

嵐《まず姫を救わねえと。話しさはそれからだ》  
一行は遺跡をさらに進んで行つた。

「説明はしねえぞ。つーかできねえから。そして、オレ達はアリカ  
姫と帝国の第三皇女を救い出し。そこである事を決意する」

アリカ姫と帝国の第三皇女クラランが囚われてゐる牢獄を壊し  
影義《助けに来たぜ。姫さん》

アリカ《遅いぞ。我が騎士影義》

遺跡を抜け出し小高い丘に集まつた。大護、フエルト、嵐、麗奈、  
影義、新庄、ルフィア、憐、マリー、信、葵、陵、シリウス、タカ  
ミチ、クラン、アリカ。総勢18人が集まつた。

嵐はクラランと軽くじやれあつてゐるが麗奈に耳を引っ張られている。  
影義《さて、姫さん。助けたのは良いがこつからが大変だよ。連合  
にも帝国にもあんたの国にも味方はいない》

シリウス《恐れながら事実です。王女殿下。オステイアも似たような状況で・・・。最新の調査ではオステイアの上層部が最も“黒い”という可能性さえ上がっています》

シリウスが現状を説明する。

アリカ《やはりそうか・・・。我が騎士よ》

影義《あのさあ。その騎士ってなんだよ姫さん！オレは剣士だ》

あまり変わらない事を言つ。

アリカ《もう連合の兵ではないのであるつ。ならば主は最早私のものじや》

理不尽な事を言われる。

大護

アリカ《連合に帝国、そして、我がオステイア。世界すべてが我らの敵という訳じやな。

じやが・・主とお主ら『十二隊』は無敵なのじやろ？》

その言葉に全員がポカンとする。

アリカ《世界すべてが敵。良いではないか。こちらの兵はたつた9人。だが最強の9人じや。

ならば我らが世界を救おう。我が騎士 影義よ。我が盾となり。剣となれ》

その影義はみんなを見る。

嵐《世界を救うか・・・。良いぜ！》

新庄《楽しめそうだ！》

信《やれやれ・・・。オレも感化されちまつたかな》

憐《信もこっちに染まつて来たね》

陵《やつてみようか！》

大護《まつ！寄り道はキライじやないしな》

全員が頷く。

影義《やれやれ。相変わらず馬鹿ばつかと怖い姫さんだ》

影義はアリカの前にひざまずき

影義《良いぜ。オレ達の力。あんたに預けよう》

「さあて反撃開始だー！つっても誰が敵で誰が味方かわからんねえ。マジで世界全部が敵なら全員倒せば良いが。どうしたかの説明はなし！」

「なんでやー！」

「説明がめんどい！後で個人的に教えてやる。

敵味方の判別とかは姫さん2人と信、麗奈とかに頭脳労働担当任せだ！幸い姫さん達のおかげで味方は徐々に増えた。で、肉体労働担当のオレ達は『敵』だとわかつた奴らを倒す！味方を増やし外堀を埋めてぐ。単純な話しだ。敵は戦争狙いの武装マフィアとか私腹を肥やした役人とかだ。でもそいつらは連中のなかでも雑魚だ。眞の敵はコスモアルフィネスと四狂神！その後約5ヶ月におよぶ死闘の後遂に奴らの本拠地を突き止め追い詰める！

だが、その1週間前にルフィニアが雷虎をおいて四狂神の元へ行つちまつた

「それって！？彼女と戦つてことー？」

なのはが驚く。

「それに関しては新庄さんが自分でやるつて言つてたからそれに任せた。

で、奴らの本拠地は・・・世界最古の都 王都オステイア 『ディオスの神殿』！！

そこにはアリカ姫の妹 黄昏の姫巫女が囚われ世界を無に帰す儀式を始めていた

「それってどういう意味？」

フェイトが聞く。

「これに関しては絶対しゃべる気はないから聞かないでくれ

「わかった。みんな聞かんようにな!  
はやてがみんなに釘をさす。

「そして、決戦が始まった」

大護達。十三隊とコスモアルフィネス、四狂神との決戦。それを静  
観するノア。

新庄は愛する者を救うために。

そして、これが悲劇の始まりだった。

戦いの中。大護はある人物と対峙する。

第十一話 追憶の天使（集いし剣士編）（後書き）

長い過去編。後3話で終わります。『トト承下さ』。

## 第十一話 追憶の天使（頂上決戦編）

「コスマルフィネスと四狂神との最終決戦。外の敵は帝国・連合・オーブの混成部隊に任せてオレ達は敵の幹部を叩く訳だ。で、シリウスとタカミチ、姫さん達4人は各国の正規軍の説得に向かつた。

事実上、8人で神殿に向かう事になった

映像が大護達がセイントローズの甲板に集まり神殿を見ている。

「まだセイントローズ使えたんか」  
はやてが驚く。

「まあな」

大護『不気味なくらい静かだな・・・』

嵐『なめてんだろう?』

そこに混成部隊をまとめる隊長（女）が来て

総長『大護殿！混成部隊準備完了しました！』

大護『わかった。頼んだぜ。外の人形やら魔獣とかは』

総長『ハツ！それで あの・・大護殿。ササ サインをお願いでき  
ないでしょうか』

「なんでだ？」

ヴィータが聞く。

「知らん！ ただフェルトから殺氣を感じた」

その言葉にみんなは

（当たり前）

と思つたに違ひない。

シリウス《説得が間に合わん。帝国のタカミチ君達も同じだろ？  
決戦を遅らせる事はできないか？》

シリウスから通信に入る。

信《無理だな。奴らは世界を無に帰す儀式をすでに始めている》  
陵《私達でやるしかないね・・・》

全員が頷く。

嵐《うしつ！－！じゃあ・・・行くぜ！－》

全員が飛び立つた。

神殿内に入ると

カイル《また会ったね・・・十三隊。君達のおかげでずいぶん仲間  
を減らされたよ。ここらへんで決着をつけよう》  
アーウェルンクスの周りには6人の幹部がいる。

嵐《新庄！大護！憐！先に行け！－！こいつらはオレ達が何とかする  
！－》

憐《でも！－》

嵐《とつとと行け！－！新庄！ぜつてえルフィアを救つてこい！－！》

新庄《わかった！大護！憐！行くぞ！－》

大護《了解！－！フェルト！行くぞ！－》

フェルト『わかつた！』

4人が神殿の奥へ向かつた。

嵐『さて・・・これで心置きなく殺れる』

嵐の前には大幹部が2人。

嵐『オレの本気はやべえからな・・・！！』

嵐の背中に鬼が見えた。

奥に向かつた4人。そこには

ディオス『来たか・・・。愚かな人間よ』

四狂神ルフィアがいた。ガデス、アモン、ディオス、そして、

新庄

新庄の前に立つ彼女。だが、彼の元には戻らなかつた。

新庄『ルフィアーーーーー！』

ディオス『やはり貴様似ている・・・。あの2人に』

ディオスが大護を見る。

ディオス『23年前。我らを倒したあの男・・・柳瀬 神威とユフ

イ・・・。いや。大天使の2人に』

大護『オレはあの2人なんかじやない！』

戦刀と雷龍丸を解放させる。

憐『新庄！オレ達がやらなきや！！』

紅月丸と蒼月丸を抜く。

新庄『わかってる！』

獅子丸を召喚する。

大護『フェルト！周りの召喚獣を頼む！！』

フェルト『心得た！』

フェルトが召喚獣を倒す。

ガデス『ディオス様。我があの男を・・・。天使の末裔よ。我の破壊の波動。見せてくれる！波動よソーマ神殿へ！！』

大護『ガデスとともにどこかへ。』

アモン『ふん。我は月の使い手を。波動よロギスモス神殿へ！』

憐も同様に。

ディオス《貴様は我が相手をしてやろつ！ 我の恐怖の波動を！－！」》  
ディオスが持っていた剣を構える。

新庄《・・・リーダー・・・俺に力を！》

大護はガデスとソーマ神殿にいた。

ガデス《さあ・・・始めよう》

全身に感じる波動。4年前の大護なら立ち向かえられなかつた。戦

刀と雷龍丸を重ね

大護《限 界 突 破！－！」》

蒼い魔力を纏い白い長刀が現れる。

大護《戦雷！－！」》

ガデス《それでこそ破壊のしがいがある！－！いくぞ－！」》

刃を交える。剣合で大気が揺れる。

大護《ハアアアア－！」》

ガデス《ぬうん！－！」》

鎧ぜり合いになる。

ガデス《なるほど！やはり貴様は・・・》

言い切る前に

大護《龍天 月破！－！」》

戦雷に纏つた龍天月破を放つ

ガデス《ぬお！－？」》

大護《オレは誰が何と言おうが柳瀬大護だ！－！」》

ガデス《が上空に上がり

ガデス《ならば、我が貴様を破壊してくれる！－！」》

周りの巨大な岩石を操る。

大護《反則だろ！それ！》

避ける。そこにガデスが再び鎧ぜり合いに持ち込む。

大護《雷天！》

高速で移動しガデスを斬る。

ガデス『ぐああ！？』

大護『悪いが一瞬で終わらせてもううぞ！！』

戦雷を居合斬りのように構え

大護『天龍剣 奥義 天翔飛龍！！』

雷を纏つた神速の居合術がガデスに直撃する。

ガデス『我の役目は・・・』

ガデスが消え空間が元に戻つていく。

憐は怪物イズマエルと化したアモンと戦つていた。

イズマエルは体中に過去に対戦した魔獣の優れた部分を繋ぎ合わせた姿だ。

アモン『ハハハ！？』

憐は紅月丸と蒼月丸を連結させアローレイ・シユトロームを放つ態勢に入る。

アモン『小賢しい！？』

口から炎弾を放つ。憐はそれを飛んで避け。弓にさらに魔力を込める。

憐『一撃必殺！？』

オーバーアロー・レイ・シユトローム！？』

巨大な弓の刃がアモンに直撃。

アモン『私は闇に還るのみ・・・』

消えた。

元の場所に戻つた2人。そこでは新庄とディオスが睨み合つていた。ディオス『ガデスとアモンが・・・なぜ人は神を崇めん！？我らこそが人間を導く唯一の存在！？』

ディオスの周りに黒い波動が集まつていく。そして、ルフィアさえ

も取り込み1つになつていいく。

# 大護『ガーディアンズとアーモンの残留波動！？それを取り込んで！？』

# 憐 $\bowtie$ 四狂神が一つになる！？

その言葉にルフィアが反応した。

ルフイア ≈あ・・・あ・・・ ≈

波動が乱れる。

嵐大護

そこは二六モアリノアノを倒し給テガノリトガ來た

ルーラが怪ねた

テ、不<sup>ハ</sup>『おのれ！ まだしてモエー<sup>ス</sup>め！』

新主《ルフィア》……。

手えだすな!!「イツはオレが到す!!」

言《黒茶だ！新庄。相手は仮にも神だぞ！！》

の事、眞理が何であるかを知る事である。

嵐《わかつた……。オレ達は用意しなは二》

新庄『ありがと』。『神獣合戦!!』

師子丸と同様の体が半神獣化する。手には

象 热志の變刀 雷虎が屋うへてゐる。

トドホク《アリスの冒險》

卷之三

新庄『そんなのが…そんなのが失序であつてはまるか!!!!』

拳と剣を交える。それを大護達は見ていた。

「なんで助けないんですか？」

エリオが聞く。

「男があそこまで覚悟してんだ。手を出したら新庄の誇りに傷をつけると同じになるからだ」

ディオス《なぜだ？ 人間がこれほど強い！？》

新庄が顔面に拳をヒットさせる。よろけたディオスにラッシュをかける。すでに新庄の体もボロボロだ。

ディオス《貴様はその体で戦う！？》

新庄《あいつらと同じであきらめが悪いだけだ！！》

新庄《雷虎！ 獅子丸！！》

ディオスに突っ込み

新庄《獣戦拳 天導之型 天戦！！》

雷虎と拳がディオスを貫いた。

ディオス《なぜだ・・・？ 我こそ・・・》

新庄《人間は皆自分の足で未来に進める力を持つている・・・神とかに頼らなくてもな》

ディオスが消え。新庄は元の姿に戻った。

影義《神相手に素手で勝つなんて》

陵《ある意味馬鹿よね》

新庄《勝つたのにそれはねえだろ！ こいつちはボロボロなんだぜ？》

新庄はルフィアの前に

ルフィア《剛・・・》

新庄《終わつたぜ》

ルフィア《私を殺して！》その言葉にみんな驚いた。

新庄《なんだだ！ お前はエリーヌじゃないんだろ！？》

ルフィア『わたしはルフィアよ。でもそれ以前はエリーヌだった』

新庄『信じない！オレはそんなの信じない！！』

ルフィア『わたしが生きてるかぎり四狂神はまた復活するの！！』

新庄『それでもオレは！！』

ルフィアの周りに波動が集まる。

ルフィア『お願ひ剛！・・・わたしを・・・』

その時、雷虎がひとりでに動いた。

新庄『雷虎！？』

そして、雷虎がルフィアの胸に刺さつた。行き場を失つた波動が暴発し大護達は吹き飛ばされた。その時に雷虎は碎け散つた。

新庄『なぜだ！？オレに戦う意思はなかつた！！』

ルフィア『剛・・・』

倒れているルフィアに駆け寄る。

ルフィア『わたし・・・怖かつたのルフィアとしての記憶が消えていくのが』

新庄『だからオレの前から姿を消したのか』

ルフィア『わたしね・・・エリーヌとして生きた長い時間より剛といた時間・・・短い時間のほうが楽しかつた・・・』

彼女の目には涙が。

新庄『また一緒にいられる！！』

ルフィア『ほんとう？また一緒に走れる？獅子丸に乗つて・・・』

新庄『ああ！？絶対！！』

だが、彼女は目を開ける事はなかつた。

新庄『ルフィア・・・？

ルフィア――――』

新庄の目に涙が。どんなに辛い時でも涙をみせなかつた男の涙が。その時、神殿が揺れた。ルフィアのいた床が崩れ彼女は落ちていった。

新庄『ルフィア！！』

それを追おうとしたが

嵐《落ちる気か！？》

嵐が止めた。

信《儀式が始まつたか？》

嵐《外に出るぞ！！》

全員が外へ向かつていつた。

それを見ていた全員が泣いていた。

「なんで・・・刀が・・・」

なのはが聞く。

「オレはあれはリーダーがやつたんじゃねえかつて思つた。でも、  
そんなのわかることじやねえからな」

「これでこの戦いは終わつたの？」

「いや・・・最後にオレはある人と戦うことになつた」

広間を出ようとした瞬間なにかがフェルトの足を捕らえルフィアの  
落ちていつた間に吸い込まれていく

フェルト《きやあああ！？》

大護《フェルト！？》

大護はそれを追う。

嵐《大護！？あの馬鹿たれ！！》

信《嵐！？早くしないと！！》

嵐《わかつてる！！

大護・・・帰つてこいよ』

嵐は祈りながら広間を後にした。

大護はフェルトを助け最深部に降り立つた。

大護『大丈夫か?』

フェルト『なんとか・・・。』

2人は抱き合つているように見える。

大護『ここは・・・神殿の最深部・・・』

???『来たか・・・。神威の息子よ』

声がした。大護はその声に違和感を感じていた。

フェルト『誰だ!?』

大護『・・・まさか!?』

???『そう。お前とは何回も会つてゐるからな』

大護『あなたは死んだはず!』

???『オレもお前の父母と同じでな・・・。』

フェルト『どういう意味なの!?』

凪『オレの名は如月 凪。3000万年前にこの地上に降り立つた  
三天使の1人。『理の天使 ガブリエル』だ』

黒髪に十三隊の隊服と同じ服を着ている。背中に日本刀を差している。

大護『凪・・・さん』

凪『会うのは10何年ぶりだ?ますます似てきたな。顔は神威だが、  
目はユフイだな』

大護『なぜあなたがここにいる!?』

戦刀と雷龍丸を構える。

凪

大護『やる事?』

凪『お前は母の血。ユフイの血を撰んだようだな・・・。『全知全能  
の天使 ラファエル』の血を・・・。だが、お前は大天使と墮天使

の混血・・・』

大護『オレは人間だ！！誰が何と言おうが！！』

凪『そうか・・・お前は知らないだろ。なぜ神威がユフィを殺したのか』

大護『あなたは知ってるのか？』

凪『ああ。原因は3000万年前。そこには超古代文明があった。だが、人は魔獣と墮神に怯えていた。その墮神こそが無のノアの口グ・ダーナなのだ』

大護『ダーナが墮神？』

凪『その時的人類は神を殺してしまった。それに激怒したダーナは墮神となり世界を破壊した。その時、まだ天界にいたルシフェルは絶対神ユピテルに人を助けるように言ったがコピテルはそれを良しとしなかつた。そして、ラファエルは墮天使になるのを覚悟し地上へ。その時、その恋人のラファエルと親友のガブリエルも向かつた。そして、ダーナを倒したが奴はおのれの力をクリスタルに封印した。ルシフェルは地上に残り人類を見守ることにしたがコピテルはそれを許さなかつた。奴は恋人であるラファエルを操りルシフェルを殺そうとした。ルシフェルは恋人に裏切られたと思い世界を火の海にした。その時にラファエルとガブリエルはそれを命を懸け阻止した。そして、3人の命を後世与えることにした。

それがオレでありお前の両親だ』

過去の真実が言われた。

大護『それを知つちましたから父さんは母さんを殺したと・・・』

凪『ああ。でもあいつは後悔していたよ』

フェルト『じゃああなたの目的は何なの！？』

凪『そのすべての原因『絶対神ユピテル』をこの世界ごと倒すことだ』

大護『そんなの絶対させない！』

戦雷を構える。

凪『なら力ずくで止めてみろ！』

背中の刀を抜く。  
2人の刃が交わる。

「あの人言つてるのは・・・」

カリムが言う。

「真実です。そして、皮肉にもオレが生まれてしまった」

「ちょっと待て！！ではなぜダーナはお前達を野放しにしたのだ？」

クロノが聞く。

「凪さんがいるのをわかつてたからだろ？でも、凪さんの目的はそうじやなかつた」

凪 『斬り舞え！天倫七花！！』

刀が七本に増えた。

大護 『数が増えたつて！！』

凪の七本の刀が空を舞う。姫矢とは違う変則七刀流。

凪 『オラオラ！お前の実力はその程度か！？』

大護は凪の戦闘スタイルに悪戦苦闘。

大護 『龍天 月破！！』

龍天月破を乱れ打つ。凪はそれを避ける。

凪 『自分ばつかはやめとけ。連れが・・・』

4本の刀がフェルトを襲う。避け切れない。  
だが、彼女を大護が護つた。

フェルト『なんで・・・私を』

大護『好きな奴護つて何が悪い・・・』

その言葉にフェルトは顔を赤らめた。

再び凪と対峙し

凪『お前はあの2人に似ているが中身は全然違うな・・・』

大護『さつき言つたる? オレは誰が何と言おつが柳瀬大護つて』

凪『そうか・・・自分の名の意味を理解したか・・・なら、そろそろ決着をつけよう! !』

凪が構える。大護も同じ。互いに最後の一撃。

凪『うおおおお! !』

大護『ハアアアアア! !』

刃が届いたのは戦雷だった。  
凪

凪は粒子となり消えた。

大護は信に連絡した。

「勝ったの?」

フェイトが聞く。

「まあな。だが、儀式は完成しちまった」

ディオスの神殿を中心に白い光球が大きくなつていいく。大護とフードは間一髪で脱出した。

嵐《やべえぞ！…ドンドンでかくなつていいくぞ！…》

信《世界の始まりと终わりの力…・…・…こうなつてはオレ達にできることは…・…》

その時

アリカ あきらめるな…飛鳥信…この愚か者が…！  
アリカの声が聞こえた。

空を見上げるそこには

嵐《連合の戦略旗艦！…》

リカード こちらスヴァンフィー「艦長リカード！…助太刀するぜ！世界のピンチだ！敵味方関係なしだ！…

反対側からは

クラン その通りじゃ！

大護《帝国の主力艦隊！…》

フェルト《間に合つたんだ！…》

アリカ《全艦艇！光球を取り囲み押さえ込め！…魔導兵団 大規模反転封印術展開！…世界の興廃 この一戦にあり！…各員全力を尽くせ！…後はないぞ！…》

魔導兵団《ハツ！…》

「結論から言うとこの時に世界は救われたつてこと。オレ達十三隊の力じゃなくみんなの力でな。

で、その後なぜか授勲式に呼ばれたってわけ

「大護くん。英雄やん！」

はやてが言つ。みんな頷く。

「まあ・・・・これで事がおさまればよかつたんだがな・・・・

「また何かあつたの！？」

フェイトが驚く。

「ああ。式の後新庄さんはふらつと消えちました。大事な事言えな  
いで。その数時間後に最悪の事態になつた」

「ノアが攻めて来たの？」

なのはが聞く。

「いや、連中との決戦は4ヶ月後だ。その間にいろいろあつてな・・・

「何があつたんですか？」

ティアナが聞く。

「オスティアの崩落・・・」

その言葉に全員が耳を疑つた。

悲劇が幕を開けた。勝利のつかの間オスティアが崩落！？  
そして・・・再び十三隊大暴れ！？

第十一話 追憶の天使（大戦後編）（前書き）

書いたらかなり長くなってしまった・・・。

長いかもしませんが、ちょっと大事な話です。

「オスティアの崩落つてどういつこと？」

なのはが聞く。

「儀式を阻止してそれで終わりじゃなかつたの？」

フェイトも続く。

「確かに。儀式は失敗になつたが・・・。黄昏の姫巫女の能力。こつちで言つ“AMF”が発動しちまつてな・・・。後は口より曰で見たほうがいい」

授勲式に出席したのは大護、嵐、影義、陵の4人。式が終わり大護は街の酒場に入ると  
『ダイゴが来たぞーーー!』  
『あんた歴史の教科書に載るぞーーー!』  
『大護さまーーー!』  
黄色声援で酒場が盛り上がる。  
嵐『やつと来たか！？この英雄！！』  
憐『じやあ始めようか！！』  
酒の入つたジヨッキを掲げ  
『かんぱーーーい！ーーー!』  
一斉に騒ぎ出す。

大護『新庄さんは?』

嵐『ちょっとばかり1人になりてえだと』  
大護『言つことあつたのに・・・帰つて来るからそれでいいか』  
憐『何かあつたの?』

大護『かなり良いことがね』

と言つて酒を飲みほす。そこに

陵『十三隊十三番隊隊長 吹石陵!!!歌いまーす!!!』

酔つ払つた陵が騒ぐ。

影義『恒例だね』

陵『大護! 憐! フェルト! 歌うぞ!!!』

憐『ちょっと待つて!!!姫矢がいない!!!ベースがいないからセッ

ション無理!!!』

陵『信<sup>ハイハイ</sup>。ベースお願<sup>ハイハイ</sup>い』

信

その5分後。セッションの準備ができたでき

陵『じゃあ歌いまーす!!!』

それから1時間におよぶ即席ライブが始まった。

「大護くんも歌うんだ・・・」  
なのはが驚く。

「まあ・・・。何回かライブしたことあるし」  
「歌上手ですね~」

リインが言つ。その時、はやてが黒い笑みを見せていた。

ライブが終わり。影義が浮かない顔をしていた。

嵐《どした？女か？》

影義《違う》

嵐《素直になれよーーーお前は残つても良いんだぜ？連合には義理はねえしオレ達もまだお尋ね者だ。決戦の時にくれば良い》  
影義《いや。あの姫さんはあの年まであの王宮で過ごしたんだろう？あそこは毒蛇の巣みたいな場所だ。だから、あんな能面みたいな顔になつちまつたんだろうな》

大護《ひどい言われようだな・・・》

影義《それが今度は女王陛下だろ？》

嵐《なんだそりや？》

おうむ返しになる。

信《アリカ様の父王はコスマロアルフィネスの傀儡であることが判明したらしい。だから、彼女は半ばクーデターみたいな感じで王位を奪つたみたいだ》

陵《そんなの初耳だよ！》

信《3日前のことだし。まだ公表されてない》

影義《だから、デートは無理だなあ～って》

そんな時、王宮では

アリカは影義達と過ごした時間を思い出していた。

アリカ《案ずるな影義・・・私にはもうそなたの言葉だけで・・・充分なのじゃ・・・》

その瞳には涙が見えた。

シリウス《陛下！！時間です。まもなく崩落の第一段階が》  
シリウスと大戦中に勝手についてきたクルトが汗を流しながら来た。  
アリカ《進行状況は？》

シリウス《アスナ姫封印直後から全艦艇全力であたつてあり。現在  
37%。

陛下のお考えどおり式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。今のところ混乱はありませんが崩落が始まればその限りでは…。

全市民の救出は困難を極めるかと…！』

アリカ《…。わかった。私も直接指揮にあたる！…》

「そして、崩落が始まった…。魔力消失現象でこっちの世界の魔法は使用できない。つまり、艦でしか逃げられない」

映像はまるで世界の終わりのような光景になった。  
それには田を背けたり、食い入るよつて見てるのもいた。

セイントローズで乗せられるだけの人を乗せ脱出を測る。影義はアリカのいる艦に通信を繋げた。

影義《アリカ！…これどういうことだ！？》

アリカ 影義…。見てのとおりだ。世界を救う代償に自らの国を滅ぼした。案ずるな。私もいづれ遠からぬうちに地獄に墮ちる

影義！？なんで言わなかつた！この唐突木！…》

アリカ 話しても無駄であろう。救出活動に尽力した後そなた達はそのままここを去れ。一度と戻るな。最後の命令じや

影義《何！？それどういう…》

アリカ 通信終了

自ら助けに行こうとするアリカ。

クルト 陛下！しばしあ待ちを！！

飛鳥信！聞いてますか！？クルトです！

信が割つて入る。

信 何？

クルト アリカ様のおっしゃる通りにするのが賢明かと思います。  
もし戻れば、連合に拘束される可能性が高い！！今は身を隠してノ  
アとの決戦に備えてください！

信 『わかった。影義のことはお任せを』

アリカ そなた達には世話になつたな。むりばじゅ

信 『陛下も御武運を』

影義 『ちょっと待て！』

通信が切れる。影義は甲板に上がり

影義 『くそ！あの頑固姫！！

バツカヤロオオオー！！』

セイントローズは空域を離脱した。

「こうして千塔の都と言われた。空中王都オステイアは地図から姿  
を消した。でも、一部の島は残つたらしいけどな」

信 『犠牲者数は人口の5%を下回つたそつだ。これは状況を考えれ

ば奇跡的な数字・・・

嵐《数が少ないからって割り切れる女じやねえだろ。それより大変なのはこれからだ》

「世界は救われたが一つの国は譲れなかつた・・・で、金もツテもない民は難民となり各國に流出。支援とかいう名目で派遣された連合軍に王国は実行支配されちまつた」

「そんな！」

「ひどい！！」

エリオとフロイトが言つ。

「でも悪いことばかりじやなかつたぞ」

「何があつたのだ？」

シグナムが聞く。

「ルフィアが生きてるつて言つたらどうする？」

その言葉に全員が口をポカンと開けた。

オステイア崩落から27日後。

新庄はお頭と十三隊のいる晃憲寺に戻つて來た。

新庄《戻つてきまつた・・・》

階段を上がる。上がり切つたところで新庄は絶句した。視線の先にあの間に落ちていつたルフィアの姿があつた。ルフィアが新庄に気づき

ルフィア《こんにちは。旅のかたですか?》

新庄《あ、ああ。新庄 剛つて者だ。1月前から4年前から世界を旅している》

ルフィア《じゃ あ世界のこといろいろ知つてますわね！私体が弱いのでこのお寺から出たことがないんです。お話を聞かせてください》

そこに

嵐《やつと帰つて來たか！？》

嵐とお頭が來た。

ルフィア《嵐さんの知り合いでですか?》

嵐

お頭《新庄殿。孫娘に旅の話しどもしてくれないか?》

他人行儀の話し方をするお頭。

新庄《オレの話しど良ければ》

ルフィア《ありがとうございます！私お茶の用意しますね！》

境内へ小走りをしていくルフィア。

新庄《お頭！嵐！ 彼女は一体！？》

お頭《彼女はルフィアじゃ・・・》

新庄《そんなん・・・ 彼女は1月前にオレが・・・》

お頭《あそこで昏睡をしている大護のおかげじゃ。あの時大護がある人に会つて彼女が生きてると言われ。わしらのところへ転移させたんだ》

新庄《なんで・・・》

嵐《それはあいつに聞けば良いだろ》

お頭《ルフィアはかなり衰弱してたが何とか一命はとりとめた・・。

今この彼女は魔法が使えない》

新庄《魔法が使えない・・・ なんで》

お頭《雷虎のせいじゃろ。あの刀はかなり特別でな、精神波動によつてさまざまなことが起こる。

現にわしらがルフィアを助けた時、彼女は言葉すら失っていたから

な・・・》

嵐《おそらく、リーダーの思いが起ことしたことだらうな》

新庄《じゃあ今の彼女の記憶は・・・》

お頭《呉葉の魔法で植え付けた偽りの記憶じゃ・・・》

そこにルフィアが顔をだし

ルフィア《おじい様、嵐さん、剛さん・・・お茶の用意ができましたよ！》

嵐《シナモンティー？ いつになく張り切ってんな！》

お頭《わしの客人には普通のお茶しかいれないのに・・・》

ルフィア《せつかく来ていただいたから精一杯のおもてなしを・・・》

嵐《このバカにそんなの必要ない》

お頭《まあ。他の連中じやあ張りが合わんじやろ。それに新庄殿となら年も近いし気合いが入るじやろ》

2人が茶化す。

ルフィア《違います！ そんなんじやありません！ 剛さん気にしないでくださいね》

嵐《じゃあ、おやつにするか！ 大護！ 起きろ！》

木の上で寝ていた大護が起きる。

大護《わかつた。新庄さん帰つて來たんだ》

木から飛び降りる。

新庄《大護・・・なんで・・・》

大護《さあて・・・なんでかな？ でも、良いのか？ 今の彼女にはあんたとの思い出ないんだぜ》

その言葉に新庄は息を吸い込み

新庄《思い出は・・・また作ればいい！》

そして、ルフィアの元へ歩いていった。

「雷虎とはどういった刀なのだ？」

シグナムが聞く。

「雷虎はお頭が言つていたとおり。所有者の精神波動で様々な現象を起こす。4年前だつてリーダーは人じやなく魂を斬ることができたからな。

で、あの時はリーダーの思いが雷虎を操り。彼女の神としての能力を斬つたつてことだ」

「なんでそんなことが起きたんですか？」

キヤロが聞く。

「オレの考えだから鵜呑みにすんなよ。

オレ達は何かしら思いを持つて戦つてきた。それを刀が認めてくれた・・・。つてオレは考へてる」

「その思いに刀が答えた・・・といふ」とか

シグナムが納得いく。

「で、アリカ姫はどうなったんや？」

はやてが聞く。

「新庄さんが帰つて来てから2日後に姫さんは連合の元老院議事堂で今現在のオスティアの現状をなんとかするためにな。だが、連合にはめられ、拘束された」

「なんでだよ！？」

ヴィータが声を荒げる。

「姫はあの崩落から社会不安を広げただの、いろいろ言われてな。彼女には味方はいなくなつた。そして、2ヶ月後に処刑が決定された」

「そんな！」

「なんでなの！？」

「連合は姫の妹。“黄昏の姫巫女”的力が必要だつた。それを聞き出すためとオスティアは自らのものにするためにな」

「そんな！？」

「なんて勝手な！？」

フェイントシグナムが言つ。

「大護くん達はそれを黙つて見てたんか？」

はやてが聞く。

「おいおい。んなわけねえだろ。そんなことされて黙つてるわけねえじやん」

嫌な笑みを浮かべる大護。嫌な予感が全員を襲つた。

「な、何したの？」

なのはが聞く。

「大暴れした」

はつきり言つた。

10日後。

重戦争犯罪人 アリカ・アタナシア・フォンティア 処刑執行日當日。

谷に架かる板の上にアリカは立つていた。その周りには連合の軍とメガロメセンブリア元老院議員が数人。

議員《魔獸うごめくケルベラス渓谷。魔法が一切使えぬ死の谷。古き残虐な処刑法ですが・・・これを持つてようやく世界全土の民の溜飲を下げる」となりましょ》

アリカはゆっくり板を歩いていく。

アリカ（この死が人々の安寧になるなら・・・。せめてもの慰みとしそう。ただ1つ心残りは・・・影義・・・そなたの顔をもう一度だけ・・・）

一步一步谷底へ

アリカ（さらばじや・・・影義・・・）

谷底に落ちていくアリカ。暗闇に見えるのは腹をすかせた何百もの魔獸。

そして・・・。

魔獸の声でざわめく。

議員《クックツ・・・。王家の血肉はさぞ美味でしょうな。よろし・・》

言おうとした瞬間、1人の重装兵が

《よおーっしー! こんなモンだろ 録れたか? ちゃんと録れ  
たか? よおーじ! 苦労ツ》

聞き覚えのある声。

《おーい。オッサン! これ生中継とかじやねえよな?》

議員《無礼者! ! 何者だ貴様! ! 名を・・・》

兵が頭をわしづかみにし

《オッサン。録画はここで終わりだ。で、今からここで起  
ることは“なかつた”ことになる。わかるな?》

議員《きつ貴様は! ?》

兵が鎧を破壊する。姿を見せたのは

議員《十三隊! 天空の牙・・た、た、橋 嵐――――! ?!》

そして、周りがざわめく。議員が見たのは

議員《新庄 剛! ! 千樹 憐! ! 飛鳥 信! ! 吹石 陵! !

シリウス! ! フェルト・グレイス! !》

十三隊最強の面々。そして、最後に

議員《白髪の雷童子・・・柳瀬 大護――! ?!

十三隊! ? 馬鹿なツ! ! では谷底の女王は》

谷底。

アリカ(なんじゃこには・・? ここが地獄か? 恐ろしいモノかと思  
つておつたが・・。何やらあたたかで力強いものに抱かれているよ

うな)

アリカが目を開けると

アーティスト

魔獸に囲まれながらも彼女を抱つこじでいる影義の姿があつた。

影義『アンタを助けに来たんだよ。アリカ』

# アリカ『え？なぜじゃ？』

その言葉に影義は顔を弓毛繩（くわじのう）に引いた。

裏で来る魔羅を逃げ出でに立てば

議員《馬鹿な！いくらあの男とてあの谷からは！》

議員《ズ・・・舞のふなーーー及選議》《街の2人も選がねーーー》

兵達が構える。その言葉に嵐は笑顔で

嵐《おいおい、やんのか？良いのか？その程度の戦力で》

の警備はここに見えるだけではない。周囲数十キロ。五個艦隊と3000名の精銳部隊、7000名を越える部隊が貴様らを包囲している。いくら貴様らとてこれを・・・『

## 新庄 かため息をひき たから

## 憐 $\heartsuit$ その程度の $\heartsuit$

卷之三

# 大護『聞いてんだよ！！』

全員が刀を構える。そして、総隊長が

ここで史上最悪の化け物部隊が大暴れを始めた。そこは兵達の悲鳴しか聞こえない。力オスを超えた力オスになっていた。

影義は走っていた。魔力も氣も使えない死の谷で。

アリカ『なぜここまで危険を冒して私を助ける！？』

影義『オレが馬鹿だからに決まつてんだろ！』

アリカ理由になつておらぬ！！私はもう王族でもない！！かの戦争を起こした大罪人“厄災の女王”じゃ！！私にはもう死しかないのじゃ！頼む！このまま・・』

影義の血管が切れる音がし。アリカに頭突きをした。アリカは頭に？マークを浮かべる。影義『相変わらずうるさい人だなあ。言わなきやわかんないの？このお姫様は！理由！？オレがアンタを好きだからに決まつてんでしょう！！』

空へ飛ぶ。

アリカ『は？』

顔がかなり赤いアリカ。

影義は銀龍を召喚しそこに乗り

影義『つて。なんだよその顔。予想してなかつたつて顔だね。まったく何が世界を救えだよ？

好きな女の1人も救えない男に世界とか救えるわけないじゃん』アリカはまだ顔を赤らめている。

影義『で、アンタはどうなの？』

アリカ『何！？なにがじゃ！？』

影義『アンタはオレのことどう思つてん？』

アリカ『なつなぜ私が言わなきやならんのじゃ！？』

影義『オレが言つたんだから言つでしょ。フツー』

アリカ『そうなのか？』

影義『それが一般常識』

この男に一般常識がわかるのかが疑問だが。

アリカ『私は王族。元々プライベートは許されぬ。それどこか今は

“厄災の女王”……』

そこに再び影義の頭突きが

アリカ『何をするのじゃ！？』

影義『はあ。今さつき厄災の女王は死んだ。今のアンタは多田のア

リカ。ただの1人の人間だ』

アリカ『1人の・・・人間』

影義『そ。そーゆーアリカさんとしてはどう思つてんのかつて聞いてるの』

アリカ『な・・・う・・・・・・』

何かをボソボソと言ひ。

影義『なんすか？聞こえないっす』

アリカ『嫌いではない』

またボソボソと

影義『んん？声小さいっす』

とうとうアリカが

アリカ『この2ヶ月間1日たりとも主のコトを考えぬ日はなかつたわ！！それがどうした悪いか！？』

その言葉に影義はらしくもなく顔を赤らめて

影義『いや・・・悪くない』

無理矢理アリカを抱きしめキスをした。

そして、

夕日を見ながら

影義『なあ。アリカ』

アリカ『うむ・・？』

影義『結婚すつか』

アリカが『えつ』つて顔をする。

影義『アンタの罪も後悔とかも全部一緒に背負つてやる。なつ』

アリカは少し間を置き言った。

アリカ『はいつ』

その顔は今まで見て来たどんな顔よりも良い笑顔だった。

「影義さんカツ 「イイ～！～」

スバルが興奮する。

「まあ・・・オマケがあつから見ろ」

十三隊が大暴れした後は本当の死死累々。

議員 『貴様らは一体・・・』

嵐 『オレ達は正義の味方じやねえよ』

新庄 『酒好きの悪人だよ』

そこに2人が帰つて来た

影義 『派手にやつちやつたな』

憐 『お疲れ様』

信

陵 『帰つてお酒飲み放題！～』

嵐 『よおーつし！～帰るぞ！～』

全員が帰ろうとした時

議員 『せめて女王だけでも・・・！？』

銃を構える議員。それに気づいた大護は

大護 『てめえ！～』

雷天で銃を斬り。議員を地面に叩きつけ。そして、戦刀をそこに叩きつけた。

憐  
《あつ  
！  
》

議員《ひぎん》・・・ひ――!?

大護は議員の喉元に戦刀をあて、髪を掴む。かなり怖い顔をしている。

大護「てめえよおー。こひちはこの程度じゃたらねえんだよ・・・。こひちはてめえらの悪行を見逃すつて言つてんだ。なのによおー」んなふざけたマネしやがつて》

議員は思えて言葉すらでない。

「こに曝すぞ！ わかつたか！ ！」

何言つてゐかわかない。

大護『わかつたかつて聞いてんだよ!!!!!!』

## 議員《ハイハイ！》

# 大護『帰るか！』

それを見た全員が引いていた。

「大護くん・・・コワツ！！」

はせがわ

過保護なファイト。

「つていうか・・・暴れすぎじゃない?」

「あんなの2度とできねえなー！」

「大護さん」

スバルが手を擧げる。

「どうした？」

「大護さんはどうなんですか？他の人の恋愛は見せておいて「オレは良いだろ！」

「まさか大護くん。他の人のを見せといて自分を見せないようにしてたんじや・・・」

黒い笑顔のはやて。

「ま、まさかそんなわけ・・・」

大護が冷や汗を欠いている。

「あるんやろ？」

「・・・あります・・・」

はやてに負けた大護。

「最低・・・」

フェイトが冷たく言う。

「見してくださいよ！」

スバルがはしゃぐ。

「・・・」

無言の大護。

「大護。は・な・す・よ・ね？」

黒い笑顔のフェイト。

「ハイ・・・」

世界を救つた英雄の威厳かたなしである。

「誰なんですか！？」

アルトが聞く。

「見てればわかる。あの大暴れの1週間後に事件が起きた」

大護達はノアとの決戦まで晃憲寺にいることにした。

朝9時。大護は布団で寝ている。

大護『んん？動けない・・・。だれかいんのか・・・』

大護の右隣りに誰かいる。大護が寝返りをうつてそこを見ると

大護『なつ・・・なつ！』

猫耳に赤桃色のビーストクオーターのフェルト・グレイスがいた。しかも大護の首に腕を巻き付けている。

大護は顔を真っ赤にしてパニックになつてている。

フェルトが起きる。

フェルト『大護。おはよう・・・』

大護は今だパニック。そこにフェルトは顔を近づけ唇を重ねようとする。

大護『うわあ――――！』

そこを抜け出す。

ガンツ――！

勢い余つて壁に激突。フェルトは不満な顔をしている。

大護『な、なんでオレの布団にいるんだよ！？』

フェルト『・・・ダメ・・・だつたか・・・？』

いつも凜々しいフェルトが若干上目遣いで言つ。

大護

顔が茹蛸のように赤い。

大護『うわわ――――ん――――！――――！――――！』

そして、部屋を飛び出していった。

いつも遅く起きる十三隊の面々。

ガンガンガンガン――！

憐が変な音に気がつき。音の発信源をマリーとともに見ると。そこには大護が壁に頭を打ち付けていた。

大護『オレもうダメだ――――――！』

さらに打ち付ける大謹。

# マリー『大護！？』

惨《ちよ一》！なにが二てんの！？

惨か止める」としたが

大護<sup>△</sup> \* & §%○

嵐『どうしたつて！大護！？』

嵐と麗奈が起きてくる。

どうしたの  
影義

影義とアリカモ。

信  
と  
義

どこかに走つていつてしまつた大護。  
なるほど……そういう「トか……

新庄

214

大護《はあ～》

大きなため息をついていた。そこに

新庄《ご乱心のようだな。大戦の英雄さんつ》

新庄が何か飲み物を持つて来た。大護に缶を投げ渡す。

大護《何のよう?》

新庄《起きたらフェルトが隣にいたんだって?》

大護《なつ!?》

新庄《そななお前に1つ宿題をやろうー》

大護《宿題?》

新庄《お前にとつて、どんな敵を倒すより難しいな》

大護《?》

新庄《自分に素直になれ》

大護《えつ?》

新庄《お前にとつて一番難しいコトは自分に素直になるコトだ。お前はオレ達よりつらい過去がある。だからお前は自分に素直になれねえんだ》

大護

新庄《お前の“大護”つて名前の意味……。もう、わかってんじやねえか?》

大護《オレは……その……》

新庄《自分のキモチに素直になつてみ。それがお前の……》

何かを言いそなつたが

新庄《この続きを自分で考えろよ。先に戻つてからなー》

そう言つて寺に戻つていく新庄。

大護《自分に素直になる……か……か……》

寺に戻ると広間にフェルトがいた。

フェルト《今朝はゴメン……勝手に……あんなコトして……》

大護《それは良いんだ》

大護は深呼吸し

大護《なあ。ノアとの戦いが終わって、世界が本当に平和になつたらさあ・・・その・・・》

フェルト《なつたら?》

大護《オレと・・・

オレとずっと一緒にいてくれないか》

フェルト《え!?》

大護《オレさあ。馬鹿で鈍感だけど。お前が・・・。

フェルトのコトが好き・・・だから》

フェルトは顔を手で隠した。そして、大護に抱き着いた。

フェルト《私も大護が好きだよ・・・。だから、一緒にいよ!》

そして、

その時。大護が

「ハイ——飛ばしまーす!」

映像を飛ばした。

「ちよつと! ! いいとこなのに! !

はやで、スバルといった面々が抗議する。

「これ以上は見せられん! !

「いいやんけ! !

「良くない! !

2人が言い合う。

「大護・・・どうなつたの。ノアとの決戦は」

フェイントが聞く。

「あの日から2週間後にクリスタルが輝いた。

そして、次の日にオレ達はノア達のいる旧日本があつた海域の島の

古代都市“ルルイエ”にある“バブルの塔”に向かつた

ついに世界を賭けた最終決戦。堕神ログ・ダーナ率いるノア達と十  
三隊7人との最終決戦が始まる！！

第十一話 追憶の天使（大戦後編）（後書き）

過去編第九話が終わりついに最後のノア達の決戦！！  
たぶん、感動できます！

過去編全十話つて長すぎますよね・・・

第十一話 追憶の天使（最後決戦編）（前書き）

新年初投稿！！

長かった過去編がついに最終話！！

全体の約八割が戦闘シーンです！

どうぞ！！

## 第十一話 追憶の天使（最後決戦編）

「日本が決戦の場だつたの？」

フェイドが聞く。

「ああ。5年前の事件・・・通称“ワールドブレイク”って呼ばれているんだが、それ以来、日本の東京に人が作れない古代建造物やら都市ができたらしい。

それらは推定3000万年前のモノ。しかもそこに調査しに行つた調査隊は全滅。それ以来そこは『特S立入禁止地域』になつてな映像が映る。そこは滅びた文明があつた。木々はなく大地は枯れ、不毛の大地と化した東京。

「ひどい・・・」

「ルルイ工は凪さんが言つていた。3000万年前の三天使とダーナの決戦の場だつた。

そして、オレ達はセイントローズでルルイ工に向かつた

決戦前夜。

セイントローズには十三隊をメンバーに加えお頭までいる。総勢18人がいた。

いつものようにご飯を食べ酒を飲み寝た。

「なんであんなに普通なの？」

フェイトが聞く。

「さあ？」

大護は眠れなかつた。午後11時過ぎ。起きると隣にフェルトがいた。大護は酒ビンを持つて甲板に行くそこには

嵐<sup>まわな</sup>『なんだ。眠れないのか？』

夜風に当たり酒を飲んでいる嵐がいた。

大護<sup>まわな</sup>『嵐も眠れないのか？』

嵐

2人は黙つて酒を飲む。

大護『オレ達勝てるのかなあ・・・』

嵐『さあな・・・。正直わからん。でもなあ。オレ達は勝つて帰つて来なきやなんねえ。オレ達には大事な人がいるだろ』

大護<sup>まわな</sup>『

嵐『・・・お前変わつたよな。つくづく思うよ。オレねっから』  
そう言つて嵐は部屋に帰つた。

大護『大切な人か・・・』

部屋に帰つてみるとフェルトが待つていた。

大護『寝てなかつたのか？』

黙つて頷くフェルト。大護は隣に座る。

フェルト『・・・大護は怖くないの？』

大護『正直怖い・・・。明日なんて来てほしくないって思つてゐる』  
フェルトが抱き着く。

フェルト『もう嫌だよ・・・また帰つて来なくなるの・・・』

大護『大丈夫。心配するな。オレは絶対負けねえし、絶対帰つてく  
る』

フェルト『ホント?』

大護『ホントだ・・・約束する』

「とか言つても明日が来ちまつた」

旧日本関東地区。そこはかつて花の都と呼ばれていたが今はその力  
ケラもない死の世界が広がつていた。

セイントローズの前方には巨大な塔がある。

嵐『さて・・・準備は良いか?これがオレ達の最後の仕事になる』  
甲板にバブルの塔に突入する7人が集まつた。

嵐『オレ達が勝てばなんとかなる・・・負けければ破滅だ・・・。

でも、今はどうでもいい!やることは一つ!5年前の敵をとる口ト  
だ!!

それじゃあ・・・

いくぞ!-!』

7人が空へ飛び立つた。

バブルの塔。推定3000万年前の超古代建造物。

その中に7人が入る。

フィレス《待っていたよ！…さあ！風のクリスタルを渡してもらおうか！…》

前にいるのは風のノア“フィレス”。手には薙刀のような武器を持っている。

陵《ここは私が…皆は先に行つて…》

陵は華炎丸と華氷丸を解放する。

陵《風のクリスタルは私が持つて…返してほしければ私に勝つてからにしな…!》

間合いを詰め鍔せり合いに持ち込む。

その隙に他の6人は階段を上る。

約10階分上ると次の間にいたのは

シーラ《水のクリスタルを渡せ》

水のノア“シーラ”。

信《オレが引き受け…さつさと行け…》

嵐《わかつた！》

5人が階段を上る。

信《止めないのか？》

シーラ《目的はクリスタルのみ…貴様を殺す…！》

信《やつてみろ！…》

次の間にいるのは

シユダ《ほれみろお…！…あの2人じゃ無理だ…！》

円形の武器に炎を纏つて…いる男。火のノア“シユダ”

シーモンス《こつちはクリスタルがある。樂であろう…！…》

双剣を持つ雷のノア“シーモンス”

ジユネス《だが、ダーナは天使は渡せだと》

天のノア“ジユネス”が待ち構えていた。

影義《先に行け》

新庄『ここはオレ達でなんとかする！！』

2人が刀を抜く。

でも…

憐

新庄『でもじやねえ！…さつさと行け！！』

嵐『わかつた！』

3人が階段を上がっていく。

シユダ『なめてんのか？オレ達を？』

シーモンス『君達…死ぬよ…』

影義『お前らなんか…』

新庄『2人で十分だ！！』

40階の間にいたのは

口クサス『・・・勝負』

光のノア“口クサス”がいた。両手には鍵のような剣は持っている。

憐『ここはオレが！2人は早く！』

大護『わかつた！！』

2人が階段を上がっていく。

憐『それじゃあ…・・・いっちょやりますか！！』

ゼバス『待つっていたぞ…・・・天使の末裔！』

闇のノア“ゼバス”。手には魔剣テガロクスを携えている。

嵐『てめえの相手はオレだ！』

鬼神丸で無理矢理鎧ぜり合いに持ち込む。

嵐『お前はダーナを倒せ！さつさと行けえ！！』

大護『わかつた！！』

大護が階段を上がる。

ダーナ『行かせる…・・・』

嵐『おらあ！！』

ゼバスを壁に叩きつける。

ゼバス『柳瀬の前にてめえだな…・・・橋嵐！！』

ゼバスは闇のクリスタルを取り出す。

嵐《上等！！》

最上階には

ダーナ《待っていたよ・・・。天使》

無のノア“ログ・ダーナ”。

ダーナ《貴様らは理解していない。この世界は創世されるべき」と

に《

大護《確かにそうかもな・・・お前の言う通り、世界は創世されるべきなのかもしれない》

ダーナ《ならなぜ我らの邪魔をする！？貴様は元は我と同じ天界の者だろう？それがなぜ》

大護《確かにオレは大天使ラファエルと墮天使ルシフェルの血を引いている・・・

でもなあ！！オレは人間だ！人として生きるこの世界が好きなんだ！！》

ダーナ《やはり似ている・・・あの男に・・・。よからう・・・天使よ！！我が相手をしてくれる！！》

ダーナが無のクリスタルを自身の体に取り込んだ。

大護《天界十柱神“生と死の神”・・・。

限 界 突 破！！》

戦刀と雷龍丸を重ね新たに戦雷を生み出す。

ダーナは生と死の翼が生える。

ダーナ《無の彼方消し去ってくれる！！》

大護《墮神ダーナ！お前を倒す！！》

大護が間合いを詰めた。戦雷で斬り掛かる。ダーナはそれを避け

ダーナ《ロンド！》

生の翼から羽根が舞。スコールのように大護に襲い掛かる。

大護はそれを斬り落とす。そして、再び間合いを詰め一撃を決める。だが、ダーナが戦雷を掴み。

ダーナ『エンドレス！』

大護のいる空間に見えない攻撃が直撃する。

大護『ぐあああ！？』

かろうじてその空間から逃れる。

大護『雷天！！』

誰も感知することのできない神速の斬撃がダーナにヒットする。

ダーナ『やりおる・・・』

両者退かぬ一進一退の攻防を繰り返す。

大護が間合いを詰め

大護『龍天 月破！！』

至近距離で龍天月破を放つ。

ダーナ『甘いわ！ ログゼクス！』

死の翼の羽根が大護の体を切り刻む。

ダーナ『貴様はまだ覚醒すらしていないようだな。天使として！』

大護『ハア ハア ハア』

すでに体中傷だらけだ。

大護『ハアアアアア！！』

再び間合いを詰める。

ダーナ『愚かな・・・』

今度は生と死両方の羽根が大護を襲う。

大護『ぐあああああ！！』

吹き飛ばされ壁に激突する。

ダーナ『所詮人間ごときに我らは負けはせぬ』  
再び対峙する。

その頃。陵は風のクリスタルと同化したフィレスと戦っていた。  
陵の体は風に切り刻まれボロボロ。

フィレス『人間にしてはよくやる・・・だが、クリスタルと同化した我らには決して勝てぬ！！』

陵《そうかもね・・・勝てないかもしれない・・・でもね・・・昔言われたの。どんな時もあきらめない・・・それが真の強さだつて！！》

フィレス《そんなもの！ただのまやかし！！》

風を纏つたフィレスが襲い掛かる。

陵《剣は思いを導くためにある！！

神冥流《舞之型 風色》

二本の刀で風を斬つていく。

フィレス《馬鹿な！？私の風を斬つているというのか！？》

陵が構える。華炎丸からは金色の炎が、華氷丸からは七色の氷が

陵《ハル、玖音・・・いきます！！

神冥流《一剣奥義！ 虹龍一閃！！》

金色の炎と七色の氷の舞がフィレスに直撃した。

フィレス《そんな・・・》

粒子になつて消えていく。

陵<sup>やつた</sup>

そのまま倒れてしまった。

シーラ《あきらめよ・・・》

水のノア、シーラと対峙する信。信もすでにボロボロ。

信《生憎・・・あいつらに感化されすぎてあきらめが悪い性格なん  
でね》

白月を構え直す。

信《それに借りがあるからこんなところで死ぬわけにはいかない！！  
それに新しい命ぐらい見たいしな・・・》

シーラ《愚かな！！》

氷のつぶてが信を襲う。上に逃げ白月を空に繕す。

七ツの巨大な剣が現れた。

信《星に裁かれよ・・・》

七星剣！！』

剣がシーラに直撃する。いくら鉄壁の盾でもこれほどのダメージは

シーラ『馬鹿な・・・』

消えていく水のノア。

信『勝つたよ・・・葵ちゃん・・・』

影義と新庄は2対3と不利な状況ながらも戦つたいた。

新庄『さすがにノア3人はきついか・・・』

影義『こっちのおまけに天のノアがいるから火と雷の能力は倍増・・・』

2人は並びノア3人を見る。

シユダ『オラオラア！さつきまでの威勢はどうしたあ！？』

円形の武器を振り回す火のノア。

シーモンス『つまらない・・・』

双剣を持っている雷のノア。

新庄『・・・影義。雷はオレに任せろ。だから・・・』

新庄

影義『残りのノアはこっちでなんとかしくよ・・・』

新庄がシーモンスに突っ込んでいく。

シーモンス『いくら神獣と同化しているとはいえ！』

素手対双剣。あまりにも無謀だ。

新庄『おらあ！！』

獣戦拳で攻める。シーモンスはそれを防ぐ。

シーモンス『甘い・・・』

一瞬の隙をついて右の剣を新庄に突き出す。

新庄はそれを左腕で防いだ。剣が左腕を突き破る。血が流れる。

シーモンス『フ・・・これで左腕は・・・』

その時、新庄がシーモンスの右腕を掴んだ。

新庄《捕まえたあー・・・いくら早くてもこれで逃げられないよなあー》

すでに左の剣は粉碎されている。

シーモンス《貴様！このためだけに！！》

新庄は左腕に刺さっている剣を抜き。拳を握りしめる

新庄《腕一本でめえを倒せるなら良いもんだ・・・

獣戦拳 奥義 獅子王拳！！》

左の渾身の一撃がシーモンスに当たる。吹っ飛び壁に激突する。

新庄の左腕は血まみれになつた。

新庄《影義・・・あとは頼む》  
影義

銀龍を構え直す。

ジユネス《だが、2対1！お前の敗北を見えている！！》

ジユネスが槍で、シユダがチャクラムで襲い掛かる。

だが、影義はそれをいとも簡単に防御する。

シユダ《馬鹿な！？》

影義《宮木神冥流は守りの剣・・・そつやすやすとは破られるわけではない！！》

ジユネス《ふざけるな！人間ごときに！！》

槍で突く。影義はそれを防ぎ

影義《破魔 竜王神！！》

兄から最初に教わった攻撃の剣技。ジユネスが消え残りはシユダのみ  
シユダ《くそつたれがあ！！》

やみくもに襲い掛かるが影義の前では無意味。

距離を取り、花風楼刃と鳳仙花を抜き

影義《舞い散れ！花風楼刃！ 弾け散れ！鳳仙花！！》

桜の花びらの刃と鳳仙花の種がシユダに

シユダ《ぐおおおー！？》

さらに

影義《白虎！！玄武！！》

追撃をかける。左右からの攻撃。

影義《銀龍！！》

銀龍に魔力を混める。

シユダ《オレが・・・！人間ごときに負けるはずが・・・》

影義《奥義！！ 破魔 七倫閃！！》

兄、影虎が影義に見せた最後の技だった。

憐は口クサスと最後の攻防に入ろうとしていた。

憐《お前はなぜ戦う！！お前からは何も感じない！！それなのに！》  
口クサス《・・・お前はどうなんだ？ただ戦うために生み出された  
戦闘兵器“イクシオラ”的プロトタイプだろ？

人間が憎いお前がなぜ人間を助ける？》

憐《確かにオレは人間が憎かつた・・・でもオレには仲間がいる！  
大切な思い出をくれた仲間がいる！！

それにオレ達は世界のためなんかに戦うわけじゃない！！  
5年前の敵をとるために戦うんだ！！》

オーバーアローレイ・シユトロームを放つ体制に入る。

口クサス《・・・それが人間の答えか・・・良いだろう！！》

鍵のような剣“フェンリル”を構える。

憐《オーバーアローレイ・シユトローム！！》

連結された紅月丸と蒼月丸から弓状の波動が放たれる。

口クサス《ラストアルカナム！！》

フェンリルから無数の波動が  
爆発が興り、憐の頬には傷が

口クサス《見事だ・・・》

粒子となつて消え最後に光のクリスタルだけが残つた。

嵐《どうやら残つてんのはお前とダーナだけのようだな・・・》

嵐はゼバスと対峙している。

ゼバスは闇のクリスタルと同化し闇の翼を生やしている。

ゼバス『だが、貴様はどうだ？ボロボロではないか・・・闇は運命をも変える力。人間ごとに勝てる道理ではない！！』

テガロクスを嵐に向ける。

嵐は体中傷だらけだ。

嵐『確かに・・・このまま帰つたら麗奈と桜になんて言われるか・・・

あと勘違いするなよ、オレは生まれてから運命なんて信じたことがねえ！！』

ゼバス『何！？』

嵐『オレが信じてんのは自分の相棒と仲間と家族だけだ！！それにな！運命なんてあるならそれは自分の手で切り開くモノだ！！』

嵐は鬼神丸と天刀“天龍牙”の限界突破“滅龍鬼槍”をゼバスに向ける。

ゼバス『決着をつけてやる！！』

2人の空間が闇に覆われた。

ゼバス『オレの神名は“ガタノゾーラ”！！世界を包む闇だ！！貴様ごとき闇に葬つてくれる！！』

テガロクスに魔力が集中する。

嵐は滅龍鬼槍を両手持ちにし

嵐『我流水無月一閃槍術 終之型 奥義！！』

ゼバス『ダークネス！！』

嵐『神雷！！』

闇と琥珀色の魔力がぶつかり合つた。

ゼバス『オレが・・・』

嵐『運命だとか道理だとか・・・そんなもん戦いには関係ねえ・・・

勝つのは思ひが強い方・・・

それに運命なんてあるわけがねえ・・・

そうだろ？玖音》

かつて師匠だった“如月玖音”の名を呼ぶ。  
嵐はボロボロの体で階段を上がつて行った。

最上階では大護とダーナが死闘を繰り広げていた。

ダーナ『なかなかやりある・・・』

大護は再び突っ込む。

その時

フェルト『大護！！』

フェルトの声がした。

大護『フェルト！？』

その瞬間をダーナは見逃なかつた。

ダーナ『エンドレス！！』

フェルトの空間を無の攻撃が襲おうとした瞬間、大護が彼女を抱き  
しめそれから守つた。

大護『ぐああああああ！？』

長い1分間が終わる。

大護『なんで來たんだよ・・・』

フェルト『だつて・・・』涙目のフェルト。

ダーナ『2人揃つて無の彼方へ送つやるよ！！』

ダーナは残つた右手に無の力を混める。

大護『クソッ！！』

大護がダーナの元へ向かおうとしたとき

フェルトが後ろから抱きしめ。止めた。

フェルト『今行つたら・・・大護が二度と帰つて来なくなつちゃう・

・』

その言葉に大護は

大護『・・・覚えているか？オレ達が最初に会った日のこと・・・』

フェルト『え・・・？』

大護『オレが木の上でアイス食つてたらお前が『よこせ！』って言つてきて。アイスが食えなくなつちまつて・・・。それからだつたよな・・・』

・・・たぶんオレなあの日からお前のコトが好きだつたんだと思つんだ。

だから・・・だからさ・・・もうひとつだけ・・・そうしてくれねえか・・・』

大護の素直の言葉。新庄に言われた宿題を終えられた。

フェルト『・・・うん』

さらに強く抱きしめる。

その時、大護の背中から蒼い天使の翼が生えた。

たくましく、美しい翼。

フェルト『やつぱり天使なんだな・・・大護は』

大護『今はそれでも良いつて思つてるよ』

戦雷を両手でしつかり握る。

ダーナ『仕舞いにするぞ！天使！！』

両者最後の一撃。

ダーナ『メビウス・ゼロ！！』

無の一撃が放たれる。

大護『龍 天 月 破！！』

最大級の龍天月破を放つ。

蒼い波動と無の波動がぶつかり合つ。

ダーナ『ハアアアア！！』

ダーナの波動が押しあげはじめる。

大護『グウ・・・・』

それを押し切るつとする。

『あきらめるな！！大護！！』

『お前は1人じゃない！絶対勝て！！』

2人の兄の声がした。

大護『絶対に・・・あきらめるかあああ！！』

大護の波動が一段と大きくなる。

大護・フェルト『いけええええ！！！！！！』

戦雷を振り斬る。

蒼い波動が無の波動を押していく。

ダーナ『なぜ！？なぜだああ！？』

蒼い波動に塔の壁おも突き破りダーナを消し去つた。

大護が倒れ込む。限界突破が切れ元の戦刀と雷龍丸に戻る。

大護『勝つたのか・・・？』

実感がわかない。

フェルト『そうみたい・・・』

こちらも同じ。

嵐『大護――！』

階段を上つてきたのは嵐だつた。

大護『嵐？』

嵐『ダーナは！？』

大護『なんか倒しちゃつたみたい・・・』

苦笑いする。嵐は微笑む。

嵐『そうか・・・よくやつた・・・さて、戻るぞー』

その時塔が揺れた。

フェルト『塔が！？』

大護『ノアがいなくなつたからか・・・！？』

嵐『速いとこ脱出するぞ！？』

階段へ走ろうとした時嵐のフェルトの頭上から大きな岩が落ちてきた。

大護は2人の背中を押した。

そして、無情にも岩は階段への入り口を塞いだ。

嵐『大護――！！』

岩の向こうから声がする。

大護『早く脱出しき！』の塔は長くは持たない！』

フェルト『でも！』

大護『……心配すんな。絶対生きて帰る』

フェルト『大護！』

嵐『……わかつた……約束しろ！』

フェルト『嵐！？』

嵐『いくぞ！』

フェルト『大護！』

2人の声が遠くなっていく。

だが、フェルトの声だけはよく聞こえる。

大護

壁に寄り掛かり座り込む。戦刀と雷龍丸を鞘に仕舞う。まだフェルトの声が聞こえる。

天井はすでに半分は崩れ落ちている。

大護『あの頃と同じ星空か……』

父と母と自分。3人で見た星空を思い出す。

大護『もういいや……寝よ』

目を閉じた。闇にのまれていく。

フェルト

大護

大切な人の名を言つて。

「で、気がついたらあの森にいったってわけだ  
大護が画面からみんなを見ると全員泣いていた。

「・・・なんで泣いてんの！？」

「そりゃあ泣くよ・・・」

とフェイト。

「ふえええん！..はやてちやーん！..」

リインははやてと。

シグナムは顔を逸らしているがおそらく泣いているだろう。

「あのさ・・・見せといて言うのもなんだけど・・・そんなに泣かれると反応に困る」

と言うが

スバル、アルト、ルキノは勿論。ヴィータは大護に襲い掛かろうとしている。それを止めるティアナ。シャマル、なのはも泣いている。

カリムは涙をハンカチで拭いている。

「大護さんは・・・ヒック・・・辛くないんですか？」

1番泣いているキャロが聞く。

「そりゃあ辛いさ・・・早く帰りたいし、会えないのが1番辛い・・でもな、帰るためにやるコトは1つじやなくともいいってオレは思つてる」

「大護くんはお父さんに復讐するんか？」

はやてが聞く。

「いや・・・もう復讐なんてどうでもいい・・・。

オレはあの人を過去の憎しみから解放してやりたいんだ。

以上解散！..もう、夜遅いからさっさと寝ろ！..暇な時に笑えたり泣けたりできるモノは見せるから」

大護はそう言つてブリーフィングルームをあとにした。

その後。全員はあまり寝れなかつたらしい。

第十一話 追憶の天使（最後決戦編）（後書き）

おやりくしづらくは過去編の番外をやるかもしませんのでジョア承  
トセー！

## 第十二話 大護の厄日

大護が自分の過去を話してから翌日。

現在午前10時過ぎ

大護の目の前にはバリアジャケットを纏つた。なのは、フエイト、シグナム、ヴィータの4人がいる。

（なんでこんなコトになつたんだ・・・）

大護は今朝の出来事を振り返る。

朝練の前にスバルの姉ギンガが六課にやつて來た。

それからスバルとギンガが模擬戦をし、そのあとフォワードメンバーと隊長達が模擬戦をした。

そのあと朝食を食べ終えた大護がはやてからもらつた資料を見ているとそれはやてが練習場まで來てくれと言つたから行つてみたらこの様子。

「はやて・・・この状況はなんだ？」

「いやあな。昨日大護の過去見たらシグナムがな『大護の本気と戦いたい!』って言い出してなあ。

せつかくやし、うちも大護の本気見てみたいし」

黒い笑顔のはやて。

「・・・あの3人はそれに便乗したと・・・」

「そう」

「はやて・・・オレに死刑宣告をしたのか?しかもギャラリーが増えてるし!..」

いつまにか六課の前線メンバーに加えかなりのギャラリーが集まっている。

「いやあ~おもしろいコトやるつて言つたからな~」

再び黒い笑顔のはやて。

「この・・・タヌキが・・・」

それは、はやてが大護を逃がさないための罠だつた。  
おまけにフォワードの4人とギンガは目を輝かせている。  
「まさか、あの子達の期待を裏切るわけないやんう?..」  
はやてが追い撃ちをかける。

「ハア~わかつたわかつた!..やりますよ!..」

と至る。

とりあえず大護もバリアジャケットを着たがやる気が出ない。

「じゃあ・・・はじめ!..」

はやての声で模擬戦が始まつた。

「プラズマランサー!..

「アクセルシユータ!..

黄色小さな槍と桃色の球体が大護を襲う。

「しょっぱなから面倒なコトすんなよ!..」

空へ避けるがなのはの放つたアクセルシユータが追尾する。

「誘導型か・・・」

大護は止まり向かつて来る球体を舞うように避ける。10個の球が相打ち爆散する。

大護はまた上空へ

「ダアアアア!..」

そこにはグラーフアイゼンを振り下ろそうとしているヴィータがい

た。

大護はそれを大刀“戦刀”で防ぐ。

「くつ・・・！」

さらに

「ハアアアアア！！」

シグナムが襲い掛かる。

大護はヴィータを受け流し戦刀を仕舞い雷龍丸を抜く。シグナムが攻める。大護は防戦。

「すごい・・・フェイトさん達の攻撃を防いでいる・・・」

ギンガが興奮する。

「でもね、ギン姉。大護さん・・・まだ本気じやないんだよ」

スバルが説明する。

「えつ？」

「確かになあ！まだ本気の『ほ』の字も出してせえへんし」

はやてが言う。

「大護！なぜ本気で戦わん！？我らを愚弄する気か！！」

そう、大護は明らかに本気で戦つていない。

「・・・わかつた・・・しようがない・・・」

大護はシグナムを押し出し、後ろに大きく飛んだ。

「そこまで言うなら・・・見せてやるよ・・・

限界突破を」

戦刀を解放し雷龍丸と重ねる。蒼い魔力が大護を包む。

「限 界 突 破！！」

一本の刀が一つになる。蒼い粒子を撒き散らし現れたのは

「戦雷！」

右手に白い長刀“戦雷”を持つた柳瀬大護だった。

なんなの・・・」の空氣

フェイトがなのはに念話する。

そこに居るけどいないみたいな・・・  
まるで空氣そのものになつていてるみたい・・・

これが大護くんの本氣・・・限界突破

その時、大護が4人の視界から消えた。なんの前触れもなく

「えっ！？」

「なっ！？」

完全に消えた。気配すらない。

「まだまだ甘いな・・・」

後ろから声がした。振り返ると大護がいた。

（早過ぎる・・・！人間の速さじゃない！）

なのはが考えていると

「これなんなんだ？」

大護の左手に4人の見覚えのある黄色リボンがあつた。

それと同時にシグナムのポニーテールにしている髪がほどける。  
（気がつけなかつた・・・！あんなに接近していたのに・・・）

「返すよ」

再び消えたと思つたらシグナムの目の前にいた。  
黄色リボンを渡す。再び同じ場所に戻る。

シグナムが髪を結び終える。

「じゃあ・・・始めるか」

大護は構えない。

（構えてないのに隙がない・・・）

「こつちも本氣でいくよ！――」

なのはが言つ。

「アイゼン！カートリッジロード！」

「ギガントフォーム！！」

グラーフアイゼンが巨大な鎧になる。

「レヴァンティン！」

「ボーケンフォーム！」

レヴァンティンの鞘と刀身が連結し『』になる。

「本氣でいく！！バルディッシュ！フルドライブ！！」

「ザンバーフォーム！」

バルディッシュが二本の剣になる。

「レイジングハート！いくよ！」

「エクシードフォーム！」

レイジングハートの先が槍のようになる。

（本氣・・・か・・・）

「良いぜ！かかってきな！」

大護が言つ。

「いくぞ！！」

シグナムが矢を連射する。

大護はそれを

「おりやあ！」

高速の剣技で打ち落とす。そして、接近戦に持ち込む。シグナムはレヴァンティンを剣に戻し応戦する。

「紫電・・・」

レヴァンティンに炎が纏う。

「蒼龍・・・」

戦雷に雷が

「一閃！」

「破斬！」

出力に差があり過ぎた。

シグナムが吹き飛ばされる。そして、ビルに激突した。

「シグナム！？このお！！」

ヴィータがグラーフアイゼンを大護に叩きつける。

だが、大護はそれを左腕一本で防いだ。

「この程度か？」

「なつ！？このおー！」

再びグラーフアイゼンを振りかぶるが

「確かに重い一撃だ・・・でも、そんなにモーションが長いんじゃ

あ・・・」

アイゼンの柄を掴みヴィータ叩き蹴る。

「残り2人！」

「すごい！副隊長達を一瞬で・・・！」

ギンガが興奮している。

「大護さん。まだ一撃も喰らってませんね・・・」

エリオが言う。

確かに大護はまだ一撃も攻撃を受けてない。

「なのはとフェイトは？」

その瞬間左右から

「エクセリオン・・・バスター！-！」

「トライデント・・・スマッシュヤー！-！」

なのはからは桃色の魔力砲撃。フェイトからは金色の三つ又の砲撃が大護は急上昇し避ける。

「ハアアアア！」

高速攻撃を仕掛けるフェイト。2つの剣は赤い紐で繋がっている。

（速い・・・）

斬撃を避ける。

「でも・・・追いつけない速度じゃない！！！」

大護も加速しフェイントとヒットアンドアウェー対決になる。金色と蒼い軌跡が交差する。

（大護の方が速い・・・！）

そう感じたフェイントは

「バルディッシュ！」

速度をさらに上げる。

「そう来るなら！」

大護も速度を上げる。

フェイントと並び攻防。

「速いな・・・実力は隊長格並だが・・・オレの方がもつと速い！！」

大護がフェイントの視界から消えた。

「うそつ・・・！」

武器越しにダメージが加わる。

「終わりだ！」

戦雷に魔力が集まる。

「蒼雷斬！」

雷速の一撃がフェイントに直撃しフェイントが吹っ飛ぶ。

「ヤベッ・・・やりすぎた？

それよりなのは・・・」

何かを感じ上を見ると、桃色の魔力が集束している。

「いくよ！大護くん！！！」

発射体制のなのは。

「おいおい・・・マジかよ」

「全力全開！！

スタートライト・・・ブレイカー――――！

最大の魔力砲撃が放たれる。

大護は戦雷を両手で持ち。

「龍 天 月 破！！」

白い斬撃を放つ。

2つの魔力がぶつかり爆散する。大護はその瞬間を見逃さなかつた。爆発した刹那高速でなのはに間合いを詰め

「ゲームオーバーだ・・・」

戦雷をなのはの喉元に突き付けた。

模擬戦終了後。大護に挑んだ隊長陣はかなり落ち込んでいた。

「あのさあ・・・そんなに落ち込まれるとオレ悪人みたいじやん！」

「あたしとグラーフアイゼンの一撃が片手で受け止められた・・・とヴィータ。

「こちらは一撃で吹き飛ばされた・・・」

とシグナム。

「スピードだけが取り柄なのに大護の速さについていけなかつた・・・」

とフェイト。

「私の最高の攻撃を簡単に相殺された・・・」

となのは。

「あゝあ。大護くんやつてしまつたなあ～」

他人事のはやて。

「なんでだよ！本気でやつてくれつて言つたのこいつらだぞ！」

「それでもやりすぎよ」

「あれでも一様手加減はしたんだぞ」

その一言が4人をさらに落ち込ませた。

「大護さんすごい！」

さつきからそれしか言つてないギンガ。それを見たスバルが  
「ギン姉つて大護さんに一日惚れしたの？」

「なつ何言つてんの！？」

顔が真つ赤になるギンガ。

「好きなんですね」

ティアナが追い打ちをかける。

「だつて・・・不良みたいだけど、優しくてカッコイイし・・・歳  
だつて私とそんな違わないでしょ？」

「ティア。大護さんつて22歳だよね？」

「そうね。あと結婚してるらしいですよ」

ティアナの発言にギンガを固まつた。

「それつて本当？」

「だつたら聞いてみれば？」

スバルの提案にギンガは即行大護達の元へ向かつた。

大護は5人と話して(?)いる時

「大護さん！」

ギンガがやつて来た。

「ギンガ。どないしたん？」

はやでが聞く。

「大護さんつて何歳なんですか？」

いきなり質問する。

「オレ? 22歳だけど」

「さつき聞いたんですけど・・・結婚なさつているんですか？」

恐る恐る聞く。

「結婚つていうか・・・婚姻関係にある。だから、早く自分の世界  
に帰りたいんだ」

「そ、うなんですか・・・」

トボトボ戻つていぐ、ギンガ。

「オレなんか悪いコト言つた？」

やはりこの男“天然”

「女心を理解しゆうせんする」とは、

二二二

「なつ！？それはなのは先だよ！」

なぜかのはを巻き込む。

「いや。なのはは恋人みたいな奴いたじゃん」

「えっ！？」

なのはの顔が真っ赤になる。

一 ほら、ホテルアダ

「2人とも」

押してはいけない

見てたの？」

卷之三

圖書館の新刊書の陳列室へ入った時、

四  
一  
九  
。

## 大護のトラウマの扉が開き

「悪魔がでた―――！食べら―――れ―――る―――！」

その場を全速力で離脱した。

「大護くんつてホントに世界救つたんかなあ・・・」

疑問を浮かべるはやてと隊長4人がいた。

（模擬戦後）

大護達は昼食を食べていた。

大護はカツ丼、天丼、親子丼の丼三点セットを食べていた。

「やつぱ丼」

かなりご機嫌な様子。その時はやでが

「大護。限界突破になんか悪いコトないんか？」

と聞いた。

「負荷のコトか？ないよ」

「ないの！？あんなに強くなるのに」

「うん。限界突破を使えたのはオレ合わせて3人しかいなかつたから」

「3人？」

フェイトが聞く。

「オレと嵐と先代の一番隊隊長の如月玖音だけ」

「へえ」。で負荷は？

「ない」

きつぱり言つた。

「ないつていうかわからないだけやない？」

はやでが言う。

「じゃあ属性は？こっちでいう電気と氷結みたいな」

なのはが聞く。

「9つある。クリスタルと同じで」

「そうなると・・・火、水、風、土、雷と光と・・・」

はやてが考える。

「闇と無と・・・あとは・・・」  
フェイトが付け足す。

「天。その9つ」

「大護の属性はなんだ?」

ヴィータが聞く。

「オレは雷と火の一色だけ」

「一色? なんで?」

フェイトが聞く。

「昔かつらそんなんだ。属性は色で数える」

「へえ~光じゃないんだ」

「基本的に光、闇、無と天は少ない。たいていは最初に言った五色  
が基本。あとの四色は特異体质とかでもねえ限りそうはない」  
と説明する。

「じゃあ、十二隊の隊長格は?」

なのはが聞く。

「雷はオレと大介とリーダー。」

火は新庄さんと陵。でも陵は水との混色。

風は茜那と孤門と影義。

土はいなかつた。

天は嵐。

無は姫矢さん。

光は憐、信、信兄の3人。闇はいない。

こんなもんか

「能力はどうなん?」

はやてが聞く。

「基本の五色はその能力を操る。例えばオレだつたら雷ね。」

光はサッパリわからん。たぶん、己の力を最大限に引き出す能力。

で、天がかなり特別でな。五色の力のバランスを保ちながら高め会う能力

「どういう意味？」

ほとんどがわかつていいない様子。

「つまり、嵐は五色の力をフルに使える。まつ、だからあんなに反則氣味なんだよね」大護は苦笑いしていた。他もそれには納得している。

「じゃあ大護は雷と火を使えるってコト？」

フェイドが聞く。

「それは違う。オレは元々雷の単色だ。火は戦刀の一<sub>二</sub>段解放の力の時だけ。

つーか、一色混合なんて陵ぐらいしかいない

「へえ、他には？」

と大護はそれから1時間質問攻めにあつていた。

（？？？）

「その昔。

天使は地上に5つの理を置く

そして、その均衡のためにさらに4つの理を創つたすなわち、それが創世の力

（

神威はソファーに座りながら言った。

「それはなんなのですか？」

トーレが聞く。

「世界の創世の詩。

でも、そのあと“理の天使”がそれらを結晶にしたってお話  
「続きは？」

セインが聞く。

「墮神現れ世界は終焉へ

そこに三人の天使と一人の戦士あらわる

で、世界は平和になりましたって話」

「へえ～その天使の1人が神威さんでしょ」

「ああ・・・

だから、オレはあいつを倒さなければならない」

神威は一本の愛刀。空刀“虚空”と十鉄を見ていた。

## 第十五話 護るモノ

翌日

今日は六課には人がほとんどいない。特に前線メンバーは大護とははしきいない。

理由は簡単。副隊長達は外回り。ライトニング分隊は先日の戦闘地域の調査。ティアナはその手伝い。スバルとギンガは健康診断。つまり、今現在六課で戦闘可能なのは大護となのは、はやてとザフイーラ、シャマルの5人のみ。

すでに夕暮れ。大護は木の上でそれを見ていた。

「なあにやつてんの？」

声がしたから下を見る。木の下にはなのはとヴィヴィオがいた。

「何つて・・・木登り」

「そういえば、大護くんつて高いところによくいるよね」

大護は木から降りる。

「ガキの頃から高いところは好きなんだよ。だから」と言つて草村に寝転ぶ。

「なんで？」

ヴィヴィオが聞く。

「空見るのが好きだからな。青空にしろ星空にしろな」

「なんだ」

なのはとヴィヴィオが大護の隣に座る。

風の音だけが聞こえる。

「・・・寂しくないの？」

なのはが聞く。

「何が？」

「ほら・・・フェルトさんとかの『ト』とかで・・・」

「そりやあ寂しいし早く会いたいって思つてる・・・でも、前に言つたら? 帰るためにやることは一つだけじゃなくても良いってそれには強いから大丈夫だつて信じてるからな」

「そりなんだ・・・」

「さて。そろそろ飯の時間だな・・・」

立ち上がって歩き出した。

食事が終わり大護は食堂でボーッとしていた。  
それをヴィヴィオがジーッと見ている。

「どうした?」

大護が目線を合わせる。

「・・・パパ?」

「・・・へつ?」

かなり素つ頓狂な声を出す。

「ヴィヴィオ? 今なんて言つた・・・?」

「パパ」

即答される。

「そう言われてもなあ・・・立場的にそれはまずいような・・・」

大護が言おうとすると

ヴィヴィオが泣きそうになつてゐる。

「・・・わかつた。パパで良いよ

大護は優しく頭を撫でた。

(「の子にはオレと同じ道は歩いて欲しくない・・・護つてみせる・

・・・この名にかけて!!」)

強く誓つた。

それをなのはとはやてはずつと見ていた。

「やっぱり大護くんは優しいんだね・・・」

「そうやねえ・・・あのお母さんの血を引いているからなあ？それとも仲間のおかげかなあ？」

ちょっと時期がおかしいですが気にしないで下さい。

なのはとティアナが仲直りしてから1週間後。

大護は六課の任務のためなのは達の出身地 地球の海鳴市に来ていた。

「はあ・・・せっかくゆっくり寝れると考えてたのに・・・」

大護は黒のTシャツに少しダボダボの長ズボンを履き町を歩いていた。

「やつことねえし・・・ 所持金を4000・・・

サーチャーをセットしている間はかなり暇な大護。

「酒2本ぐらいなら買えるか」

近くのスーパーに入り酒類を見る。値段と量、質を見て日本酒と焼酎それぞれ1本ずつ買い店を出ると

「良いだろ姉ちゃん。俺達と遊ぶの」

どう見てもヤクザの男3人組がウェーブのかかった紫色の少女に絡んでいた。

「こ、困ります！今知り合いを待つていて・・・」

その場を去ろうとしているが男3人では分が悪い

（やれやれ・・・）

大護はそこに近づき

「待つた？」

少女を抱き寄せた。

「え？」

顔を赤める少女。

「話合わせて」

小声で言つ。

「おめえ誰だ？」

「この子の待ち人。オッサン達邪魔だからどつか行け  
シツシツとあつちいけど手を振る。

「てめえ！この方を誰と見る！？鍋島組の次期組長の鍋島元義さん  
だぞ！」

「だから興味ねえって

「んだとおーー！」

懐からナイフを取り出し襲い掛かる鍋島。

「五月蠅い」

大護は右足を高く上げ鍋島の顔面にぶつけた。

「あぶつ」

倒れる。

「元義さん！？てめえ！！！」

次に大柄な男が襲い掛かる。

「だから五月蠅いって」

今度は男の大事なところを蹴り上げた。

「£ % # # \* @ & ! ?」

股を押さえ込み倒れる男。

「アニキ！？」

最後の男が懐から何かを取り出そうとする。それがなんだか大護は  
わかつていた。

「こんなトコでそれやつたらただじやすまないよ」

大護は脅す。

「う・・・」

怯む男。

「とつととそいつら連れて帰れ」

男達はすぐに行つた。

「大丈夫？」

大護は少女から離れる。

「は、ハイ・・・。ありがとうございます・・・」

「どういたしまして。じゃあオレはこれで・・・」

大護が角を曲がる。

「あの！？」

少女が追うとそこに大護の姿はなかつた。

「すずかー！」

彼女の本当の待ち人である金髪の少女が来た。

「カツコイイ・・・」

少女はそう言つた。

大護がビルの屋上に飛び乗るとバリアジャケット用のデバイスに連絡が入り

大護くん。何かあつた？

なのはから通信が入つた。

「いや。何もない。つーかどうした？急に連絡入れて」

今、実家の喫茶店にいる。スバル達もいるからどうかなつて  
「そつか。じゃあそつちに行く。場所は？」

地図送るから

デバイスに地図が送られる。

「翠屋か・・・」

大護は雷龍丸の入つている竹刀袋を戦刀のよつに背負いなのはが送つてくれた地図を頼りに町を歩き始めた。

ちなみに戦刀は目立つし危ないから六課の隊舎に置いてきている。  
(ないと落ち着かない・・・)

そう思いながら大護は町を歩いていた。

10分程歩くと目的地の翠屋が見えた。

「ここか・・・とりあえず入るか」

店に入ると

「あつ！大護くん！」

イスに座り休憩しているのは、スバル、ティアナと人間サイズの  
リインがいた。

「待つたか？」

「ううん。私達もついさっき来たばつかだし」

「そうか。なのはの実家が喫茶店とはなあ！」

周りを見渡す。

「あら。こちらの男の人は？」

奥からなのはにそつくりな女性がやって来た。

「お母さん。」

その言葉に大護は

（若すぎねえか・・・）

と考えていた。さらにその奥から

「おや？ 1人増えてるね。なのは、父さんにも紹介してくれないか」  
（なのはの両親・・・若すぎだろ・・・。オレの両親も人のコト言  
えねえけど・・・）

と考えていた。

「うん。こちら仕事の手伝いをしてもらつてる柳瀬 大護さん」

「はじめまして。娘さんにはいつもお世話になつています」

大護が軽く頭を下げる。

「なのはの母の高町 桃子よ」

「高町 士郎だ。礼儀が良いな」

2人と握手をする。イスに座り出された「コーヒー」を飲む。ほんのり

苦いがおいしい。

「でも知らなかつたわ。なのはがこんなカッコイイ人と知り合つ  
ていたなんて」

桃子がなのはをからかつて？ いる。

「お母さん！ 大護くんとはそんなんじや「ないの？」 「ないの！-！」  
(姉妹にしか見えない・・・)

「大護くん！ なのはに手を出したら承知しないぞ！ ！」

士郎が言つ。

「大丈夫ですよ。出しませんから」

「なんと！ 内のなのはに魅力がないと言つのかね！ ？」

「いや・・・そういうわけじゃ」

どう転んでもヤバイ展開になる。

「ゴンッ！」

突然、桃子がフライパンで士郎の頭を叩いた。

「ごめんなさいね～」

士郎を引きずりながら奥へ戻る桃子。

「・・・親子は似る。つてか」

そんなコトを考えていると店のベルが鳴り1人の男性が入つて來た。

「なんだ。賑やかだな」

「あっ！ 恭ちゃん！」

なのはの姉、美由紀が言つ。

「お兄ちゃん」

なのはも続く。

（・・・なのはの兄さんか）

「高町 恭也だ。よろしく」

「柳瀬大護。こちらこそ」

握手をする2人。

（（強い）・・・）

2人はそう思つていた。

大護は桃子と美由紀から質問攻めにあつていた。

すると恭也は全員に気づかれないようになんとペンを取り出しそれを大護の頭の上に投げた。

気づく様子のない大護。

（勘違いだつたか・・・？）

恭也が考えていると大護はペンを無駄な動きをすることなく取つた。

「ハイ。これ投げたでしょ？」

大護は恭也にペンを差し出した。

「どうして俺だと？」

「人は何かをする時、何かしらするからな。で、用件は？」

大護は見抜いていた。

「そうか。なら君と勝負したい」

「お兄ちゃん！？」

なのはが驚く。

「良いぜ。受けて立つ！」

大護達はなのはの実家にある道場にいた。

大護は一本の木刀を右手は普通に持ち、左手の逆手持ちの変則的な

二刀流。

恭也は短めの木刀を握り構えている。

「奇妙な構えだな」

恭也が言つ。

「流派 空風流天龍剣 一二対一刀之型。

四つある構えの内の一つだ」

大護は左手を前に出した半身の構え。

「始め……」

士郎の掛け声とともに恭也は飛びだし大護の急所を狙う。大護はそれを紙一重で避ける。恭也はさらに連續攻撃を仕掛ける。

大護は後ろに大きく飛び距離をとる。

「今度はこっちの番！」

今度は大護が飛びだす。一本の木刀を器用に操り恭也を翻弄する。鍔(つば)せり合いになり大護は大きく飛びぶ。

「龍槌閃！」

右手の木刀を恭也の脳天目掛け振る。恭也はそれを後ろに避ける。着地した大護は

「まだだ！龍昇閃！」

今度は左手に逆手に持つた木刀を足のバネで恭也の顎を狙う。しかし、またしても避けられる。

「やるね」

恭也が褒める。

「この二連撃を避けられたのは久しぶりだ・・・」

「・・・時間がない。そろそろ決着を着けよう」

「OK」

大護は一本の木刀を居合斬りのよう構える。

「ハアアアアア！？」

なんと居合斬りのまま恭也との間合いを詰めた。

（居合は一撃必殺・・・最初の一撃を避ければ・・・！）

恭也に高速の剣技が襲う。

恭也は最初の一撃を避けたかに思い木刀を大護に振つたが左手の木刀に防がれた。

「なにつ！？」

「双龍閃 雷！？」

避けたはずの右手の木刀が恭也の喉元に当たられた。

「勝負あり！？」

「ふーつ！良い勝負だった」

大護は恭也と握手する。

「まさか一段抜刀術とは・・・考えもしなかったよ

「」いつもあの二連撃を避けられるとは

そのしばらく後フェイト達が来て一行は仮の本部にやつて來た。

湖畔の「テージにつくとはやてが鉄板焼きをやつていた。

「へえ」はやて料理できんだ」

大護が感心する。

「まあね。大護は料理できんか?」

はやてが聞く。大護ははやての横に付き別な炒め物をする。

「大護くん! ? 休憩してていいのに」

「オレは料理はできるタイプだし。それに『働く者食うべからず』だろ」

と手慣れた手つきで肉と野菜を炒める。

「そうなんか。どんな組織やつたん? 大護のいた十三隊つて組織は「みんな訛ありの存在だったけどオレの兄さんと姉さん的な存在の人がいたトコだつた。毎日のよつに馬鹿騒ぎしてた」

「なんか楽しそうやね」

などと話していると

2人の少女がやつて來た。

「あなたは・・・」

紫色の髪の少女が大護を見て驚く。

「ん? あんたは・・・」

「あの時はありがとうございます! !」

突然少女が頭を下げた。

「大護くん。何やつたの?」

はやてが聞く。

「さつき街中歩いてた時ヤクザに絡まれてたのを助けただけなんだけど

ちょっと困惑している大護。

「あなたがすずかを助けたの?」

隣の金髪の少女が言つ。

「うん。はじめて。月村 すずかって言います」

すずかが自己紹介する。

「ああ。柳瀬 大護だ。とりあえず名前で読んでくれ」

大護が笑顔で言う。

「アリサ・バニングスよ。よろしく」

アリサも自己紹介をする。

「大護くん。うち、ちょっと材料取つて来るから」と言つてはやては大護が言つ。

「手伝いますね」

すずかが大護の隣に来て肉を炒める。

「うまいね」

「いえ。柳瀬さんこそ」

「オレは自炊してたからな。それより名前で呼んでくれ。名字で呼ばれるのは苦手だし。オレもすずかって呼ぶから」

「ハイ。大護」

すずかは肉を炒めながらなのは達を見ていた。アリサも同じく

「・・・心配か？あいつらが」

2人は黙つて頷いた。

「危険な仕事してるつて・・・時空管理局で・・・たまに来るメー ルとかで聞いているの」

アリサが言う。

（空気が重い・・・）

「あいつらなら大丈夫だ」

大護が言つた。

「・・・なんで言い切れるんですか？なのはちゃんは昔大怪我して・

・・・怖いんです・・・大切な友達がいなくなるのは・・・！」

俯くすずか。目からは涙があつた。アリサは同じような顔をしてい る。

「・・・確かに大切な人を失うのは怖い・・・。実際にオレも経験 したからな。

5年前にある人から『人つてのは大切な人がいる限りその命を散ら すコトはない』って言われたコトがある』

2人は大護の顔を見る。

「あいつらには大切な仲間、帰る場所、他にもいろいろ持つてゐる。だから、あいつらは君達を置いていなくなる口吐はない。それに、あいつらはそう簡単にくたばる連中じゃない。それはオレが保証する。」

だから、あいつらが帰つて来たら笑つてやればいい。」

「そうだね・・・ありがとう。大護」

アリサが言った。

「元気が出ました！」

すずかも続く。

「そつか。じゃあ料理を運ぶか」

それから夕食を終え一行は市内のスーパー銭湯に向かつた。  
銭湯に入ると

「ホツ 良かつた。男女別だ・・・」

エリオが安堵していた。

「何言つてンの。当たり前だろそんなん」

大護が言つ。

「広いお風呂だつて！樂しみだね！エリオくん！」

キヤロが言つ。

「そうだね。スバルさん達と樂しんで来てね」

「えー？ エリオくんは？」

悲しそうなキヤロ。

「いや・・・僕は男の子だし・・・」

「でも、ほりつ！」

キヤロが注意書きを指差す。

「何々・・・『男児の女湯への入浴は11歳以下の女の子のみでお

願いします』

だつて

大護が読む。

「フフッ。エリオくん10歳！」

「えつ！？あつ・・・いや」

墓穴を掘つた哀れな少年。

「せつかくだし一緒に入るつか」

そこでまさかのフェイトからの援護射撃。

「あ・・い、いや。それでもスバルさんとかアリサさん達もいるわけですし」

必死に抵抗してるエリオ

「私は別にいいわよ」

「てゆーか。前から頭洗つてあげようかつて言つてるじゃん」

ティアナとスバルからあつさり許可が降りる。

「わたしらも別にいいわよね？」

「うん」

「いいじやない？仲良く入れば」

アリサ、すずか、なのはからもOKが出る。

「私も久しぶりにエリオとお風呂入りたいなあ～」

フェイトから留めの言葉。

「だ、大護さーーーん！！！」

大護に泣きながら助けを求める。

「・・・ガンバッテ大人になつてこい。はつきり言つてうらやましいぞ。大人になつたら見たいもん見れなくなるから」

男の正論をエリオに言う。

「うわーーーん！！！」

猛ダッシュで男湯に消えた少年。

「さて。オレもゆつくりして来るか」

大護もピアスを取りながら男湯に入つていった。

大護はエリオの隣で服を脱いでいた。

「たくつ・・・女湯に入るつて子供の時の特権だぞ」「そう言われても・・・」

「そんなどとキヤロに愛想つかれるぞ」  
「キヤロとほそんなんじや・・・」

## エリオが言葉に詰まる。

「子供の頃の恋ってのは実るわ。何年かあとで」「大襲あらぬがうはうどすら?」

「まあな。これ秘密な」

大護がTシャツを脱ぐ。上半身には無数の傷痕があつた。

「黙べば、處の、一、もじやは、一ば

「いえ！なんか・・・すごいなあつて・・・」

傷なんて一けんせんじゃねえぞ

くれる。それだけは忘れるな

「はい」

逝事を語る二、二

「エリオケ――ん！――！」

声がした。  
2人はその声の主を見る。体をタオルで隠したギャロが

卷之三

完璧。パニッケに陥ったエリオ。

— ハリオ、マジで頑張れ!

エリオの肩を叩き風呂に消えていく大護。  
(キヤッ。恐るべ)・・・

(キヤロ。恐るべし……)

湯舟に浸かっている大護。エリオとキャロは子供用露天風呂にいる。

「・・・オレとフェルトみたいだな」

大護は立ち上がり露天風呂へ向かつた。その時扉に『混浴』と書かれた紙に気がついてなかつた。

一方女湯。

「大護とはどんな関係なの！？」

アリサとすずかがなのは、フェイト、はやてに問い合わせていた。

「な、なにもないってばあ～」

「そうだよ」

「なにもない」

なのは、フェイト、はやては否定していた。

「そうかな？ 大護さんってかなりカツコイイ良いし。3人ともさつきずつと見てたよね？」

とすずか。

「それは・・・」

「確かにカツコイイ良いけど・・・」

「なんか、うちらに興味がないっていうか・・・」

そう3人の言う通り。大護は美少女3人、いや六課の女性メンバーに囮まれても顔色一つ変えない。

「それって・・・」

「天然？」

2人が答えに行き着く。

「たぶん」

「ちょっとウチ露天風呂に行つて来るね」

はやては湯舟から上がり露天風呂に向かつた。その時気がついてな

かつた『混浴』と書かれた紙に

## 露天風呂。

「あー……風呂サイゴー」

大護は誰もいない湯舟に流されていた。

一〇四

なにかが大護の頭に当たつた。

• • • • •

— . . . . .

黒毛のノ

はやこの秋葉が七葉

はやでの鉄拳が大謹は直撃した

數分後。

「コメント下さい」

大謹に謝ってました

「おおきなシルエット」

「ナニヤウモト」

大護は岩に寄り掛かつてゐる。

「キズ……すごいね」

はやては大護の体を見ていた。大護の体にある傷はほとんどが刃に

## よこて転られた傷

「なんかつちらより戦つてきたんやな」

「そういうはやてもイロイロあつたんだな？」

「まあね・・・

聞いてくれる？ウチの昔話」

「そつ言つてはやはては10年前にここ海鳴市で起きた『闇の書事件』について話した。

「そつか・・・なんでオレに話したんだ？」

「大護くんには話そつと思つてな。仲間やし」

「そつか・・・はやはて。1人でなんか溜め込んでたり、引きずつてたりするとそのうち辛くなるぞ」

大護ははやての眼を見た。

「別にウチ引きずつてなんか　　「だつたらなんで泣きそつなんだ？」

「え？」

大護は見抜いていた。はやはてがイロイロ引きずつているのを

「う、うそ・・・」

動搖するはやて。

「オレははやてみたいな奴といたからそれくらいは分かる。はやて。泣きたい時に泣いても良いんだぞ・・・」

「で、でも・・・」

「今ならオレしかいない。オレの口はカタイから」と言つてはやてを抱きしめ、頭を撫でた。

「元氣のでおまじない」

「う、う・・・うあああ！・・・リンフォースを・・・助け・・・られなく・・・て・・・辛くて・・・悲しくて・・・」

はやては大護に抱き着き泣いた。

「辛かつたんだな・・・大丈夫だ。オレが一緒にいてやつから」

「うああああああああああああ！・・・！」

ずっと溜まっていたモノがはやてから溢れ出した。大護はそれから10分間はやての頭を優しく撫でていた。かつて、自分にやつてく

れたあの人のように

「も、もう、ええよ・・・」

はやては大護から離れた。

「そつか・・・

じやあ。1つ良いこと教えてやろう。

人はな、大切な人や仲間がいるとその仲間とかといつでも会える」「どういう意味や？」

「オレは人のそばにいる“死者の魂”を見るコトができる。はやての側にはお前の両親とその初代リインフォースがいる」

「えつ！？」

大護は冗談を言つていない。

「で、リインフォースが『ゴメンね。でも、ありがとう』 だつて」

それは大護が聞いた彼女の言葉。

「だから、無理しなくていい。オレはそう思う」

大護はそう言つて風呂から出ていった。

その後、無事にロストロギアを回収し一行は地球を後にした。

大護はスバル、ティアナ、フェイトの後ろに3人の人がいるのを知つていてる。

## 第十六話 その日機動六課（前編）

「公開意見陳述会？なんでそんなのにオレが出なきゃならんの？」

訓練終了後。大護ははやてに呼び出され部隊長室にいた。

「地上本部から言われたんや。大護くんも出てくれつて」

「・・・オレを囮にしようつて腹か・・・」

「それもあるけど、たぶんオーバーサス。この世界じゃありえない人を調べたいってのもある」

「・・・一応人間じゃないからどうとも言えないが。出るしかないか・・・」しつちじや肩身が狭いからな・・神威が来るからホントは外の警備が良いんだがそもそも言つてられないか

「ゴメンな大護くん・・・」

「なあに。いざという時は自分でなんとかすっから」

大護は部隊長室から出た。

廊下を歩いているなか考えていた。

（・・・ウラがある。おそらくスカリエッティと地上本部の上層部は繋がつていてる。それよりまずは神威の方か・・・）

大護は過去の経験から考えていた。

「面倒だな・・・」

廊下を歩いていく。

？？？。

「オレはあいつを足止めすれば良いんだろ」

神威はスカリエッティと話していた。

「ああ。頼むよ。彼の相手ができるのは君だけだからね」  
あるスイッチを押しガジェットを起動させる。その後ろには戦闘機  
人と呼ばれる少女12人がいた。

管理局地上本部公開意見陳述会当日。

大護ははやて、シグナム、フェイトとともに陳述会に参加。もちろん大護本人はやる気なし。一本の愛刀はスバルに預けてある。車から降り赤いカーペットの上を歩く。周囲からカメラのフラッシュがたきつける。

（・・・あーめんどくせ〜）

大護はすでに半分バリアジャケット。

その頃。スバル達フォワードのメンバーは警備に集中していた。

スバルの手には大護の愛刀の他になのは達隊長達のデバイスも持っている。戦刀と雷龍丸を持っていると

「・・・なんか重みを感じる・・・なんだろう。これが大護さんの覚悟なのかな？」

スバルは一本の刀から何かを感じた。その時、大護がフォワードの4人に言つた言葉を思い出した。

『刀は主を撰ばない。覚悟、意志、思い・・・そんなのを感じ取つて自分に見合う心を持つた奴にだけ力を貸すんだ。そして、その刀は本来の姿を映し、主の心を鏡のように映す』  
「・・・戦刀と雷龍丸は大護さんを認めたから力を貸したんだ・・・

「大護の強さに改めて拳を握るスバルであった。

陳述会会場。

大護は寝かけていた。前口に、ヴィヴィオと寝て、変なところを叩かれたりしたため少し寝不足。

「…………」

隣に座っているはやてが大護の足を抓つた。

「！？！？」

目を覚ます。

「ちゃんと聞いといてや」

「……興味ない。あのオッサンの言つてるのは力による支配と同じだ……」

今演説しているのは地上本部のレジアス・ゲイズ中将。

「確かに強大な力は必要かもしれない……でもそれは人々が真に望んでいる平和じゃないと思うけどな……」

戦争を経験した者が言える言葉。はやはてはそう実感した。

「ドカーン！……！」

突然爆発音が鳴り響いた。

「なんだ！？」

周りがざわつく。

「……占いは当たりますか……。洒落になんねえな」

大護の眠気は覚めたようだ。

「何が起きたんや！？」

はやても若干焦っている。

「落ち着け。念話ができるねえとなるとAMFが展開されている……」

。で、閉じ込められたなら制御系のどこが攻撃された・・・

大護は冷静に状況を分析していた。

「早急に賊を捕らえる。会は中断せんぞ」

レジアスが言つている。

「・・・・・いるなら出てこい！――！」

大護がいきなり大声を出した。

「やっぱりわかつてたか・・・」

空間が歪みそこから柳瀬 神威が現れた。あたりがざわつく。

「・・・何のようだ？」

「待つてるぜ・・・始めよう・・戦いを！」

そう言つて神威は消えた。

「はやて。オレは神威の相手をする。後は頼む」

大護は目を閉じる。

「戦刀・・・雷龍丸！」

念じると一本の刀が召喚された。大護は入り口に行き手を当てる。

「壊すか・・・」

「ちょ！大護くん！？」

はやてが驚く。

「緊急事態だ！それにこの程度なら素手で壊せる」と言つて大護は拳に力を籠める。

「天龍剣 無手之型 鯉燕」

扉を殴るとホントに壊れた。

「んじや。行つて来る」

大護は走り出した。

大護は窓から飛び降り神威を探す。

「待つていたぜ」

すでに空刀“虚空”と十鉄を握っている神威がいた。

大護も戦刀と雷龍丸を解放し構える。

「さあ・・・始めよう」

その瞬間。 大気に轟音が響き渡つた。

## 第十七話 その日機動六課（後編）

空はどんよりとしている。その中に2つの影。その2人はかつては親子だった。

柳瀬神威と柳瀬大護。

「・・・・・」

大護は無言で雷龍丸と戦刀を構える。言いたいコトがないわけではない。ただ、今の神威には何も通じないと知っている。

「だんまりか？じゃあ始めようぜ・・・！」

神威は空刀“虚空”と十鉄を構える。一本とも長刀。沈黙。先に動いたのは大護だった。鍔せり合いに持ち込む。前回の対戦とは違う。両者本気。

「瀑雷閃！」

回転剣舞で虚空と十鉄を弾く。

「空魔・飛鮫撃！」

虚空を振る。鮫が大護を襲う。

「雷天・斬！」

それを斬り払う。再び距離ができた。

「お前・・・廻を戦つてたんだな。その力。見せて見ろ」

「言われなくても！」

大護は戦刀と雷龍丸を重ねる。蒼い魔力が大護を包む。

「限界突破！」

一本の刀が1つになり現れた一本の刀。

「戦雷！」

白い刀。

「限界突破・・・できたのはお前と橘嵐と凪の息子だけか・・・。  
おもしろい！！」

神威は一本の刀を大護に向ける。

構える2人。

2人が消えた。見えるのは蒼と黒の軌跡だけ。2つがぶつかり合つ時に轟音が大気に響き渡る。

「ハアアアアアアア！」

「デヤアアアアアアア！」

両者退かぬ剣撃。大気に響く轟音は先の戦闘の比ではない。最強対最強の戦い。

「虚空・・・」

「龍天・・・」

2人が距離をとり必殺技のためにに入る。

「一閃！！」

「月破！！」

黒と蒼の刃がぶつかり行き場を失つたエネルギーが周囲に衝撃波となつて拡散する。

「流石だ・・・。短期間で大天使の力をモノにしただけはある。だが、その力はまだ入り口でしかない。」

「なに？」

大護は戦雷を構え直す。その時、神威からただならぬ気を感じた。大護の直感が『やばい』と感じるモノを

「本当の墮天使の力見せてやるよ・・・」

神威から黒い魔力が溢れる。その色とは違う灰色の天使の翼が右側の背中から現れた。

「墮天使ルシフェルの力見せてやる」

神威が大護に襲い掛かる。虚空の斬撃を防ぐ。  
(桁違いに上がつてやがる!)

そう神威の斬撃が上がつてているのだ。

「ハアアアア！」

さらに押す。大護は一旦距離を取る。だが

「甘い！！」

さらに加速し追撃。

「かみごろし神御呂死」

十鉄の一撃を受け大護は吹き飛ばされる。

「ぐあつ！」

地面に激突する。

「これが墮天使、戦帝の天使の力か」

大護は立ち上がり再び空へ。

「まだ覚醒できなか？まあ良い・・・。オレの今日の仕事は終わりだ」

神威が空間の歪みに入していく。

「ああ。後お前の家みたいな場所。もう終わりだな」と言つて神威は消えた。その言葉に大護はハッとした。

「まさか！」

雷天を使い機動六課に向かう。

アジトに戻った神威は壁にもたれ掛かった。

「くつ・・・！墮天使の力を使つたとはいえあれほどの力か・・・」

斬られた。いや、戦雷の龍天月破がかすつただけ。

「かすつてこの威力・・・。あの竜人の技か・・・」

機動六課の隊舎は火の海だつた。大護が向かつた時にはキャロが一頭の竜を召喚してガジェットを破壊した。幸い死者は出でていない。

「フウー・・・・」

安堵のため息が出る。

だが、ヴィヴィオが何者かに連れ去られた。

はやての指示で地上本部のガジェットの殲滅中に

「お前が柳瀬大護か？」

ナンバーズN。3トーレがいた。

「何のようだ？」

背後にあるトーレに問う。その言葉には何かがあった。

「ドクターの指示で貴様には死んでもらつ！」

構えるトーレ。場所は地上。

「・・・お前・・・この状況わかつて言つてんの？」

辺りにはガジェットの残骸。戦刀で斬つたモノ。しかし、今は戦刀を仕舞つている。

「オレさあ・・・今怒つてんだ・・・。今から5秒やつから逃げな

大護の言葉にトーレは

「逃げる？馬鹿め。その言葉！後悔するが良い！！」

襲い掛かるトーレ。

「・・・マジで馬鹿だな・・・」

大護の本気のパンチがトーレの腹にヒットした。くの字になり吹っ飛ばされるトーレ。何回転かし転がる。

「ぐ・・あ・！何なんだ・・この力は・・」

「だから言つたろ。逃げろつて」

大護がゆっくり歩いて来る。その足音はトーレには死のカウントダウンに聞こえる。

ゆっくり刀を抜く。

その時。

「トーレ姉！－」

ナンバーズN。・6セインがディープダイバーでトーレを救つた。

「逃がしたか・・・」

その後大護は修羅の如くガジェットを倒した。

スカリエットのアジート。

「トーレがやられたよ。君の息子に」

「だから言つたんだ。この作戦でアイツに近づくのはオレだけで良いって・・・。で? そのトーレは?」

「別に大きな問題はない。むしろチنكのほうが問題だ。タイプゼロ・セカンドにやられ基礎フレームまでやられたからね」「そうか。オレは寝るから。しばらく起こさないでくれ」「わかった」

神威はスカリエットのいる部屋を出て自室に向かった。

この動乱で機動六課は壊滅的な被害を受けた。そして、行方不明の欄にギンガとヴィヴィオの名前があった。

## 第十八話　迷つてゐるなり・・・

地上本部襲撃から数日後。

大護は1人木の上で考え方をしていた。

（墮天使の力・・・）

神威のルシフェルの力に大護は太刀打ちできなかつた。

（オレはまだ・・・迷つてゐるのか？だつたらオレは・・・）

『迷つてんなら、自分のしたいコトをすれば良い！そうすれば道は見えるてくる』

姫矢の言葉が耳に聞こえた。

（そうだな・・・迷つてたつて始まらない！今やるコトをやれば良い！！）

大護は勢いよく木を飛び降りた。

機動六課は壊滅的な打撃を受けていた。フォワードメンバーもティアナを除き聖王病院。  
そんな中なのはは1人作業をしていた。ヴィヴィオをさらわれたのに・・・

機動六課ははやての提案でアースラという戦艦に仮の捜査本部を移し、『ヴィヴィオとギンガの救出』を名目にスカリエツティ一味を追うコトになった。

「大護くん。大丈夫なんか？」

大丈夫だ。悩んでいてもしょうがない。迷ったなら自分の信じる道を行けば良いだけだ

通信を見ている限り大護は立ち直つたようだ。

「そつか。」

はやて。姫矢さんが言つたんだ『迷つてんなら、自分の信じる道を行けば良い』って。そもそも部隊長のお前が悩んでどうする？じや、切るぞ

大護との通信が切れ

「確かに。うちが悩んでいてもしょうもない！今するコトをするだけや！」

その夜。大護はなのはのいる屋上にやつて來た。

「なのは」

「大護くん・・・」

「そうやつていじけてもヴィヴィオは帰つて来ない」

「！？」

「影義もそれで悩んでいた。その時オレ達は何をした？」

なのはは大護の過去を思い出した。

「奪われたなら奪い返せば良い！それにヴィヴィオの母親だろ？」

その言葉なのはは吹つ切れたようだ。

決戦まであと少し。  
その時、大護は一つの選択をする。

## 第十九話 決戦へ

古代ベルカの戦船『聖王のゆりかご』が出現し、ミッドチルダは混乱の渦に巻き込まれようとしていた。

大護はゆりかごを見て

「やるコトは一つ・・・だな」

出撃前。大護はフォワードの4人と話していた。

「さて、なのは達のバックアップなしのミッションだ。今まで鬼教官の特訓を耐えて来たんだ。あとは自分らの信じる道を行け」

「「「「はいっ！」」」

大護の言葉に4人は返事をし、へりへ向かつた。

「大護くん。ありがとね・・・・・あの言葉すぐ元気が出た」  
なのはが言つ。

「絶対ヴィヴィオを救つてね」

フェイドが。

「帰つて来いよーお前にまだ礼をしてないんだからなーー」  
ヴィータが。

「「チラもお前と一緒に打ちをしたいからな」シグナムが。

4人ともそれぞれの場所に飛んで行く。

「・・・・・」

大護は黙つて空を見ていた。青い空はどの世界も変わらない。

「行くか・・・・・。オレはオレの道を行くまでだ！」

大護も勢いよくハツチを飛び立つた。

フェイドはスカリエットのアジトへ。

シグナムはガジェットの迎撃。

はやは航空魔導士の指揮。

なのは、ヴィータ、大護はゆりかごへ突入する「ト」になつてゐる。

ゆりかご内。

神威は・・・・・

「来たか・・・・・」

聖王の間の壁に寄り掛かり目を閉じて鼻歌を口ずさんでいた。

ゆりかごからはガジェットが、何機も出て来る。

「陣形崩したらあかんよ！」

はやは指揮をとつてゐる。

はやて！部隊を一旦引かせてくれ！

大護から念話が入つた。

何するや？

翼ぶつ壊して上昇を止める！

# そんなの無理

はやてが後ろを見ると大護が戦刀に雷の魔力を圧縮しているところだった。

魔導士部隊！一時ラインまで下がって！ドテカイの来るでーー！」

はやての指示で部隊が下がつて行く。

神威　・・・・・  
挨拶代わりだ受け取れ！！

臣神殺し（テイタノクトン）――――

戦刀に込めた魔力の槍を投げる。  
大戦期に大護が敵の殲滅に使った  
技だ。

AMF濃度が  
かなり高い。  
ゆりかご内部への潜入口が見つかり3人は突入した。

ス語 たのには無いの図、

大護達は途中ナンバーズN0.10デイエチに遭遇したがなのはが  
リミットを一段階外し難無く撃破。

そして、聖王の間には。

### 第三回 ウンデといひうか

神威が空刀“虛空”と十鍼を構える。

限  
界  
突  
破  
！  
！

戦雷を構える大護。

「ヴィヴィオ・・・・・・」

なのははレイジングハートを構える。

親子の対決・・・・・。その結末は?

第一十話 墮天使と家族（前書き）

かなりはしょつてしまつた。

すみません。

もうすぐ終わります。

## 第一十話 境天使と家族

ゆりかご聖王の間。

そこでは親子の戦いが繰り広げられていた。  
高町なのは 対 ヴィヴィオ。

柳瀬 大護 対 柳瀬 神威。

なのははここに来る途中に時いた。探知スフィアでクアットロを探  
りながら、ヴィヴィオと戦っている。

「さあ・・・第3ラウンドといこうか」

神威が大護に告げる。その瞬間、2人の姿が消えた。

ガキン！

と衝撃波と刀同士がぶつかる音が聞こえる。

なのははバインドなどの捕縛魔法でヴィヴィオの動きを封じるが聖  
王モードの彼女には効かない。

「ヴィヴィオ！ママだよ！」

「あなたは私のママじゃない！・・・ママをかえして！・・・  
ヴィヴィオになのはの姿は写つてない。

「悲しいな・・・・・親子同士の戦いは

神威は墮天使の姿になる。

「あの時のオレ達も今も同じだ！」

大護は戦雷に龍天月破の魔力を纏う。

「・・・・知つてゐるか？龍天月破を撃てる刀は三本しかない。お前の戦刀。宮田の叢雲牙。そして、俺の虚空。この三本の刀は互いの抑止力と造られた刀だ。で、龍天月破を最初に使つたのは・・・・この俺だ！」

「なに？」

「俺が宮田信次に教えたんだよ。『龍は天の刃となり月を破る』・・・・墮天使の力と龍天月破・・・・見してやるよ」

神威は虚空を高くあげる。その周りの空気が揺れる。まるで虚空と共に鳴しているように

大護も戦雷を上段に構える。蒼い魔力が戦雷に集まる。

「「龍 天 月 破！！」」

2人の声が重なり、黒と蒼の龍天月破がぶつかり聖王の間が揺れる。威力は互角。波動が爆散した瞬間両者は斬り掛かる。

鎧ぜり合い。

「空風流天龍剣か・・・・・やるじゃいか」

余裕の神威。逆に大護は余裕がない。

「確かに前は天使の力を使えてはいるだが！お前のその力は不完全なんだよ！！」

神威の斬撃が大護を斬つた。だが、大護もこの程度では終わらない。

「デヤアアアアアアアアアアアア！」

よろけたが踏ん張り神威に斬撃を食らわせた。

「なにつ！？」

「見つけた・・・・！」

なのはがクアットロの居場所を見つけヴィヴィオを結界に閉じ込め

る。 レイジングハートをある場所に向ける。破壊力は大護でさえも認め

壁を撃ち抜きクラッタロに直撃した。ヴィヴィオの洗脳も解けたが戦闘は終わらない。

一  
二

神威がウイウイオを斬つた

一 嘘

言葉がてなし

倒れたウイウイ才を神戻はなのに渡した

神威が言つ。 なほがいがい才を抱きしある。

「えっ！？」

ヴィヴィオがしゃべった。

あの時神威

「あの時神威が斬つたのはヴィヴィオではなく、レリックだったのだ。  
「スカリエッティもナンバーズも捕まっちゃったか・・・」

神医方言二

「なのは。ヴィヴィオを連れて脱出する二

「でも！？」

「これは才人

大護は2人に微笑む。

「心配すんな・・・・必ず戻る」

「・・・・・うん！絶対戻つて！！」

なのははそう言つとヴィヴィオを抱き脱出した。

残った2人。刃を交える。

「凪さん聞いた！3000万年前のコト……」

「！？」

「なぜ！人間を助けた！」

距離を取る神威。

「…………人間に憧れたからだ。どんなに倒れても前に進む人間にな。でも、裏切られた！人間にも！同じ仲間にも！恋人にも！だから俺は墮天使ルシフェルとして人間を！！この世界を壊す！！」

「…………そなならケリをつけよう。過去のコトから」

大護は戦雷を構えた。

アースラの甲板にはそれぞれの役目を終えた機動六課のメンバーが集まっていた。

「大護くん…………」

なのはは今だゆりかごの中で激戦を繰り広げている大護を心配していた。

ドカアアアアン！！！

突然ゆりかごが爆発し一本の光がコチラに飛んで来る。

「大護！？」

フェイトが言つたが

「残念だつたな。アイツは死んだ」  
現れたのは墮天使ルシフェルだった。

## 第一十一話 柳瀬 大護

大護はゆりかごで倒れていた。

神威の墮天使ルシフェルの圧倒的な力の前にやられ倒れてしまった。

血をかなり流している。

走馬灯なのかな？

『大護！』

幼い頃のフェルトの声。

『元気のでおまじない』

最後の母さんの声。

『お前の護るモノを見つける』  
信次の声。

『オレ達。もう友達だろ？』  
憐の声。

みんなの声が聞こえる。

『あきらめるな！』

姫矢・・・さん？

『立て大護！お前は俺と信次の弟だろーー！』

『大切なのはどんな自分も受け入れる口。お前ならできる』

『大護』

母さん・・・・・

『元気のでおまじない』

あつたかい・・・・・。

あきらめない・・・・・！

まだオレにはやらなきやならないコトがあるーーー！

「さて・・・・・終わりにするか」

神威が虚空を向ける。

「じょせん、アイツは天使にはなれなかつた。アイツと同じ技で消してやるわ」

虚空に黒い波動が纏う。

「大護くん！！」

なのはが叫んだ。

「さよならだ！」

虚空を振ろうした瞬間蒼い波動が神威とアースラの間を通った。

全員がゆりかごの方向を見る。

「バカな！？」

「大護・・・・・・」

「パパ！」

「大護くん・・・・・・」

フェイト、ヴィヴィオ、なのはが見た場所には

蒼き翼を広げ飛ぶ天使 柳瀬 大護が。

「悪いな。まだ死ねないんでね」

大護は戦雷を構える。

「お前は・・・・・いつたい」

「オレは墮天使ルシフェルと大天使ラファエルの血を受け継ぐ者！！

神名“ルフィーラ”！！」

「ルフィーラだと？お前が大天使を撰んだならな！！！」

神威が襲い掛かる。

大護は戦雷で防ぐ。前回のように力負けはしない。

「ハアアアアアア！！！」

「なめるなああああ！！！」

蒼と黒の軌跡が交差するたびに衝撃波が。大気が揺れる。

その戦いを見ていたはやでが

「そうか！選択つてそういう意味やつたんや！！」

「はやてどうした？」

ヴィータが聞く。

「カリムが預言で『本当の選択をする』って言うてなそれは大護くん自身が本当の自分を見つけるコトやつたんや！？」

「では大護は」

シグナムが聞く。

「たぶん、今まで心の奥底で悩んでいたんや……天使と堕天使の間に生まれた自分を」

「ハツ！ やるじゃねえか！！ でもな！ 護り切れるか！？」

神威が十銃に魔力を集中させる。

「まさか！！」

大護は神威がアースラごと吹き飛ばすのに気がつく。上から凄まじい殺氣と魔力の圧力を感じる。

「神御呂死！！！」

黒い波動がアースラを襲う。

「ハアアアアアア！！！」

大護は翼を最大に広げアースラを包んだ。蒼い翼に黒い波動が。

「グアアアアアア！！！」

流星群とも呼べる攻撃が終わり翼を広げる。

「ハア・・・・・ハア・・・・・・・」

大護は神威と対峙する。

「なぜ人間を助ける！？」

神威が怒鳴る。

「オレが天使でもあり人間でもあるから。あと

人間が好きだから！！」

その蒼い目を信念を宿した眼をしていた。

「もう終わりにしよう！」

大護が戦雷に魔力を込める。蒼い魔力が集まる。

「いいだろう！！！」

神威も虚空と十鋏に魔力を込める。

両者を中心に蒼と黒い渦ができる。

（オレには仲間がいるたとえ遠く離れていてもオレを思ってくれる人がいる！！だからオレは！！！）

両者構える。

「デヤアアアアアアアア！！！」

「ハアアアアアアアア！！！」

勝負は一瞬でついた。

十鋏が折れ、虚空が落ち一本の刀が粒子となつて。

神威が落ちていく。大護は右手を掴んだ。

「なぜ俺を助ける？」

神威はすでに瀕死で粒子になつていく。

「たとえあんなコトしてもあなたはオレの父さんなんだ」

「！？お前は許してくれるのか・・・・・・」

神威の言葉に大護は黙つて頷いた。

神威は微笑んだ。それは大護が幼い頃に見た笑みだった。

「ありがとう・・・・父さん・・・・・・」

神威はそう言つて白い粒子となつて空へ消えた。

大護は空を眺め

「さよなら・・・・父さん・・・・・・」

アースラに戻つた大護。

「おつかれ」

なのはが言った。

「ああ・・・・・」

『世界は繋がつた』

突然声が聞こえた。

「母さん・・・・・・・」

その声の主は大護は柳瀬 ユフィだつた。機動六課のメンバーの前

に天使ラファエルの姿の彼女が姿を現した。

『大護の世界とこの世界が繋がつた。』

そう言うとユフィは消えた。

「お別れのようだな・・・・・・・」

「・・・・・えつ！？」「・・・」

全員が驚く。

「お別れつて行つちゃうの！？」

フェイドが。

「ああ・・・・・・・。でも世界は繋がつた。またいつか会える」「行つちゃやだよ！パバ！」

ヴィヴィオが大護に。

「ヴィヴィオ・・・・・・・。泣かないって約束したる？心配するな。いつでも会える。お前が心でそう願つているなら」「大護はそう言って、ヴィヴィオの頭を優しく撫でる。「元気でのおまじない」「うん！」

ヴィヴィオは笑顔だつた。

「世話になつたな」

メンバー全員の顔を見る。

「ううん、じがお世話をなつたよ」

フェイトが。

「きつと会こに行く！だから待つててな！」

はやてが。

「アイスおいじてねえから待つてるよー。」

ヴィータが。

「元氣でな」

シグナムが。

「ありがとうござりますー。大護さんおかげで勇気がでましたー。」

スバルが。

「今度ツーリング行きましょー。」

ティアナが。

「バイク乗せてくださいね」

エリオが。

「ま、た空飛びましょー」

キャロが

「また会えるよね・・・・・会こに行くからヴィヴィオとみんなと一緒に！」

なのはが。

「そうか。・・・・・じゃあな」

大護は翼を広げ空へ、そして、異次元の空間へ消えた。

「行つちやつたね・・・・・」

なのはが言った。その目には涙が。

「でも、いつかきっと会える」

フェイトが言った。

「だから、準備せんとなみんなーー！」

はやてが言った。

連合國領内  
蓬萊山・晃憲寺

「ここでは十三隊がノアとの決戦後、大護の帰りを待っていた。」  
「もう9ヶ月か……」

影義が呟いた。

その辺で止ま

「その隣で左腕の様子を見ている新庄。」  
「ア、イ、ツ、・・・・死んじまつたのかな？」

## 本を読んでる信か

菱が聞く。

「たしかにそうだな」

新庄はそう語りて窓の外を眺めた。

「ニニシテ」

晃憲寺の近くにある丘にフェルトは1人夕焼けを見ながら大護の帰

りを待つていた。

「おのれ、不思議だが、おのれの隣には風と懐かしい

「なにが？」

「今日、大護が帰つて来る。そんな気がするからよ」「それ今日みんな言つてるよ。フェルト！オレ達先に帰つてるよー！」

！

「わかつた。私はもうちょっとだけいる」

フェルトの声に2人は丘を後にした。

「大護・・・いつ帰つて来るの？」

フェルトが呟くと後ろに羽根が羽ばたく音が聞こえた。振り返ると「ただいま・・・」

白髪に蒼い瞳、そして、蒼き翼の青年がいた。

フェルトは言葉を失い彼に駆け寄り抱きしめた。

「おかえり！大護！」

「フェルト」

大護は優しく彼女を抱きしめた。

「帰つて來たね」

「今日は宴会だな」

憐と嵐は微笑み寺へ戻つた。

大護とフェルトは夕焼けの中抱きしめ合い。唇を重ねた。

大護はようやく理解した。

自分が護るべき存在に・・・。

彼は歩き続ける。

未来へ

第一十一話 柳瀬 大護（後書き）

次回『エピローグ』

あれから1年後の話しだす！  
最終話です！

最終話です！

あれから1年後。

大護達の世界は時空管理局に新たな世界として登録された。

異なる魔法文化を互いに理解し合い同じ道を歩むこととなつた。

と言つても最初に管理局に入るコトを拒否していた元老院をあの7人が無理矢理同意させたとか

そして、今日は特別な日。

とあるオステイアのとある教会。ここで、柳瀬大護とフェルト・グレイスの結婚式が開かれるコトとなつた。

今日は元機動六課のメンバー、十三隊、聖王教会からカリムとシャツハ、保護されたナンバーズもいる。

ナンバーズは聖王教会組とナカジマ家組に分かれている。

大護の天使の力のおかげで8人に植え付けられていたスカリエッティの細胞は消えたらしい。そして、なぜか、大護に懷いている。

「フルトちゃん。ホンマに綺麗やわ」

控室ではやが言つ。

「そ、そりやか?」

ウェディングドレスに身を纏つたビーストクオーターのフルトは照れている。

「そうだよー綺麗だよ

なのはも褒める。

「ウンウン」

フェイトも納得している。

このウェディングドレスをデザインしたのは彼女達の姉貴分の凌だ。

それしばらくして。

「それでは新郎新婦の入場です」

牧師のカリムが言うと

扉が開き、白のタキシード姿の大護とウェディングドレス姿のフルトが入つて来た。

「大護つて何着ても似合つよな?」

嵐が呟いた。

「元来、様々な事を行わければいけませんが、——では省略をせ

いただきます」

誰も否定しない。

カリムはまず大護を見て

「では、新郎、柳瀬 大護」

「はい」

「汝はいつ如何なる時であるうと新婦と共に生き、悩み、歩み続けることを誓いますか？」

「誓います」

次にフェルトを見て

「新婦、フェルト・グレイス」

「はい」

「汝はいつ如何なる時であるうと新郎と共に生き、悩み、歩み続けることを誓いますか？」

「誓います」

「・・・それでは、誓いを示す指輪の交換を」

2人は向き合う。その時、2人とも顔を赤らめる。交換を終え

「それでは・・・神の御元で誓いのキスを・・・。」

「大護。大護は幸せか？」  
フェルトが聞く。

その言葉に大護は蒼き翼広げた。

「幸せだからオレはここにいる……今はそれだけでいいんじゃないか」

大護は優しく微笑み。

フェルトと唇を重ねた。

それが答えだと言わんばかりに。

それから、晃憲寺で一次会。それは夜遅くまで続けられた。

フェルトは大護と壁と一緒に寄り掛かり天使の翼に包まれ寝ていた。他のみんなも大切な人や仲間と共に寝ていた。

それを見ていたお頭は

「……神威、ユフイ。お前さん達の未来は……」

何かを呟き寝ているみんなを見ていた。

その光景を満月の光りに包まれ、8つの光りがそれを優しく見守つていた……

やっと終わりました！

過去編が異常に長かった！

この物語の続編として、『HAROKE』の内容を加えた。20年後の物語を書こうかと思います！

じつじつ期待！

予告。

あれから20年後。新たな世代へ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9426m/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～蒼き翼の天使～

2011年3月2日09時32分発行